

高柳原遺跡

— B・C地点の調査 —

町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書 34

児玉町文化財調査報告書 第39集

たか やなぎ はら い せき
高 柳 原 遺 跡

— B・C地点の調査 —

町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書 34

2005

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会



序

町内で、長年に亘って行われてきた「ほ場整備事業」もついに埋蔵文化財の宝庫ともいっても過言では無い金屋の台地にまで進んで参りました。これら貴重な文化財が農業構造改善という開発によって消滅してしまうのは忍びないことではございますが、人が生活していくうえで致し方ないことであるのかも知れません。

しかし、事業に先立つ発掘調査が終了し、我が郷土である児玉の大地に刻み込まれた、先人達の歴史が紐解かれた時、その壮大なる時空の営みに、つい我も忘れる一時の時間が流れていくことも事実でございます。

秩序が後から就いてくるという矛盾が当たり前になった今、ひとたび振り返り古に想いを馳せる時間も必要と思われれます。

この調査報告書は、児玉町先人達の生活を垣間見ることができの一冊であり、地域の住民の皆様はもとより、教育や研究にたずさわる皆様に郷土の文化財が保護・活用されますよう役立てて頂ただければ幸甚に存じます。

また、この調査報告書が刊行出来ましたことは、町民の皆様をはじめ、埼玉県本庄農林振興センターならびに関係諸機関のあたたかいご理解とご協力の賜であり、深く感謝するしだいでございます。

平成17年3月9日

児玉町教育委員会
教育長 雉 岡 茂

例 言

1. 本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字高柳字原、同大字高柳字宇留井、同大字金屋字倉林前に所在する高柳原遺跡B・C地点の発掘調査報告書である。(埼玉県遺跡地図 No.54-083 高柳原遺跡)
2. 発掘調査は、中山間総合整備事業(秋平・阿久原地区)ほ場整備(高柳池下地区)に先立つ町内遺跡保存事業として、平成12・13年度に各関係機関の協力をえて児玉町教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査および整理・報告書に要した経費は、町費・国庫補助金(文化庁)・県費補助金(埼玉県教育委員会)および委託金(埼玉県)である。
4. 発掘調査の担当は、高柳原遺跡B・C地点ともに徳山寿樹・松澤浩一があたった。また、各遺構の番号は高柳原遺跡A地点からの通し番号である。
5. 発掘調査及び本書作成にあたって下記の方々や機関から御助言・御協力を賜った。(順不同、敬称略)
赤熊浩一、荒川正夫、石岡憲雄、井上尚明、井上慎也、岩本克昌、梅沢太久夫、太田博之、大屋道則、岡本一雄、小野美代子、書上元博、金子彰男、雉岡恵一、小宮山克己、駒宮史朗、坂本和俊、桜井和哉、篠崎 潔、外尾常人、高橋一夫、高村敏則、田村 誠、利根川章彦、鳥羽政之、永井智教、中村倉司、中沢良一、長滝歳康、長谷川勇、長谷川典明、平田重之、増田一裕、松本 完、丸山 修、水村孝行、宮崎朝雄、宮本直樹、矢内 勲、山口逸弘、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、埼玉県本庄農林振興センター、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、児玉郡市文化財担当者会、東海大学考古学研究会
6. 本書の執筆分担については、第Ⅱ章を尾内俊彦、第Ⅲ・Ⅳ章を徳山寿樹、第Ⅴ章を鈴木徳雄がそれぞれ執筆した。また、付章の第1号鍛冶関連遺構検出の鉄片等の分析については、埼玉県埋蔵文化財調査事業団のご協力を得るとともに、大屋道則氏の玉稿を頂戴した。
7. 本書の作成は、下記の整理参加者の協力を得て本文編集を徳山寿樹が行い、遺物の実測および編集を松澤浩一が行った。また、遺物写真は尾内俊彦が撮影し、遺構写真は尾内・徳山が撮影した。(順不同、敬称略)
新井千都子、新井嘉人、磯崎勝人、大熊季広、倉林美紀、倉林八重子、黒沢律子、熊谷由美子、渋谷裕子、田口照代、中原好子、逸見百合子

発掘調査の組織

平成12年度（発掘調査）

調査主体	児玉町教育委員会
	教 育 長 富丘 文雄
事 務 局	児玉町教育委員会社会教育課
	課 長 前川 由雄
	課長補佐 永尾 清一
	係 長 鈴木 徳雄
	主 任 恋河内昭彦
	主 事 大熊 季広
担 当 者	主 事 徳山 寿樹
	主 事 松澤 浩一

平成13年度（発掘調査）

調査主体	児玉町教育委員会
	教 育 長 富丘 文雄
事 務 局	児玉町教育委員会社会教育課
	課 長 清水 満
	課長補佐 永尾 清一
	係 長 鈴木 徳雄
	主 任 恋河内昭彦
	主 事 大熊 季広
担 当 者	主 事 徳山 寿樹
	主 事 松澤 浩一

平成16年度（整理・報告）

調査主体	児玉町教育委員会
	教 育 長 雉岡 茂
事 務 局	児玉町教育委員会社会教育課
	課 長 笠原 義晴
	課長補佐 福島 一順
	係 長 鈴木 徳雄
	主 任 恋河内昭彦
	主 事 大熊 季広
担 当 者	主 任 徳山 寿樹
	主 事 松澤 浩一

目 次

序

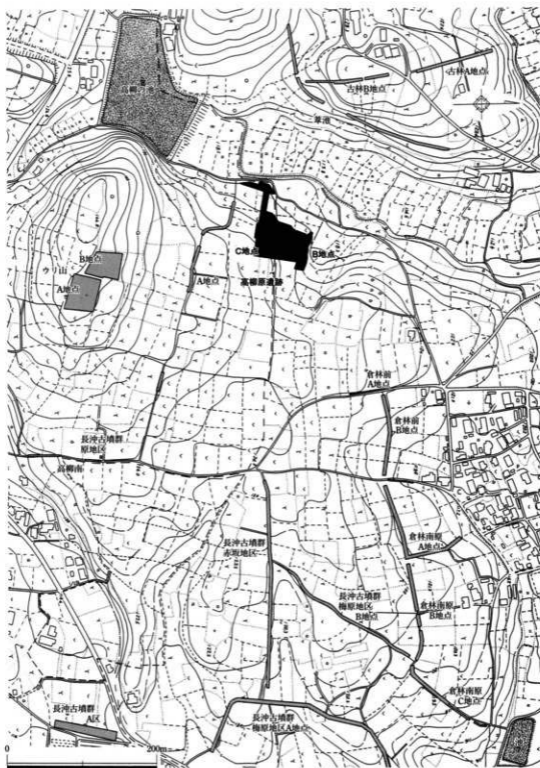
例 言

目 次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境	3
1. 地理的環境	
2. 歴史的環境	
第Ⅲ章 高柳原B地点の調査	5
1. 遺跡の概要	
2. 遺構の概要	
第Ⅳ章 高柳原C地点の調査	13
1. 遺跡の概要	
2. 遺構の概要	
第Ⅴ章 児玉丘陵における地域社会の形成	77
1. 土地利用形態と歴史的微候	
2. 中世城館と地域の変化	
3. 中世墓域と伝統的地域社会	
付 章 高柳原遺跡B地点出土の金属生産関係遺物について	111

写真図版

報告書抄録



第1図 高柳原遺跡B・C地点位置図

第I章 発掘調査の経緯

本報告にかかわる発掘調査は、平成12年度の県営中山間総合整備事業（秋平・阿久原地区）ほ場整備（高柳池下地区）に先立つ埋蔵文化財保存事業として実施したものである。

調整の経緯

埋蔵文化財保存については、事前協議に基づき埼玉県文化財保護課、埼玉県農村整備課、埼玉県本庄農林振興センター及び児玉町教育委員会が平成11年8月および12月に平成12年度土地改良事業等に伴う埋蔵文化財の取り扱い調整会議を行った。この結果、平成12年度工区には、周知の埋蔵文化財包蔵地である高柳原遺跡（No.54-083）があり、埋蔵文化財に影響の及ぶ現状変更が実施される区域について発掘調査による記録保存の措置をとることになった。

発掘の経緯

児玉町教育委員会より平成13年1月11日付児教杜第153号で発掘調査通知を埼玉県教育委員会に進達した。平成12年度の発掘調査に関わる事業実施期間は、平成13年1月15日から平成13年3月30日である。なお、平成12年度の県営中山間総合整備事業（秋平・阿久原地区）ほ場整備（高柳池下地区）の計画が変更となり事業実施が繰り越したため、平成12年度事業として繰越明許して事業実施した。平成12年度（繰越明許）事業については、埼玉本庄農林振興センター、児玉町教育委員会が、埋蔵文化財の取扱いについての事前協議を行い、さらに埼玉県文化財保護課、埼玉県農村整備課を交えた調整を踏まえ、これらの協議に基づいて現状変更される施工区域について発掘調査による記録保存の措置を継続実施することになった。この発掘調査に関わる事業実施期間は、平成13年10月29日から平成14年3月29日である。

（事務局）





第2図 高柳原遺跡位置図

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境 (第1・2図)

本遺跡は、埼玉県北西部に位置する児玉郡市内の児玉町大字高柳字原他に所在している。児玉町の地形は、南北に長く延びる町域のうち北から南にかけて沖積平地・丘陵部・山地と変化しながら連続しており、その中で町の中央部を東西に横切る様に児玉丘陵が存在している。平地部には第三紀の残丘である生野山丘陵が独立丘として存在し、丘陵部は徐々に高度を増しながら山地部に接続している。本遺跡はその地形の内の児玉丘陵上の一角に立地する。

児玉丘陵

この丘陵部は、町の南側を占める上武山地より派生しており、南を高崎・八王子構造線によって区切られ、東を小山川(旧身馴川)により松久丘陵と分断されており、西は群馬県との県境を成している神流川まで続いている。丘陵部の北側には台地の先端部に沿って東西から北方に流れる女堀川(旧赤根川)が存在し、女堀川に向かって流下する多くの小河川によって開削された谷戸により丘陵の多くが舌状台地状に形成されており、さらに多数の湧水点から流れ出る小流による支谷が数多く錯綜しながら存在して丘陵の形状を複雑なものにしている。

2. 歴史的環境 (第1・2図)

この児玉丘陵の上や斜面部には、原始、古代、中世等の遺跡が数多く立地しており、後期旧石器から歴史時代まで幅広い時期の遺構が至る所で確認されている。その中でも主として縄文時代から平安時代に至るまでの時期のうち、縄文後期から弥生中期までの一時期を除いて相当数の遺構が確認されている。これらの遺跡は現在までに部分的に発掘作業が行われており、ほかにも試掘や分布調査の結果などから遺跡及び遺構の分布範囲も徐々に確認されてきているが、この地域の内では遺構の所在していない区域は一部の斜面地を除いて存在していない。

周辺の遺跡

本遺跡が立地する丘陵上にはこの遺跡の他に、既に調査された遺跡としてウリ山A・B地点、高柳南、長沖赤坂、長沖原、長沖梅原A・B地点、倉林前A・B地点、倉林南原A・B・C地点、倉林東A・B地点、倉林後A・B・C地点、金屋池脇A・B地点、金屋西浦、念仏塚等の遺跡と長沖古墳群高柳支群が存在しており、谷戸を挟んだ向かい側の丘陵上には同じく葦池、古林A・B地点、観音山A・B・C地点、枇杷橋A・B・C・D・E地点等の遺跡が確認、調査されている(第1図)。

これらの遺跡群は、農道建設や防火用水の設置等主に公共事業のために調査されたものであるが、その内容は主として住居址・掘立柱建物等の生活、居住

系の遺構から成り立っているものが多く、その範囲も大小様々で台地の先端から丘陵の最上部まで広がっている。これらの集落の設営時期は縄文前期から出現し始めているが、その中でも古墳時代後期と奈良・平安時代以降の時期のものが多く見受けられる傾向にある。

土地の利用

この児玉町内の丘陵部と北側の沖積平地の中に散見する微高地上ではその大部分が集落として利用されていて、その他の平地や丘陵間の谷戸は開墾には適したところではある。しかしながら灌漑するための水の供給量が少ないために、その補助として古くから九郷用水や河川を接続する小規模な掘り割り等の水路が開削されて農耕のための水源として利用されており、女堀川自体の給水量と併せて水稲耕作に必要な水の供給が確保された女堀川の流域には金屋条里、児玉条里などの条里水田が営まれるようになっていった。

この丘陵部から平地にかけての一带には、条里水田以外にも丘陵間の低湿地帯においては水田を開墾するのに好適な平場が多く見受けられ、他にも畑作に適した土地は多く存在しており可耕面積は概して広く、古墳時代以降の水稲耕作が本格化する時期以降には検出される遺構が段階的に増加していくことから、食料生産の増収量と比例して人口も増大し古くからの穀倉地帯として機能していたと思われる。

中世以降の児玉

中世以降としてはその地域生産力を背景とした武士団が各地に形成されていたが、児玉町内では武蔵七党の内の児玉党がその本拠として現在の字の地名をその姓として館を構え、その勢力を保持し始めていた。また当時の鎌倉街道の「上の道」が町内を横切っており、その痕跡は現在でも一部が確認されている。この道路はその時代の主要な軍事幹線路として機能していた事は史料上から確認されているが、道筋には有力な武士団が育成され緊急時には速やかに鎌倉へ集結できるように整備されていた。鎌倉時代以降の武蔵武士は「東夷」と言われていたとき以来勇猛な気質を知られ、全国の地頭職等に任命され散らばっていくこととなる。

近世入口までの児玉は、関東管領山内上杉氏の支配下にあった地侍衆の管理するところとなったが、戦国大名の台頭による支配権の拡大に伴いその主人をたびたび変えた。最終的には後北条氏による支配下の元、町内に残る雉ヶ岡城からもわかるように地域における主要拠点として存在していたと考えてもよいと思われる。雉ヶ岡城は豊臣秀吉の小田原征伐の時点で落城し、徳川家康の関東入国以降に松平家清が一万石で入城して大名領となったが、国替えて三河国吉田に転封となり廃城となった。戦国期が終わりを告げ安定した江戸期になると、一時の大名領を経て児玉一帯は小大名や旗本らの細分化された小さな蔵入れ地に分割され、穏やかな時代に移行していった。(尾内俊彦)

第三章 高柳原遺跡B地点の調査

1. 遺跡の概要 (第3図)

遺跡の立地

本遺跡は、児玉丘陵が侵食されてできた北方へ開放する細い谷戸の右岸に位置し標高118mから標高126mの北西に面した傾斜地に占地している。

本遺跡に関わる発掘調査は、平成12年度（B地点）の中山間総合整備事業（高柳池下地区）に先立つ埋蔵文化財保存事業として実施したものである。すでに農道改良工事（A地点）の埋蔵文化財保存事業として発掘調査が実施されており、埼玉県遺跡地図No.54-083「高柳原遺跡」として登録されている。

更に発掘調査は、ほ場整備事業が施工される範囲の中でも取り分け地山が削平される範囲について限定して実施した。しかし、調査を実施した範囲は、表土が浅かったほか放置された桑の原木や植木畑が多く、度重なる植木の植え替え等が行われていた為、遺構の保存状態はあまり良好ではなかった。

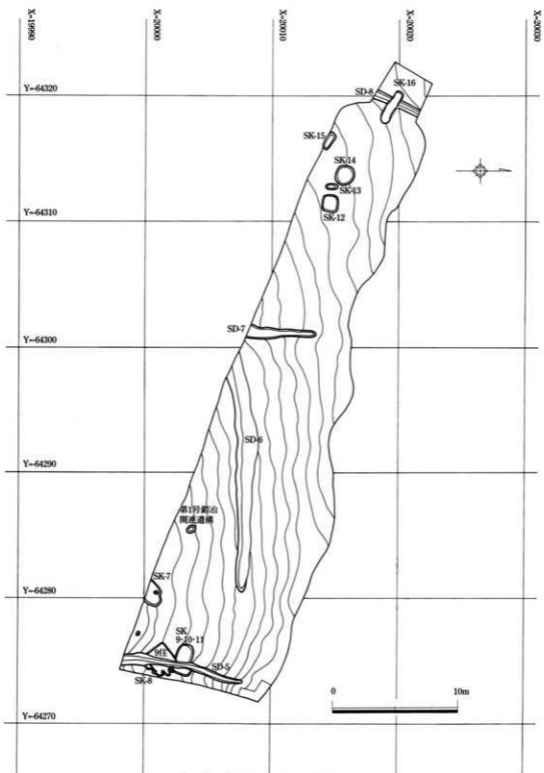
検出された遺構

本遺跡からは、奈良時代（真間期）の竪穴式住居址が1軒、土壌10基、溝状遺構4本のほか、9世紀初頭の鍛冶関連遺構が1基検出された。

出土遺物は、第1号鍛冶関連遺構より9世紀初頭の須恵器の蓋が出土したほか、摩滅が激しい土師器・須恵器の小破片が出土している。



第3図 高柳原遺跡B地点調査位置図



第4圖 高柳原遺跡B地点全測図

2. 基本土層 (第7図)

本調査区東壁で基本土層の確認を行った。本地点に於いては、開墾が進んでおり、上層は浅間山系A軽石が多く混入する耕作土でその直下はハードロームであった。更にハードローム下は薄くBP層が部分的に認められるほか、下層の明灰色粘質土中には表面が風化した円礫を多く含んでいた。

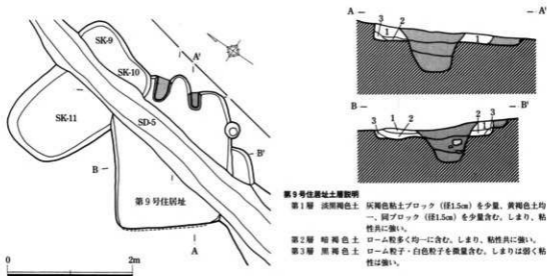
- | | | |
|-------|--------|---|
| 第I層 | 暗茶褐色土 | しまり・粘性なし。浅間山系A軽石を含む |
| 第II層 | 明茶褐色土 | しまりはあるが粘性を欠く。直径1~30mm程度のローム粒・浅間山系A軽石を若干含む |
| 第III層 | 明黄色土 | ハードローム層 |
| 第IV層 | 明灰色粘質土 | しまり・粘性非常に強い。マンガン粒を若干含む |
| 第V層 | 明灰色粘質土 | 表面が風化した円礫を多く含む粘質土 |

3. 遺構の概要

a. 竪穴式住居址

第9号住居址 (第5図 図版2-1)

本址は、調査区南東側に検出された。第5号溝によって切られている。平面形態は長方形を呈する小型住居址である。規模は長辺が2.2m、短辺が1.9m、深さ15cmを測る。カマドは北東壁の中央部に構築されていた。主柱穴や貯蔵穴などは検出されていない。遺物は出土していないが、カマドの形態の特徴や周囲の状況から奈良時代(真間期)の所産であると推定される。



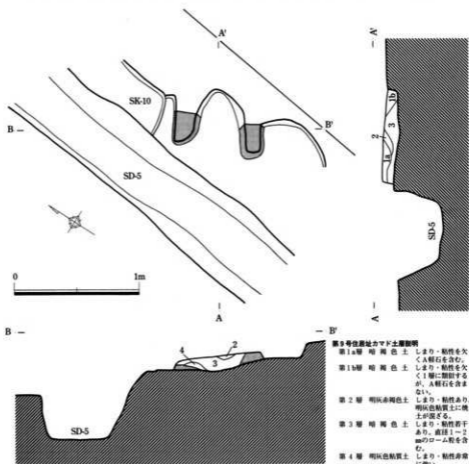
第9号住居址土層説明

- 第1層 淡茶褐色土 灰褐色粘土ブロック(径1.5cm)を少量、黄褐色土均一、同ブロック(径1.5cm)を少量含む。しまり、粘性共に強い。
- 第2層 暗茶褐色土 ローム粒多く均一に含む。しまり、粘性共に強い。
- 第3層 黒褐色土 ローム粒子・白色粒子を微量含む。しまりは強く粘性は強い。

第5図 第9号住居址

第9号住居址カマド (第6図 図版2-2)

住居北東壁中央に付設されている。遺存状態はやや不良である。規模は全長55cm、幅70cm、袖部の長さ約25cmを測る。燃焼部内からは壁やソデの崩壊土に混ざって焼土が確認されたが、支脚や遺物などは確認できなかった。



第6図 第9号住居址カマド

b. 土壌

第7号土壌 (第7図 図版3-1)

本址は、調査区東側に検出された。遺構の20%程度は調査区外である。平面形態は不整な楕円形を呈する。規模は長軸が1.6m、短軸が1.5m、深さ10cmを測る。底面はやや平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第8号土壌 (第7図)

本址は、調査区東側に検出された。遺構の西側のほとんどを第9号住居址と第5号溝によって切られている。深さは10cm程度であるがその規模および形は不明である。底面は平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第9号土壌 (第7図)

本址は、調査区東側にある第9号住居地の北側に検出された。中央付近に擾乱がある。第9号住居地・第10・11号土壌・第5号溝を切って構築されていた。深さは10cm程度であるがその規模および形は不明である。底面は平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第10号土壌 (第7図)

本址は、調査区東側にある第9号住居地の北側に検出された。第9号住居地を切って構築しているが、第9号土壌によって切られている。深さは10cm程度であるが、その規模および形態は不明である。底面は平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第11号土壌 (第7図)

本址は、調査区東側にある第9号住居地の北側に検出された。第5号溝を切って構築されているが、第9号土壌によって切られていた。規模は深さ20cm程度であり、推定長軸は2m、短軸は1.3mの楕円形を呈する。底面は平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第12号土壌 (第7図)

本址は、調査区西側に検出された。平面形態は正方形を呈する。規模は一辺が共に1.2m、深さ10cmを測る。底面は平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第13号土壌 (第7図)

本址は、調査区西側に検出された。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸が1.5m、短軸が0.9m、深さ50cmを測る。底面はやや平坦であり壁は急激に立ち上がる。

第14号土壌 (第7図 図版3-2)

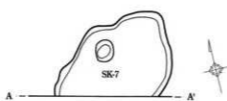
本址は、調査区西側に検出された。平面形態は円形を呈する。規模は直径が1.4m、深さ15cmを測る。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。第7層下部に有機質と推定される黒色の層が一部薄く確認できた。

第15号土壌 (第8図 図版4-1)

本址は、調査区西側に検出された。平面形態は長方形を呈する。規模は長軸が1.4m、短軸が0.5m、深さ70cmを測る。底面はやや平坦であり壁は断面がコの字形でやや外側に開きながら立ち上がる。

第16号土壌 (第8図 図版4-2)

本址は、調査区西側に検出された。平面形態は長楕円形を呈する。規模は長軸が2.8m、短軸が0.8m、深さ35～5cmを測る。底面はやや平坦であり、壁はオーバーハンクぎみに立ち上がる。上部はかなり削り取られており第8号溝によっても切られている。



第7号土壌

第7号土壌土層説明

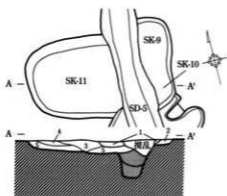
- 第1層 淡灰褐色土 ローム粒子を多く、ロームブロックを少量含む。
 第2層 明黄色土 ローム層 (地底)
 第3層 黒灰色土 ローム粒子を多量、褐色粒子を少量含む。しまり、粘性強い。
 第4層 黒灰色土 ロームブロック (径5cm) を多く、褐色粒子を微量含む。



第8号土壌

第8号土壌土層説明

- 第1層 淡褐色土 ロームブロック (径15cm) を少量、ロームブロック (径0.5cm) を多量、ローム粒を均一。しまり、粘性や中強い。



第9・10・11号土壌

第9・10・11号土壌土層説明

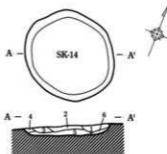
- 第1層 暗褐色土 赤色粒子を微量、白色粒子を均一、黄褐色を少量含む。しまりはやや強いが粘性は強い。
 第2層 淡褐色土 黄褐色粒子を均一、灰色粒子を含む。しまり、粘性は弱い。
 第3層 暗褐色土 ローム粒子・白色粒子を均一、ロームブロック (径10cm) を少量、マンガン粒を多量に含む。しまり、粘性共に強い。
 第4層 暗褐色土 白色粒子を均一、ローム粒を非常に多く、マンガン粒子を少量含む。しまり、粘性共に強い。
 第5層 暗褐色土 白色粒子、ローム粒子を均一、ロームブロック (径10cm) を少量含む。しまり、粘性共に強い。



第12号土壌

第12号土壌土層説明

- 第1層 茶褐色土 ローム粒・ローム小ブロック・炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。



第14号土壌

第14号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土 ローム粒を均一、炭化物を含む。しまりは有するが粘性は弱い。
 第2層 暗褐色土 ローム粒を多量に、炭化物を少量含む。しまり、粘性共に有する。
 第3層 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを含む。しまりは有するが粘性は弱い。
 第4層 暗褐色土 ローム粒を多く含む。しまりは有するが粘性は強い。
 第5層 暗褐色土 ローム粒を多量に炭化物を微量含む。しまり有するが粘性は弱い。
 第6層 暗褐色土 ローム・炭化物を少量含む。しまり、粘性共に有するが強い。



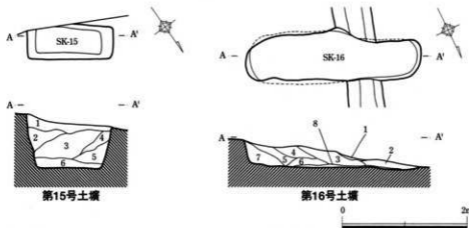
第13号土壌

第13号土壌土層説明

- 第1層 茶褐色土 ローム粒・ロームブロック・炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。

第7図 土壌 1





第15号土壌土層説明

- 第1層 明黄褐色土 しまり・粘性なし。ローム風化土を多く含む。
- 第2層 暗黄褐色土 しまり・粘性なし。第1層に類似するが、ロームの量が少い。
- 第3層 明黄褐色土 しまり・粘性なし。径10~20mmのロームブロックを多く含む。
- 第4層 暗褐色土 しまり・粘性なし。ローム風化土を若干含む。
- 第5層 暗灰褐色土 しまり・粘性なし。灰色粘質土の風化土を若干含む。
- 第6層 暗灰褐色土 しまり・粘性具にある。灰色粘質土風化土よりなる。

第16号土壌土層説明

- 第1層 暗褐色土 しまり・粘性若干あり。(やや古い時代の遺)
- 第2層 暗褐色土 しまり・粘性若干あり。直径1~3mm程度のローム粒子を含む。
- 第3層 暗褐色土 しまり・粘性若干あり。直径1~5mmのローム粒子を多く含む。
- 第4層 暗褐色土 しまり・粘性若干あり。直径5~20mmのローム粒を多く含む。
- 第5層 暗褐色土 しまり・粘性若干あり。ローム粒をあまり含まない。
- 第6層 暗褐色土 しまり・粘性あり。直径10~50mmのロームブロックを多く含む。
- 第7層 暗褐色土 しまり・粘性若干あり。直径10~20mmのローム粒を多く含む。
- 第8層 暗褐色土 しまり・粘性若干あり。直径1~20mm程度のローム粒を含む。

第8図 土壌 2

C. 溝状遺構

第5号溝 (第9図 図版5-2)

本址は、調査区東側に検出された。方向は、北から南に調査区外へ延びている。規模は、上幅60cm、下幅50cm、深さ60~80cmを測る。底面は平坦であり壁は急激に立ち上がる。第9号住居址を切っているが、第11号土壌に切られている。

第6号溝 (第10図 図版5-1)

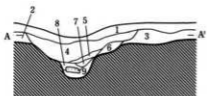
本址は、調査区中央付近よりやや東側に検出された。方向は、東から西に調査区外へ延びている。規模は、上幅30cm、下幅40cm、深さ20cmを測る。底面は平坦であり壁は緩やかに立ち上がるが北側の立ち上がりは、削平され確認することができなかった。

第7号溝 (第11図)

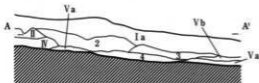
本址は、調査区中央付近に検出された。方向は、北から南に調査区外へ延びている。規模は、上幅20cm下幅15cm深さ15cmを測る。底面は平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第8号溝 (第4図)

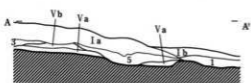
本址は、調査区西側に検出された。方向は、やや軸を東に振るよう北から南に調査区外へ延びている。規模は、上幅60cm、下幅30cm、深さ4cmを測る。底面は平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。



第9図 第5号溝土層断面図



第10図 第6号溝土層断面図



第11図 第7号溝土層断面図

第5号溝土層説明

- 第1層 暗褐色土 現状土。
- 第2層 暗茶褐色土 ローム粒多く、浅間B軽石を微量含む。しまり・粘性共に有る。
- 第3層 暗黄褐色土 基礎ローム層。
- 第4層 暗茶褐色土 ローム粒を少量均一に、炭化物粒・ローム小ブロックを微量、浅間A軽石を極微量に含む。しまり弱く・粘性有する。
- 第5層 暗褐色土 ローム粒・炭化物粒を微量含む。しまり弱く・粘性有する。
- 第6層 暗黒褐色土 ローム粒・ロームブロックを多く、炭化物を微量含む。
- 第7層 暗黒褐色土 ローム粒・炭化物粒を微量含む。全体的に少々灰色がかる。
- 第8層 黒褐色土 ローム粒・炭化物粒を微量含む。しまり弱く・粘性有する。
- 第9層 暗灰褐色土 ローム粒・及び地山暗灰褐色粘土のブロックを少量含む。

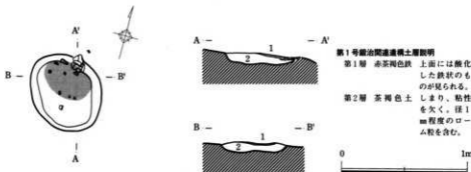
第6・7号溝土層説明

- 第1a層 暗茶褐色土層 しまり、粘性なし。(現耕作土)。
- 第1b層 暗茶褐色土層 第1層に類似するが、色調が更に濃い。
- 第Ⅱ層 明茶褐色土層 ローム風化土を多く含む。若干のA軽石を含む(田耕作土)。
- 第Ⅲ層 明黄色土 しまり、粘性あり。ハードローム層。
- 第Ⅳ層 黄褐色土 しまり、粘性若干あり。B、P層である。
- 第Ⅴa層 明灰色土 しまり、粘性共に強い。粘質土。
- 第Ⅴb層 明灰色土 第Ⅴ層の風化土で層位にはⅡ層と同じ性状である。
- 第Ⅰ層 暗灰褐色土 しまり、粘性あり。木クズを多く含む。
- 第Ⅱ層 明褐色土 しまり、粘性若干あり。ローム風化土、A軽石若干含む。
- 第Ⅲ層 暗褐色土 しまり、粘性若干あり。
- 第Ⅳ層 暗褐色土 第4層に類似するが、色調がやや濃い。
- 第Ⅴ層 暗灰色土 しまり、粘性強い。第Ⅴ層風化土である。

d. 鍛冶関連遺構

第1号鍛冶関連遺構 (第12図 図版6-2)

本址は、調査区東側に検出された。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸が0.65m、短軸が0.45m、深さ15cmを測る。底面は平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。遺構の中央から北寄り、底面から約10cm浮いた所に赤褐色の層が確認された。その土をサンプリングして調べた結果、赤褐色の土の色は鉄を鍛えたときに出来る多くの鉄分と細かな鍛造片である事が解った。更に鍛造片は、分析(埼玉県埋蔵文化財事業団 大屋道則)の結果純度の高い鉄であることが判明した。このことから本址は鍛冶関連遺構と推定されるが、炉や竈などの送風設備のほか、柱穴などの上屋の構造物が無いなど付近で行っていた鍛冶関連でた鍛造片を本址に捨てたとも考えられる。



第12図 第1号鍛冶関連遺構

第1号鍛冶関連遺構土層説明

- 第1層 赤茶褐色鉄 上面には風化した鉄状のものが見られる。
- 第2層 茶褐色土 しまり、粘性を欠く。径1mm程度のローム粒を含む。

第VI章 高柳原遺跡C地点の調査

1. 遺跡の概要 (第13図)

遺跡の立地

本遺跡は、児玉丘陵が侵食されてできた北方へ開放する細い谷戸の右岸に位置し標高118mから標高126mの北西に面した傾斜地に占地している。

本遺跡に関わる発掘調査は、平成13年度（C地点）の中山間総合整備事業（高柳池下地区）に先立つ埋蔵文化財保存事業として実施したものである。すでに農道改良工事（A地点）、中山間総合整備事業（B地点）の埋蔵文化財保存事業として発掘調査が実施されており、埼玉県遺跡地図No.54-083「高柳原遺跡」として登録されている。

発掘調査は、ほ場整備事業が施工される範囲の中でも取り分け地山が削られる範囲について限定して実施した。しかし、調査を実施した範囲は、表土が浅かったほか植木畑が多く、何度もの植木の植え替えが行われていた為、遺構の保存状態はあまり良好ではなかった。

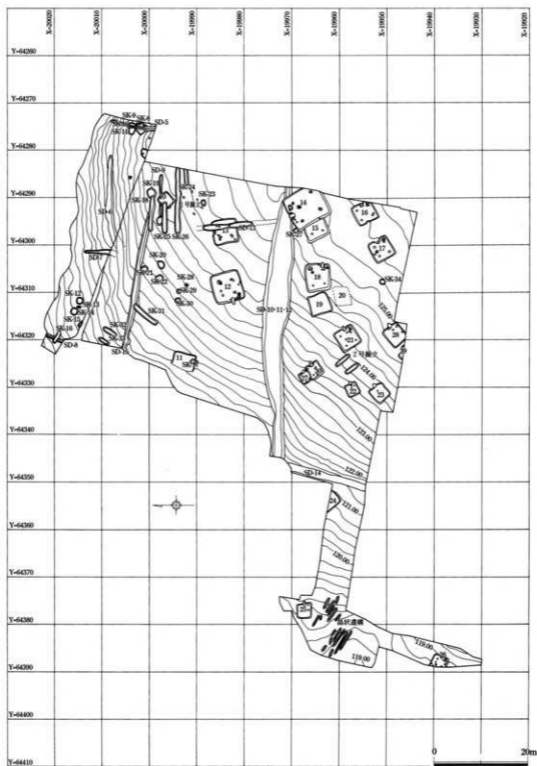
検出された遺構

本遺跡からは、古墳時代後期（鬼高期）から平安時代(国分期)にかけての竪穴式住居址2軒、掘立柱建物址2棟、土壇18基、溝状遺構7本のほか、畠状遺構の一部が検出された。

出土遺物は、鬼高・真間期を主体に数多くの土師器・須恵器が出土している。



第13図 高柳原遺跡C地点調査位置図



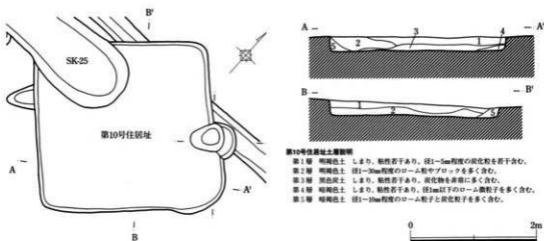
第14図 高柳原遺跡B・C地点全測図

3. 遺構の概要

a. 竪穴式住居址

第10号住居址 (第15図 図版8-2)

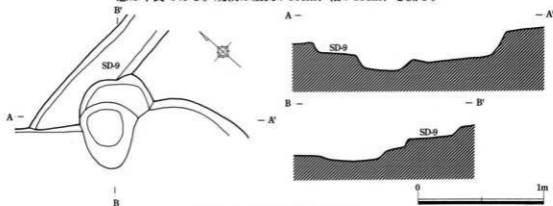
本址は、調査区北東側に検出された。第25号土壌によって切られている。平面形態は、正方形を呈する小型住居址である。規模は一边が3m、深さ20cmを測る。カマドは北東壁のやや南寄りに付設されていた。主柱穴や貯蔵穴などは検出されていない。遺物は出土していないが、遺構の規模や主軸の方向などは隣接するB地点の第9号住居址に類似している。また床直上には、炭化物が多く小型の火災住居である。



第15図 第10号住居址

第10号住居址カマド (第16図 図版9-1)

本址は、住居址北東壁のやや南寄りに付設されていたが、攪乱が酷く遺存状態は不良である。規模は全長が80cm、幅が55cm、を測る。



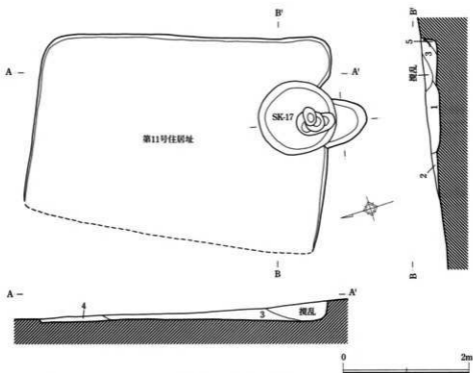
第16図 第10号住居址カマド

第11号住居址 (第17図 図版9-2)

本址は、調査区中央やや西側に検出された。平面形態は方形を呈する。規模は長辺が4.5m、短辺が3.4m、深さ30cmを測る。カマドは南壁の中央やや東寄りに付設されていた。カマド前は視乱や第17号土壌によって切られておりかなり荒れていた。床面は、貼床が施されており硬質であったが、住居址西側の半分近くは、耕作や開墾によって削平されていた。住居址東側の壁に沿うように多くの礫石と共に複数の坏が出土した。その他、支柱穴や貯蔵穴などは検出されていない。出土遺物により真間期の所産である。

第11号住居址カマド (第19図 図版10-1)

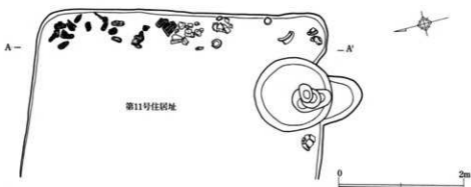
本址は、住居址南壁の中央やや東寄りに付設されていた。規模は全長が100cm、幅が70cm、を測る。カマド前は、視乱や第17号土壌によって切られておりかなり荒れていた。その為カマドの袖や焚口は確認できなかった。しかし、第17号土壌下にピットを伴う掘り方があり、支脚が在った可能性が考えられる。



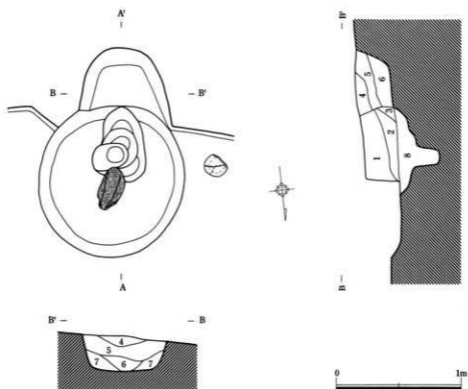
第17図 第11号住居址

第11号住居址土層説明

- 第1層 黒褐色土 ローム質土を若干夾状に含む、やや有機質である。
- 第2層 明褐色土 しまり、粘性あり。ローム風化土。
- 第3層 暗褐色土 しまり、粘性あり。第2層に類似するが色調がやや暗い。
- 第4層 明褐色土 しまり、粘性あり。径5~30mm程度のロームブロックを多く含む。
- 第5層 明褐色土 しまり、粘性あり。ローム風化土。



第18図 第11号住居址東壁遺物出土図



第19図 第11号住居址カマド

第11号住居址カマド土層説明

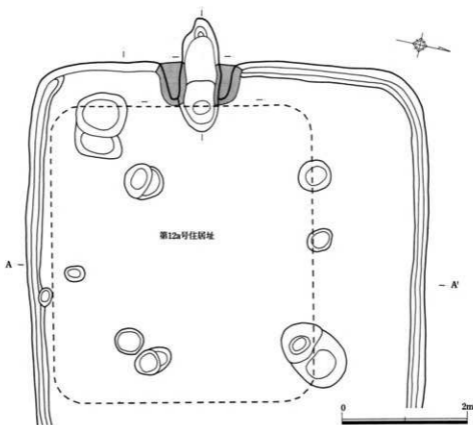
- 第1層 明褐色土 しまり、粘性若干あり。明黄褐色土を塊状に含む。
- 第2層 黒褐色土 しまり、粘性若干あり。径1mm程度のローム微粒子を含む。
- 第3層 明赤褐色土 しまり、粘性若干あり。焼土風化土主体。
- 第4層 明灰褐色粘質土 しまり、粘性あり。明灰色粘土主体。
- 第5層 暗赤褐色土 しまり、粘性あり。焼土を非常に多く含む。
- 第6層 暗褐色土 しまり、粘性あり。径1mm程度の焼土・ローム微粒子を含む。
- 第7層 暗褐色土 しまり、粘性あり。径1mm程度のローム微粒子を多く含む。
- 第8層 明褐色土 しまり、粘性あり。径1～3mm程度の焼土・ローム粒を含む。

第12a号住居址 (第20図 図版11-1)

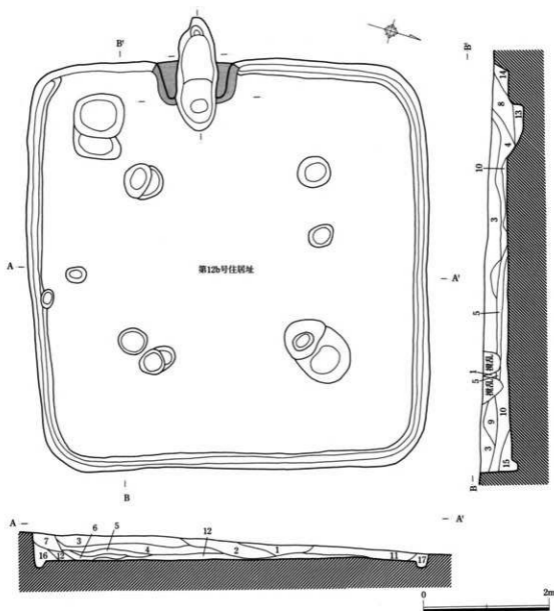
本址は、調査区中央付近に検出されたが、第12b号住居址内で入子状になっていた。平面形態は、長方形若しくは不整形を呈すると推定されるが、プランは明瞭ではない。規模は長軸が4.7m、短軸4.2m、深さ約40cmを測るが一定ではない。カマドは無く、壁は緩やかに立ち上がる。竪穴式住居址であると断定するより第12b号住居址が埋没していく途中で作業小屋若しくは、仮の住居として使用されたものと推定される。第12b号住居址が、出土遺物により真間期の所産であることから、本址との時期差はないと推定される。

第12b号住居址 (第21図 図版11-1)

本址は、調査区中央付近に検出された。平面形態は正方形を呈する。規模は一辺が6.4m、深さ40cmを測る。カマドは西壁の中央に付設されていた。西壁の一部を除いて壁溝が掘りこまれていた。その他、支柱穴、貯蔵穴などが検出された。本址は、床面に焼土や炭化物が多く検出されたことから火災住居址であると推定される。坏を主体にやや多くの遺物が出土した。出土遺物により真間期の所産である。



第20図 第12a号住居址

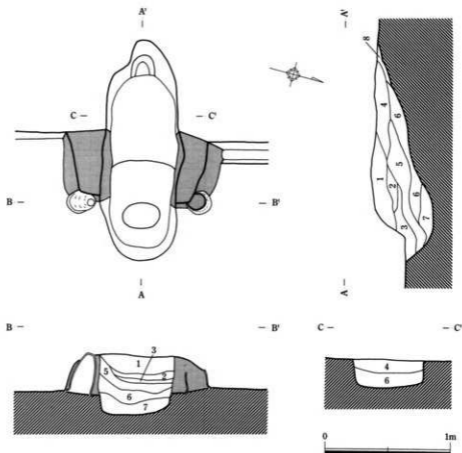


第12a・b号住居址土層説明

- | | | | |
|---|--|--|---|
| <p>第1層 明褐色土
 第2層 暗褐色土
 第3層 明褐色土
 第3層 明褐色土
 第4層 暗褐色土
 第5層 明灰色粘質土
 第6層 暗灰色土
 第7層 明褐色土
 第8層 暗褐色土</p> | <p>しまり、粘性あり。明褐色土を塊状に含む。
 しまり、粘性あり。径1～5mm程度の焼土・炭化物粒を含む。
 第1層に類似する。
 第3層に類似するが、明褐色土を塊状に含まない。
 しまり、粘性あり。径1mm程度のローム粒子を多く含む。
 しまり、粘性強い。明灰色粘土主体である。
 しまり、粘性強い。明灰色粘土をやや多く含む。
 径1mm以下のローム微粒子とロームブロックを多く含む。
 しまり、粘性あり。径10mm程度の焼土・ローム粒を若干含む。</p> | <p>第9層 暗褐色土
 第10層 暗褐色土
 第11層 暗褐色土
 第12層 黒褐色土
 第13層 明黄褐色土
 第14層 明褐色土
 第15層 明褐色土
 第16層 明褐色土
 第17層 明褐色土</p> | <p>しまり、粘性あり。径1mm程度の炭化物・焼土微粒子を含む。
 径1mm程度の炭化・焼土微粒子を若干ローム微粒子を多く含む。
 径10～30mm程度のロームブロックを多く含む。
 しまり、粘性あり。炭化微粒子を多量に含む。
 しまり、粘性あり。径1～5mm程度のローム粒を多量に含む。
 第13層に類似するが、ロームの量がやや少ない。
 しまり、粘性あり。第14層に類似する。
 しまり、粘性あり。第15層に類似する。
 しまり、粘性あり。第16層に類似する。
 しまり、粘性あり。第17層に類似する。</p> |
|---|--|--|---|

第12b号住居址カマド (第22図 図版11-2)

本址は、住居址西壁の中央に付設されていた。遺存状態は、良好である。規模は全長が175cm、幅が120cm、袖の長さ60cmを測る。焚口部の掘り込みは、やや深い。両袖の先端部には、長甕を倒立させて粘土で包み込みカマドの補強材として用いている。



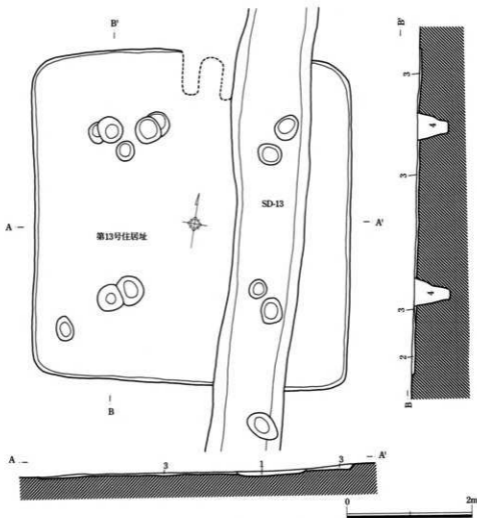
第22図 第12b号住居址カマド

第12b号住居址カマド土層説明

- | | | |
|-----|-------|--------------------------------|
| 第1層 | 暗灰褐色土 | 灰褐色粘土を多く、焼土粒・ブロックを少量、炭化粒を微量含む。 |
| 第2層 | 赤褐色土 | 焼土ブロック主体の層。良く焼けて硬質である。 |
| 第3層 | 黒褐色土 | 炭化粒を多量、焼土粒・ブロックを少、ロームブロック微量含む。 |
| 第4層 | 暗茶褐色土 | 焼土粒・焼土ブロックを少量、炭化物粒・ローム粒を微量含む。 |
| 第5層 | 暗赤褐色土 | 焼土粒・ブロック多量、炭化粒少量、ロームブロック微量含む。 |
| 第6層 | 暗褐色土 | ローム・焼土粒を均一に、炭化物粒・ロームブロックを微量含む。 |
| 第7層 | 暗茶褐色土 | 炭化物粒を少量、ローム粒を微量含み、灰分を多量に混入する。 |
| 第8層 | 暗茶褐色土 | ローム粒・ローム小ブロックを少量、炭化物粒を微量含む。 |

第13号住居址 (第23図 図版12-1)

本址は、調査区の中央よりやや北東側に検出された。平面形態は、正方形を呈する。規模は一辺が5.2m、深さ5cmを測る。カマド(図版12-2)は、北壁の中央に付設されていたと推定されるが、燃焼部の焼けた底面の一部が残存するだけであった。遺構の東側を南北に第13号溝に切られている。この溝に切られた東の残りの部分には、貼床が残っていたがその他の部分は住居址の掘り方である。出土遺物は無く、時期は不明である。



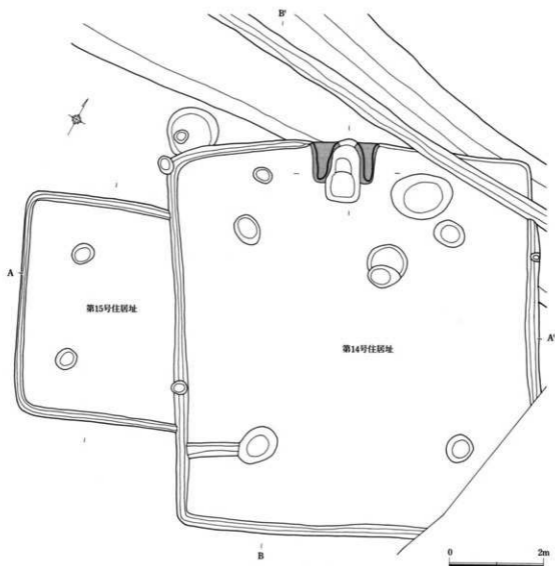
第23図 第13号住居址

第13号住居址土層説明

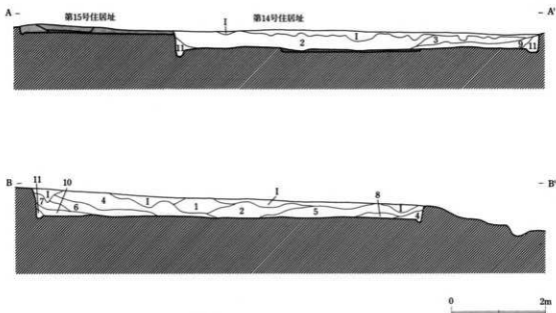
- 第1層 明褐色土 しまり、粘性若干あり。(Aa-A)を含む。
- 第2層 暗褐色土 しまり、粘性あり。径1~5mm程度のローム粒を含む。
- 第3層 暗褐色土 しまり、粘性あり。径1mm程度のローム粒を多く含む。
- 第4層 暗褐色土 しまり、粘性あり。径1~10mm程度のローム粒を多く含む。

第14号住居址 (第24図 図版13-1)

本址は、調査区の東側やや南寄りに検出された。第15号住居址を切って構築されている。住居址の平面形態は、長方形を呈する。規模は長辺が8.5m、短辺7.5m、深さ40cmを測る。カマドは、北西壁の中央に付設されていた。貯蔵穴は、住居址の北東隅に掘り込まれていた。規模は、長軸130cm、短軸100cm、深さ48cmであり、平面形態は隅丸長方形を呈する。住居址の床には、良好な貼り床が施されていた。更に、東側と北側の一部を除き深さ10cm程度の壁溝を検出した。覆土全体に焼土粒と炭化物粒を多く含んでいることから火災住居址であることも考えられる。出土遺物により真間期の所産である。



第24図 第14号住居址



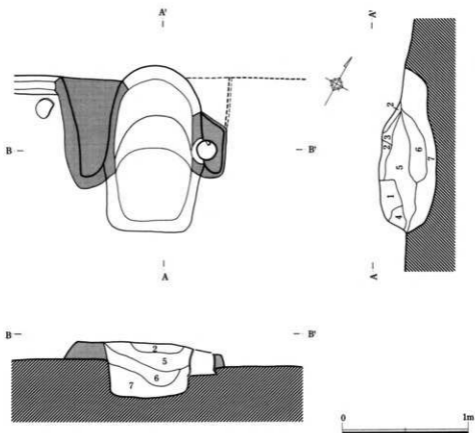
第25図 第14号住居址土層断面図

第14号住居址土層説明

第I層	明灰色土	しまり、粘性あり。暗灰色土ブロックと (As-A) を多く含む。
第1層	明茶褐色土	しまり、粘性若干あり。径1~2mm程度のローム粒子を若干含む。
第2層	明茶褐色土	しまり、粘性若干あり。径1~5mm程度のローム粒子を多く含む。
第3層	茶褐色土	しまり、粘性若干あり。径1~3mm程度のローム・焼土粒子を含む。
第4層	茶褐色土	しまり、粘性若干あり。径1~5mm程度のローム・炭化物粒子を含む。
第5層	茶褐色土	しまり、粘性あり。径1~3mm程度のローム・焼土粒を含む。
第6層	茶褐色土	しまり、粘性あり。径1~5mm程度のローム・炭化粒を含む。
第7層	茶褐色土	しまり、粘性若干あり。第6層に類似するが色調が暗い。
第8層	明灰色土	しまり、粘性あり。明灰色粘質土ブロックと焼土粒子を多く含む。
第9層	明褐色土	しまり、粘性若干あり。ローム粒を非常に多く含む。
第10層	暗褐色土	しまり、粘性あり。径1~3mm程度のローム・粘土粒子を含む。
第11層	茶褐色土	しまり、粘性あり。ローム粒をやや多く含む。

第14号住居址カマド (第26図 図版13-2)

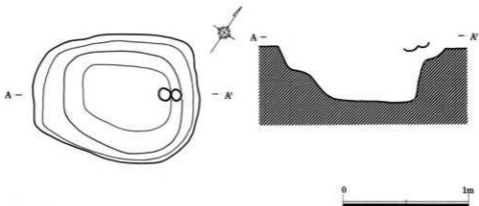
本址は、住居址北西壁の中央に付設されていた。遺存状態は、東側袖の住居址壁に接する上の部分を第10・11・12号溝に切られており、不良である。規模は全長が135cm、幅が125cm、袖の長さ80cmを測る。焚口部の掘り込みはしっかりしている。東側の袖の先端部には、長甕を倒立させて粘土で包み込み、カマドの補強材として用いている。支脚などの付帯物は検出できなかった。



第26図 第14号住居址カマド

第14号住居址カマド土層説明

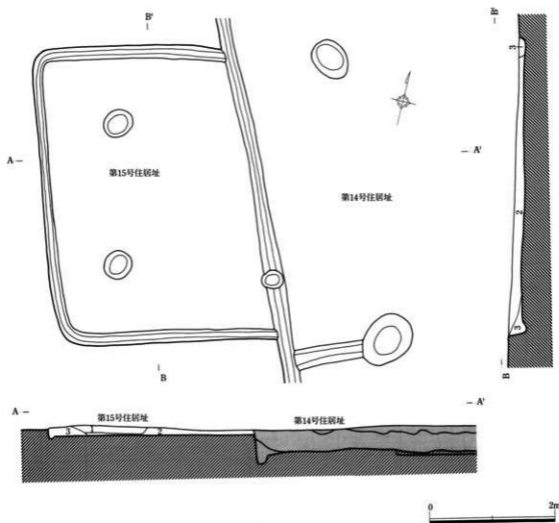
- 第1層 灰褐色土 (Ae-A) を微量含む。しまりあるが固い。粘性はほとんどない。
- 第2層 灰白色粘土ブロックを含む。しまり、粘性ある。
- 第3層 褐色土 白色粒子を均一に、焼土小ブロック (径3mm) を多く含む。
- 第4層 暗褐色土 ローム・白色粒子を均一、ローム小ブロック及び焼土粒子を少量含む。
- 第5層 暗褐色土 ローム粒子を均一、焼土粒子を多く、ローム・焼土ブロック少量含む。
- 第6層 赤褐色土 焼土粒子を多く、ロームブロックを含む。焼後により硬化している。
- 第7層 灰褐色土 焼土粒子が多く含まれ、ロームブロックが均一に含まれている。



第27図 第14号住居址貯蔵穴

第15号住居址 (第28図 図版14-1)

本址は、調査区の東側やや南寄りに検出された。住居址の東側20%程度を第14号住居址に切られている。平面形態は、正方形を呈すると推定される。規模は一辺が5m、深さ10cmを測る。カマドは、東壁に付設されていたと推定されるが、第14号住居址に切られて失われたと推定される。住居址の床には、良好な貼床が施されており、全体に深さが5cm程度の壁溝が掘られている。出土遺物は、土師器の坏と埴がそれぞれ1固体ずつ出土しており、遺物の型式から鬼高期の所産である。



第28図 第15号住居址

第15号住居址土層説明

- | | | |
|-----|------|-------------------------------|
| 第1層 | 暗褐色土 | しまり、粘性若干あり。径1mm以下のローム粒子を若干含む。 |
| 第2層 | 明褐色土 | しまり、粘性あり。径1-5mm程度のローム粒子を多く含む。 |
| 第3層 | 明褐色土 | しまり、粘性あり。径1-3mm程度のローム粒子を多く含む。 |

第16号住居址 (第29図 図版15-1)

本址は、調査区の南東側に検出された。住居址の東隅は、調査区外に当たり、一部調査ができなかった。住居址の平面形態は、正方形を呈する。規模は一辺が4.4m、深さ15cmを測る。カマドは、北東壁の中央に付設されていた。貯蔵穴は、住居址の南東隅に掘り込まれていた。規模は、長軸70cm、短軸50cm、深さ64cmであり、平面形態は楕円形を呈する。出土遺物により鬼高期の所産である。

第16号住居址カマド (第30図 図版15-2)

本址は、住居址北東壁の中央に付設されていた。遺存状態は、良好である。規模は、全長が100cm、幅が95cm、袖の長さ65cmを測る。焚口部の掘り込みは浅い。カマドの内部には、長甕が並列に掛けられており東側の長甕にいたっては、2固体が入れ子状になっていた。カマド内の覆土より骨片を検出した事は特筆される。

第17号住居址 (第31図 図版17-1)

本址は、調査区の南東側に検出された。平面形態は、正方形を呈する。規模は一辺が4.5m、深さ25cmを測る。カマドは、北東壁の中央に付設されていた。貯蔵穴は、住居址の南東隅に掘り込まれていた。規模は、長軸80cm、深さ55cmであり、平面形態は円形を呈する。カマドの南側に遺物がやや纏まって出土した。出土遺物により鬼高期の所産である。

第17号住居址カマド (第32図 図版17-2)

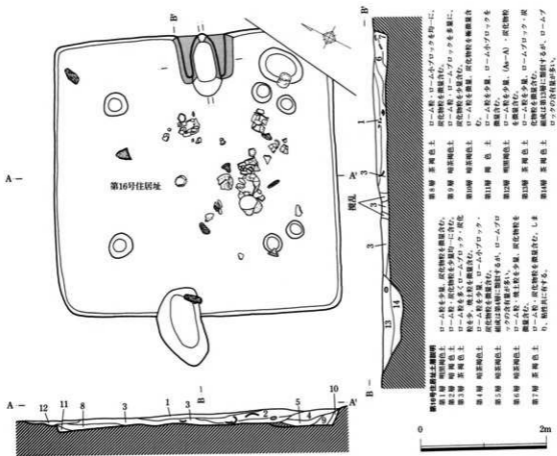
本址は、住居址北東壁の中央に付設されていた。遺存状態は、上方に一部擾乱がありやや不良である。規模は、全長が80cm、幅が110cm、袖の長さ55cmを測る。焚口部の掘り込みは浅い。カマドの内部には、中央よりやや西に石製の支脚が残っていた。

第18号住居址 (第33図 図版18-1)

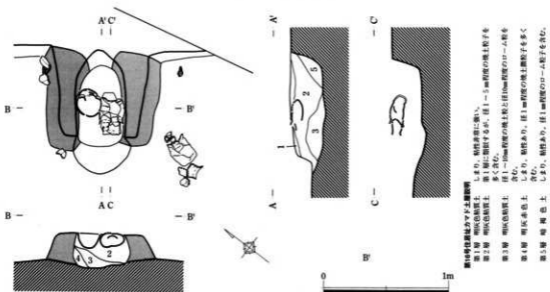
本址は、調査区の南東側に検出された。平面形態は、方形を呈する。規模は長辺が5.7m、短辺5.2m、深さ30cmを測る。カマドは、東壁の中央より南寄りに付設されていた。貯蔵穴は、住居址南東隅に掘り込まれていた。規模は、長軸70cm、深さ30cmであり、平面形態は円形を呈する。住居址の中央部には、良好な貼り床が施されており、更に、ほぼ全周をする深さ10cm程度の壁溝を検出した。出土遺物により鬼高期の所産である。

第18号住居址カマド (第34図 図版18-2)

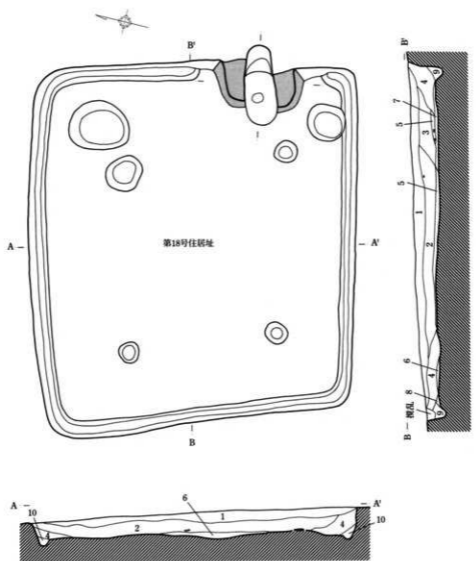
本址は、住居址東壁の中央より南寄りに付設されていた。遺存状態は、良好である。規模は、全長が125cm、幅が130cm、袖の長さ60cmを測る。焚口部の掘り込みはしっかりしている。



第29図 第16号住居址



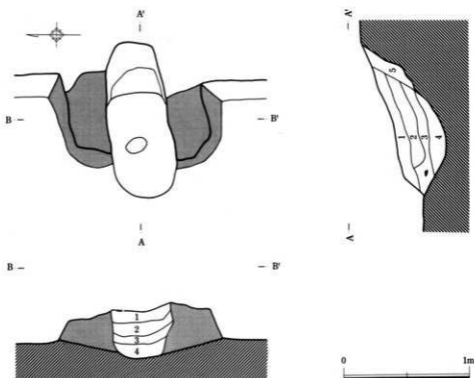
第30図 第16号住居址カマド



第33図 第18号住居址

第18号住居址土層説明

- | | | |
|------|-------|---------------------------------|
| 第1層 | 暗茶褐色土 | ローム粒・焼土粒を少量均一に、炭化物粒を微量含む。 |
| 第2層 | 暗茶褐色土 | ローム粒を少量、焼土粒・炭化物粒を微量含む。 |
| 第3層 | 暗茶褐色土 | ローム粒・ローム小ブロック・焼土粒・炭化物粒を均一に含む。 |
| 第4層 | 暗茶褐色土 | ローム粒多量に、焼土粒を少量、炭化物粒を微量含む。 |
| 第5層 | 茶褐色土 | 焼土粒・ローム粒を多量に、炭化物粒を微量含む。 |
| 第6層 | 暗褐色土 | ローム粒を均一に、焼土・炭化物粒を含む。灰色粘土を混入する。 |
| 第7層 | 暗褐色土 | ロームブロックを多量に、炭化物粒を少量、焼土粒を微量含む。 |
| 第8層 | 黄褐色土 | ロームブロック主体の層。 |
| 第9層 | 暗茶褐色土 | ローム粒・ブロックを多く、炭化物粒を微量に、黒色土を混入する。 |
| 第10層 | 暗茶褐色土 | 組成は第9層に類似するが黒色土の割合が多い。 |



第34図 第18号住居址カマド

第18号住居址カマド土層説明

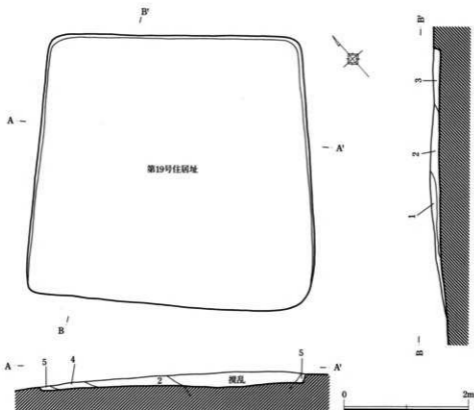
- | | |
|-----------|---------------------------------|
| 第1層 暗赤褐色土 | 焼土粒を均一に、炭化物粒を少量、ローム粒を微量含む。 |
| 第2層 暗赤褐色土 | 焼土ブロックを多量に、炭化物粒・ローム粒を少量含む。 |
| 第3層 暗赤褐色土 | 炭化物粒を多量に、焼土粒を少量含む。灰色粘土粒を若干混入する。 |
| 第4層 暗赤褐色土 | ローム粒を少量、焼土・炭化物粒を微量含む。 |
| 第5層 暗褐色土 | 焼土粒・ローム小ブロックを少量、炭化物を微量含む。 |

第19号住居址 (第35図 図版19-1)

本址は、調査区の南東側に検出された。住居址の西側は近現代の農道により削られており、壁は残っていなかった。平面形態は、正方形を呈すると推定される。規模は一辺が4.3m、深さ10cmを測る。カマドは、焼土塊や灰色粘質土塊が確認された東壁に付設されていたと推定されるが、植木の擾乱が酷く残存していなかった。住居址の床には、良好な貼床が施されており、部分的に硬化面が残っていた。出土遺物は、須恵器の横瓶や土師器の坏や甕が出土しており、遺物の型式から真岡期の所産である。

第20号住居址 (第36図 図版19-2)

本址は、調査区の南東側に検出された。住居址は暗褐色土の染みが確認できた程度で、掘り込みは無く壁は残っていなかった。平面形態は、方形を呈すると推定される。規模は、一辺が3mから4m程度である。カマドや貯蔵穴などは、検出されていない。出土遺物は、甕が出土しており、遺物の型式から鬼高期の所産である。



第35図 第19号住居址

第19号住居址土層説明

- | | | |
|-----|------|---------------------------------|
| 第1層 | 暗褐色土 | しまり、粘性若干あり。径1～2mm程度のローム粒子を若干含む。 |
| 第2層 | 明褐色土 | しまり、粘性若干あり。径1～5mm程度のローム粒子を多く含む。 |
| 第3層 | 明褐色土 | 径1～3mm程度のローム粒子と焼土粒子を若干含む。 |
| 第4層 | 明褐色土 | 第3層に類似するがやや色調が暗い。 |
| 第5層 | 明褐色土 | しまり、粘性あり。径1～5mm程度のローム粒をやや多く含む。 |



第36図 第20号住居址

第21号住居址 (第37図 図版20-1)

本址は、調査区の中央付近南寄りに検出された。住居址の平面形態は、正方形を呈する。規模は一辺が4.5m、深さ20cmを測る。カマドは、東壁の中央やや南寄りに付設されていた。貯蔵穴は、住居址の南東隅に掘り込まれていた。規模は、長軸80cm、短軸50cm、深さ40cmであり、平面形態は隅丸方形を呈する。ほぼ全周をする深さ10cm程度の壁溝が掘り込まれている。また、カマド前の床の直上には、明灰色粘質土のブロックが多く見受けられた。このことは、住居址を廃棄する課程でカマドを人為的に壊していく作業があったことが想定できる。住居址北西隅に棒状の片岩礫が10個置かれた状態で出土した。しかし、時期を細かく限定できる遺物は出土していない。

第21号住居址カマド (第38図 図版20-2)

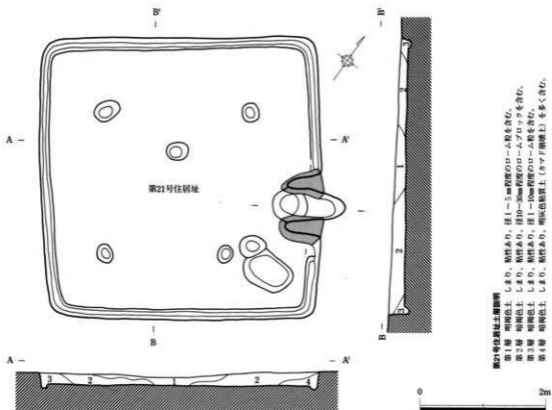
本址は、住居址東壁の中央やや南寄りに付設されていた。遺存状態は、良好である。規模は、全長が115cm、幅が110cm、袖の長さ50cmを測る。焚口部の掘り込みは、しっかりしている。カマドの煙道部に続く奥壁の立ち上がりはやや急激であり、その手前のテラス状の部位に焼面が検出された。カマドの構築材には、明灰色粘質土が使用されていた。

第22号住居址 (第39図 図版21-2・図版22-2)

本址は、調査区の中央付近南寄りに検出された。平面形態は、正方形を呈する。規模は一辺が2.6m、深さ40cmを測る小型の竪穴住居址である。カマドは、東壁のやや南寄りに付設されていた。貯蔵穴は、住居址の東隅に掘り込まれていた。規模は、長軸30cm、深さ30cmであり、平面形態は円形を呈する。本址には、ほぼ全周をする深さ10cm程度の壁溝が掘り込まれている。また、床は貼り床を施されており、床面は非常に硬質である。本址の南隅付近に床面よりやや浮いた状態で土師器の坏が出土した。出土遺物の型式により真間期の所産である。

第22号住居址カマド (第40図 図版22-1)

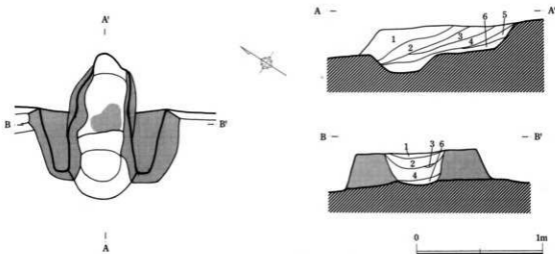
本址は、住居址東壁の中央やや南寄りに付設されていた。遺存状態は、良好である。規模は、全長が90cm、幅が90cm、袖の長さ15cmを測る。焚口部の掘り込みは、しっかりしている。カマドの煙道部に続く奥壁の立ち上がりはやや急激であり、その手前のテラス状の部位より25cm浮いた位置に長甕が底部を南に向けた横位の状態で出土した。カマドの約7割程度が屋外にあり、非常に短い袖部が屋内に残っている。



第21号住居址土層説明

- 第1層 明褐色土 しまり、粘性あり、径1-5mm程度のローム粒を含む。
 第2層 明褐色土 しまり、粘性あり、径10-30mm程度のロームブロックを含む。
 第3層 明褐色土 しまり、粘性あり、径1-10mm程度のローム粒を含む。
 第4層 明褐色土 しまり、粘性あり、明灰色粘質土（カマド層）を多く含む。

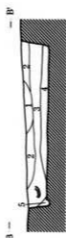
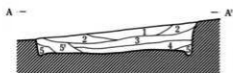
第37図 第21号住居址



第38図 第21号住居址カマド

第21号住居址カマド土層説明

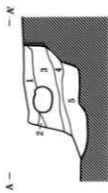
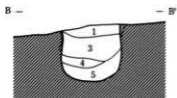
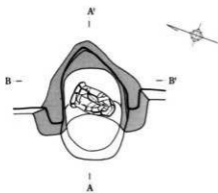
- | | | | |
|-----------|----------------------------|-----------|----------------------------|
| 第1層 暗褐色土 | ローム小ブロック多く、白色粒子を均一に、焼土粒含む。 | 第4層 暗灰色土 | ローム・焼土ブロックを少量、炭化物粒子を均一に含む。 |
| 第2層 暗褐色土 | ローム粒子・白色粒子を少量、灰色ブロックを含む。 | 第5層 暗褐色土 | 焼土粒子、炭化物粒子（径2mm）を少量含む。 |
| 第3層 灰褐色粘土 | 焼土小ブロック（径3mm）と焼土粘土を含む。 | 第6層 暗灰褐色土 | ローム小ブロックを少量、ローム粒子を均一に含む。 |



第39図 第22号住居址

第22号住居址土層説明

- 第1層 明褐色土 しまり、粘性あり、径1～10mm程度のローム粒を多く含む。
- 第2層 暗褐色土 しまり、粘性あり、径1～2mm程度のローム粒を若干含む。
- 第3層 暗褐色土 しまり、粘性あり、径1～3mm程度のローム粒と炭化粒子を含む。
- 第4層 暗褐色土 しまり、粘性あり、径1mm以下のローム粒を多く含む。
- 第5層 暗褐色土 しまり、粘性あり、径1～10mm程度のローム粒を含む。



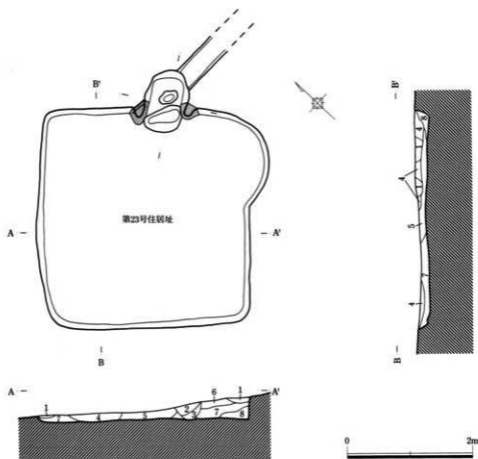
第40図 第22号住居址カマド

第22号住居址カマド土層説明

- 第1層 暗褐色土 しまり、粘性あり、径1mm以下のローム粒を多く含む。
- 第2層 明褐色土 しまり、粘性あり、径1～5mm程度のローム粒を多く含む。
- 第3層 暗褐色土 しまり、粘性あり、径1～5mm程度のローム粒を若干含む。
- 第4層 暗褐色土 しまり、粘性あり、明褐色土層に土砂である。
- 第5層 明褐色土 しまり、粘性あり、焼土を多く含む。

第23号住居址 (第41図 図版23-1)

本址は、調査区の南側中央付近に検出された。平面形態は、正方形を呈する。規模は、一辺が3.5m、深さ15cmを測る。カマドは、北東壁の中央に付設されていた。カマドの上部と住居址の東隅付近は、比較的大きな擾乱がある。そのほか、貯蔵穴や壁溝などの掘り込みは見受けられない。土師器の小型の甕や須恵器の坏および壺の破片が数点出土している。出土遺物の型式により国分期の所産である。



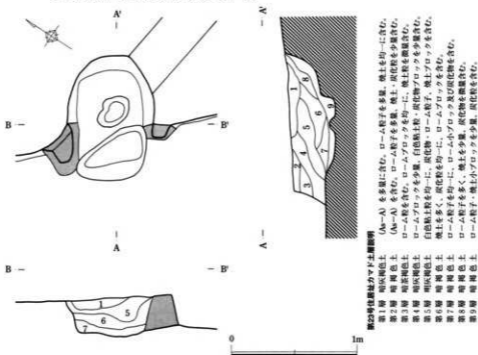
第41図 第23号住居址

第23号住居址土層説明

- | | |
|-----------|----------------------------------|
| 第1層 暗灰褐色土 | (As-A)・ローム粒子を多量、ロームブロック、焼土を含む。 |
| 第2層 暗茶褐色土 | ローム粒を多量、炭化粒を少量、焼土粒子を微量を含む。 |
| 第3層 暗茶褐色土 | ローム粒子を多量、炭化物粒子を少量含む。 |
| 第4層 暗褐色土 | (As-A)を微量に含む。ローム粒子を多量、焼土・炭化粒を含む。 |
| 第5層 暗茶褐色土 | ローム粒子を多く含む。ロームブロックを均一に焼土粒を含む。 |
| 第6層 暗灰褐色土 | (As-A)を微量に含む。ローム粒を均一に、炭化粒子微量含む。 |
| 第7層 暗褐色土 | ローム粒子を均一に、ロームブロック及び炭化物粒子を微量含む。 |
| 第8層 暗褐色土 | ローム粒を均一に、焼土粒、炭化粒、ロームブロックを微量含む。 |

第23号住居址カマド (第42図 図版23-2)

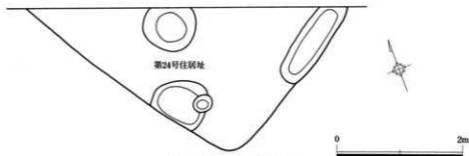
本址は、住居址の北東壁の中央に付設されていた。遺存状態は、良好である。規模は、全長が100cm、幅が85cm、袖の長さ15cmを測る。本址の中央に支脚があったと推定される窪みが検出された。カマドの約7割程度が屋外にあり、非常に短い袖部が屋内に残っている。



第42図 第23号住居址カマド

第24号住居址 (第43図 図版24-1)

本址は、調査区の南西に検出された。遺構の一部は、調査区外へ延びており調査は、全体の4割程度にとどまった。平面形態は、方形を呈する。掘り込みは浅く、カマドは検出されていない。出土遺物は無く時期は不明である。



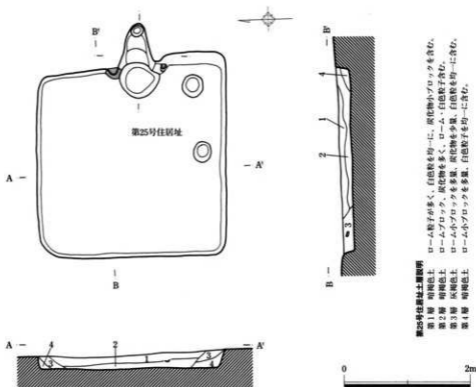
第43図 第24号住居址

第25号住居址 (第44図 図版24-2)

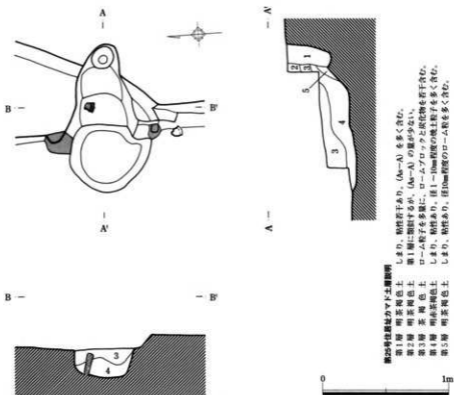
本址は、調査区の西側に検出された。住居址の平面形態は、正方形を呈する。規模は一辺が3m、深さ20cmを測る。カマドは、東壁の中央に付設されていた。貯蔵穴は、住居址の南東隅に掘り込まれていた。規模は、長軸30cm、深さ40cmであり、平面形態は円形を呈する。壁溝は無い。住居址やカマドの覆土には多くの炭化物が含まれており、火災住居址の様相を示していた。本址からは、土師器の坏や甕が出土している。これらの出土遺物の中には火災が鎮火した後、に投棄されたのではないかと示す状況を示す遺物もあった。出土遺物の型式より本址は鬼高期の所産である。

第25号住居址カマド (第45図 図版25-1)

本址は、住居址東壁の中央に付設されていた。遺存状態は、良好である。規模は、全長が120cm、幅が100cm、袖の長さ15cmを測る。焚口部の掘り込みは、しっかりしている。カマドの煙道部に続く奥壁の立ち上がりはやや急激であり、本址の内壁は、非常によく焼けていた。また、本址中央より北側に片岩の支脚が設けられていた。そのほか、カマド構築材には、明灰色粘質土が使用されていた。



第44図 第25号住居址



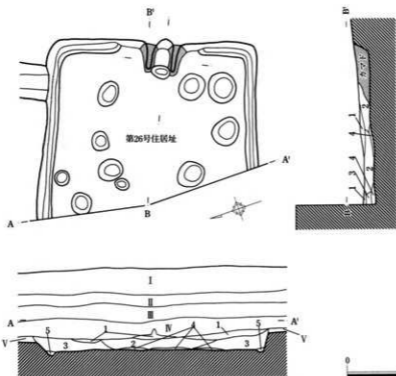
第45図 第25号住居址カマド

第26号住居址 (第46図 図版26-1)

本址は、調査区の南西に検出された。住居址の一部は調査区外西へ延びており、調査は全体の7割程度にとどまった。また、住居址の北東隅付近には、一部攪乱を受けている。住居址の平面形態は、方形を呈する。確認できた規模は南北に3.3m、東西に2.5m、深さ25cmを測る。カマドは、東壁の中央に付設されていた。貯蔵穴は、住居址の南東隅に掘り込まれていた。規模は、長軸50cm、深さ40cmであり、平面形態は円形を呈する。確認できた範囲では、ほぼ全周をする深さ10cm程度の壁溝が掘り込まれている。出土遺物は、坏が2固体出土しており、遺物の型式から本址は、鬼高期の所産である。

第26号住居址カマド (第47図 図版26-2)

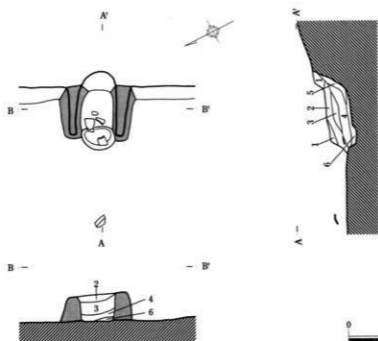
本址は、住居址東壁の中央に付設されていた。遺存状態は、良好である。規模は、全長が60cm、幅が60cm、袖の長さ35cmを測る。焚口部の掘り込みは、しっかりしている。カマドの煙道部に続く奥壁の立ち上がりはやや急激である。カマド構築材には、明灰色粘質土が使用されていた。ほか、袖の外周は、住居床面より垂直気味に立ち上がりカマド本体の形がやや方形の様相を示す。



第46図 第26号住居址

第26号住居址土層説明

- 第1層 褐色土 ローム粒子、炭化物粒子を散見含む。しまり、粘性あり。
- 第2層 褐色土 ローム小ブロックを均一に、炭化物小ブロック、焼土粒子を少量含む。
- 第3層 褐色土 ローム粒子を均一に、ロームブロックを多く、炭化物粒子、炭化物を含む。
- 第4層 褐色土 ローム小ブロック、炭化物粒子を散見、ローム粒子を均一に含む。
- 第5層 褐色土 ローム小ブロックを少量、炭化物粒子を散見含む。



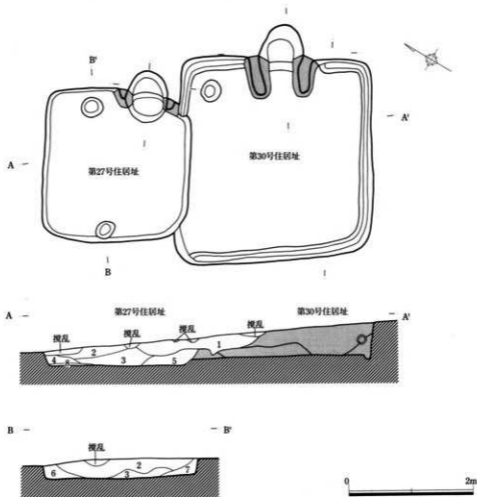
第47図 第26号住居址カマド

第26号住居址カマド土層説明

- 第1層 褐色土 ローム粒子、炭化物粒子、焼土粒子を少量含む。
- 第2層 褐色粘土 ローム小ブロックを少量、焼土ブロックを含む。
- 第3層 褐色粘土 炭化物粒子を均一に、焼土粒子を多量、炭化物土ブロックを含む。
- 第4層 褐色粘土 ローム小ブロックを均一に、炭化物粒子、焼土ブロックを少量含む。
- 第5層 褐色粘土 ローム小ブロックを均一に、炭化物粒子、白色粒子を少量含む。
- 第6層 褐色粘土 ローム小粒子（厚2mm）を均一に、焼土粒子（厚2mm）を多量含む。

第27号住居址 (第48図 図版27-1)

本址は、調査区の中央付近やや南寄りに検出された。第30号住居址を切って構築されている。平面形態は、正方形を呈する小型の住居址である。規模は、2.4m、深さ30cmを測る。カマドは、東壁の中央やや南寄りに付設されていた。貯蔵穴や壁溝などの掘り込みは認められず、カマドが付設された作業小屋のような印象であった。出土遺物は、カマドの南前から胴下半を欠損した甕が出土している。遺物の型式から、本址は鬼高期の所産である。



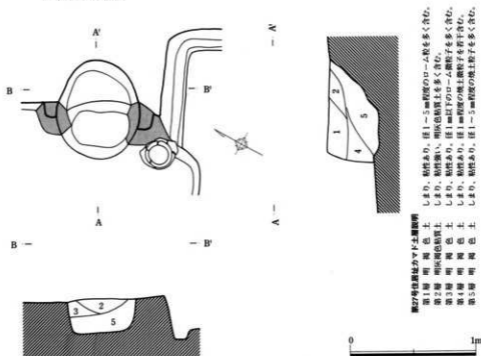
第48図 第27号住居址

第27号住居址土層説明

- | | |
|----------|---------------------------------|
| 第1層 明褐色土 | 径1~30mm程度のローム粒及びブロックを多含む。 |
| 第2層 明褐色土 | しまり、粘性あり。径1~10mm程度のローム粒をやや多く含む。 |
| 第3層 暗褐色土 | しまり、粘性あり。径1~3mm程度のローム粒を含む。 |
| 第4層 黒褐色土 | しまり、粘性あり。径1~10mm程度のローム粒を若干含む。 |
| 第5層 暗褐色土 | しまり、粘性あり。径1~30mm程度のローム粒を含む。 |
| 第6層 明褐色土 | しまり、粘性あり。径1~5mm程度のローム粒を多く含む。 |
| 第7層 明褐色土 | しまり、粘性あり。明灰色粘質土粒(カマド崩壊土)を若干含む。 |
| 第8層 明黄色土 | しまり、粘性あり。径1mm以下のローム粒を多く含む。 |

第27号住居址カマド (第49図 図版27-2)

本址は、住居址東壁の中央やや南寄りに付設されていた。遺存状態は、良好である。規模は、全長が85cm、幅が100cm、袖の長さ15cmを測る。焚口部の掘り込みは、しっかりしている。カマドの煙道部に続く奥壁の立ち上がりはやや急激である。



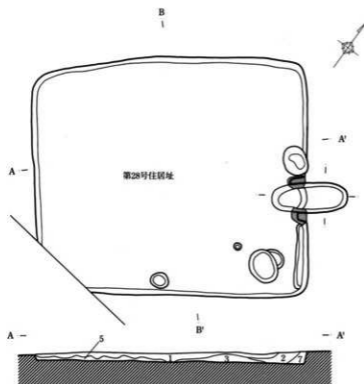
第49図 第27号住居址カマド

第28号住居址 (第50図 図版29-1)

本址は、調査区の南側中央付近に検出された。住居址の平面形態は、長方形を呈する。規模は長辺が4.5m、短辺が4.0m、深さ20cmを測る。カマドは、東北壁の中央に付設されていた。貯蔵穴は、住居址の南東隅に掘り込まれていた。規模は、長軸60cm、短軸50cm、深さ30cmであり、平面形態は長方形を呈する。本址北側の壁は、攪乱によりかなり荒れており、床は既に失われていた。貯蔵穴の付近からは、土師器の坏や甕が纏まって出土している。出土遺物の型式より本址は鬼高期の所産である。

第28号住居址カマド (第51図 図版29-2)

本址は、住居址北東壁の中央に付設されていた。遺存状態は、良好である。規模は、全長が120cm、幅が70cm、袖の長さ20cmを測る。煙道部に続く奥壁の立ち上がりは緩やかであり、煙道手前のテラス状の部分は、非常によく焼けていた。また、本址中央よりやや奥に石製の支脚が設けられていた。

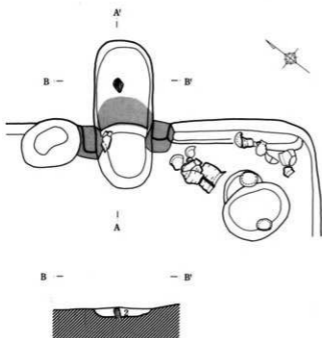


第50図 第28号住居址

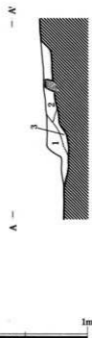


第28号住居址土層説明

第1層 明褐色土 しまり、粘性若干あり。(A-A')を多く含む。
 第2層 暗褐色土 しまり、粘性若干あり。厚1—3mm程度のローム殻を若干含む。
 第3層 暗褐色土 しまり、粘性若干あり。厚10—50mmのロームブロックを多く含む。
 第4層 暗褐色土 厚1—5mm程度のローム殻と厚1—2mmの炭化機土殻を含む。
 第5層 暗褐色土 厚5mm程度のローム殻と厚1mm程度の炭化機土殻を含む。
 第6層 暗褐色土 しまり、粘性あり。厚1cm以下のローム殻断片を多く含む。
 第7層 暗褐色土 厚1—10mm程度のローム殻と明褐色機土層を若干含む。
 第8層 暗褐色土 しまり、粘性あり。厚1—5mm程度のローム殻を若干含む。



第51図 第28号住居址カマド

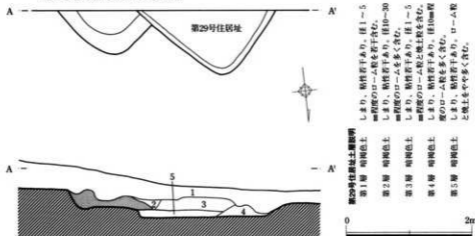


第28号住居址カマド土層説明

第1層 暗褐色土 しまり、粘性あり。厚1—10mm程度のローム殻を若干含む。
 第2層 暗褐色土 しまり、粘性あり。厚1—5mm程度の機土殻を若干含む。
 第3層 暗赤褐色土 しまり、粘性あり。機土殻を多く含む。

第29号住居址 (第52図 図版30-1)

本址は、調査区の南側中央付近に検出された。遺構の殆どの部分は、調査区外であり、調査ができたのは全体の2割程度と推定される。住居址の平面形態は、方形を呈する。規模は、深さ20cmを測る。調査区壁による土層観察により、焼土粒がやや多く認められる。また、周囲の住居址カマドの付設位置を考慮した場合、本址のカマドは、東北壁にあると推定される。出土遺物の型式より本址は真間期の所産である。



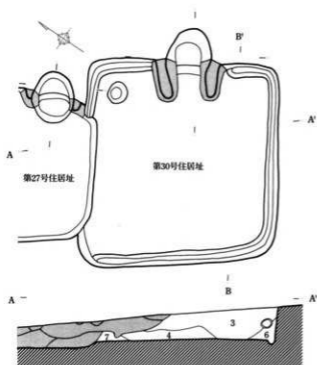
第52図 第29号住居址

第30号住居址 (第53図 図版27-1)

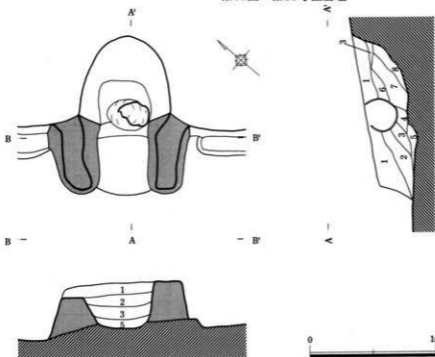
本址は、調査区の中央付近やや南寄りに検出された。西側の一部は、第27号住居址によって切られている。住居址の平面形態は、正方形を呈する。規模は一辺が3.2m、深さ20cmを測る。カマドは、東北壁の中央に付設されていた。貯蔵穴は、住居址の北隅に掘り込まれていた。規模は、長軸40cm、深さ30cmであり、平面形態は円形を呈する。壁際には、西隅の一部を除き深さ10cm程度の壁溝が掘られていた。壁がやや崩壊始めた頃に火災にあっていて、平瓶がやや浮いた状態で炭化層付近にあることなどから住居廃絶直後に祭祀をおこなった可能性を考慮することができる。出土遺物の時期より本址は真間期の所産である。

第30号住居址カマド (第54図 図版28-1)

本址は、住居址北東壁の中央に付設されていた。遺存状態は、良好である。規模は、全長が120cm、幅が110cm、袖の長さ50cmを測る。焚口部の掘り込みはやや浅く、カマドの煙道部に続く奥壁の立ち上がりはやや急激である。煙道部手前のテラス状の部分の上10cm程度のところに甕が掛けられた状態で出土した。



第53図 第30号住居址



第54図 第30号住居址カマド

第30号住居址土層説明

- 第1層 河川砂土 しまり、粘性あり、厚1-10cm程度のローム粒を多く含む。
- 第2層 河川砂土 しまり、粘性あり、厚1-10cm程度のローム粒を若干含む。
- 第3層 河川砂土 しまり、粘性あり、ローム粒及びブロックを多く含む。
- 第4層 河川砂土 厚1-30cm程度のローム粒及びブロックを若干含む。
- 第5層 河川砂土 しまり、粘性あり、厚1mm程度のローム粒を若干含む。
- 第6層 河川砂土 しまり、粘性あり、厚1mm程度のローム粒と炭化粒を多く含む。
- 第7層 河川砂土 厚30-50cm程度のロームブロックと炭化粒を若干含む。
- 第8層 河川砂土 しまり、粘性あり、炭化粒を多く含む。
- 第9層 河川砂土 しまり、粘性あり、第13層に類似する色土層がやや多い。

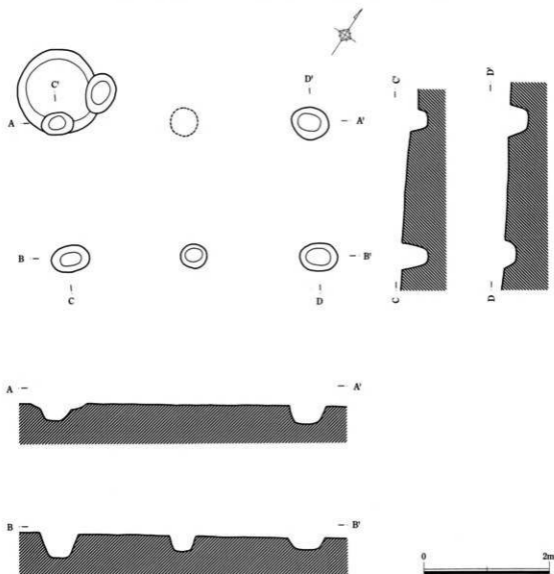
第30号住居址カマド土層説明

- 第1層 河川砂土 ローム粒を主体に通常に多く含む、ロームブロックを多く含む。
- 第2層 河川砂土 ローム粒を少量、ロームブロックを散見含む。
- 第3層 河川砂土 ローム粒を少量、ロームブロック、焼土粒、炭化粒を含む。
- 第4層 河川砂土 焼土ブロック、焼土粒を多く、ローム粒・ブロックを少量含む。
- 第5層 河川砂土 ローム粒を均一に、焼土粒を少量含む。
- 第6層 河川砂土 ローム粒を均一に、炭化焼土・ローム粒を少量含む。
- 第7層 河川砂土 ローム粒を均一に、焼土ブロックを少量、焼土粒を多く含む。
- 第8層 河川砂土 ローム粒・焼土粒を散見含む。

b. 掘立柱建物址

第1号掘立柱建物址 (第55図)

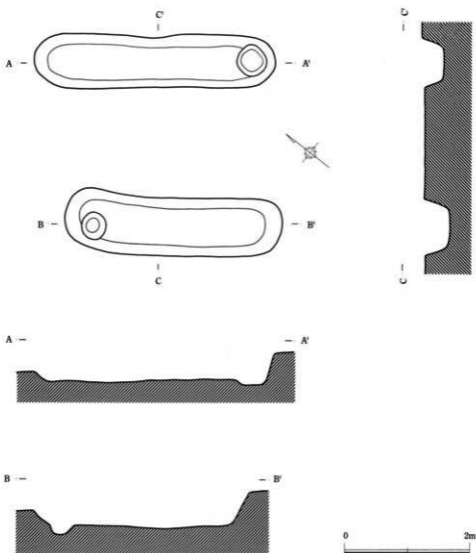
本址は、調査区の南東側に検出された。形態は、1間×2間で長方形を呈する。北側の1本が検出できないものの、柱の通りは、比較的良い。規模は、南北に2.2m、東西に4mで柱心間は約2mの間隔である。柱穴は、直径約50cmから60cmでありやや楕円状である。深さは確認面より20cmから40cmである。本址の時期は、出土遺物が無く明確ではないが、本遺跡の時期を考慮した場合、古墳時代後期から奈良・平安時代の所産であると推定される。



第55図 第1号掘立柱建物址

第2号掘立柱建物址 (第56図 図版32-1)

本址は、調査区の中央付近南寄りに検出された。柱の配置は、それぞれが独立した柱穴ではなく約1.8m間隔で平行に並んだ2基の土壇で成り立っている。形態は、方形を呈する。規模は、南北に2.8m、東西に3mである。北側の掘り込みは、長軸382cm短軸84cm、また南側の掘り込みは、長軸344cm短軸90cmである。双方共に平面形態は、隅丸方形であり、底面は、平坦である。本址の時期は、出土遺物が無く明確ではないが、本遺跡の時期を考慮した場合、古墳時代後期から奈良・平安時代の所産であると推定される。

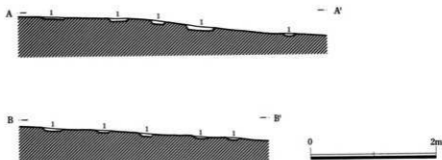


第56図 第2号掘立柱建物址

c. 畝状遺構

畝状遺構 (第57図 図版32-2)

本址は、調査区の西側第25号住居址周辺に検出された。遺構の一部は、調査区外へ伸びていると推定される。畝の中心同士の間隔は約80cm程度であり、調査ができたのは東西14m、南北10mの約140㎡である。土層観察により、炭化物粒がやや多く認められた。本址は、畝を地形の高い方から低い方へ縦位に畝立てを行っている。この傾向は、黒井峯遺跡(石井・梅沢1994)にも類似性を窺うことができる。畝の時期は明確ではない。しかし、遺構を浅間山系B軽石が覆っていたが、覆土には浅間山系B軽石が混入していないという特徴があった。更に、本遺跡の時期を考慮した場合、本址は、古墳時代後期から奈良・平安時代の所産であると推定される。



第57図 畝状遺構

畝状遺構土層説明

第1層 暗褐色土 ローム粒子多く、炭化物粒子均一に含まれる。しまり、粘性がある。

d. 土壇

第17号土壇(第19図)

本址は、調査区中央付近西寄りに検出された。第11号住居址カマド前を切つて構築されている。平面形態は円形を呈する。規模は長軸が1.2m、深さ30cmを測る。底面はやや平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第18号土壇 (第60図 図版31-1)

本址は、調査区北東側に検出された。平面形態は長方形を呈する。規模は長軸が7.45m、短軸が0.75m、深さ30cmを測る。底面はやや平坦であり壁は全体的にオーバーハングしている。

第19号土壇 (第59図)

本址は、調査区北東側に検出された。平面形態は円形を呈する。規模は長軸が1.05m、深さ15～25cmを測る。底面はやや平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第20号土壌 (第59図)

本址は、調査区中央付近の北よりに検出された。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸が1.86m、短軸が1.5m、深さ16~24cmを測る。底面はやや平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第21号土壌 (第59図)

本址は、調査区中央付近の北よりに検出された。平面形態は、ほぼ円形を呈する。規模は長軸が1.5m、深さ30~43cmを測る。底面はやや平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第22号土壌 (第59図)

本址は、調査区中央付近の北よりに検出された。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸が1.95m、短軸が1.8m、深さ40~53cmを測る。底面はやや平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第23号土壌 (第59図)

本址は、調査区東北に検出された。平面形態は円形を呈する。規模は長軸が1.2m、深さ18cmを測る。底面はやや平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第24号土壌 (第60図)

本址は、調査区北東に検出された。平面形態は長方形を呈する。規模は長軸が3.4m、短軸が0.9m、深さ30~40cmを測る。底面はやや平坦であり壁は全体的にオーバーハングしている。

第25号土壌 (第60図 図版31-1)

本址は、調査区北東に検出された。平面形態は隅丸方形を呈する。規模は長軸が6.65m、短軸が1m、深さ30~60cmを測る。底面はやや平坦であり壁は東側の一部を除いてオーバーハングしている。

第26号土壌 (第60図 図版31-1)

本址は、調査区北東に検出された。東側は調査区外に延びている。平面形態は隅丸方形を呈する。確認した規模は長軸が14m、短軸が1m、深さ40cmを測る。底面はやや平坦であり壁は全体的にオーバーハングしている。

第27号土壌 (第59図)

本址は、調査区中央付近の東側に検出された。平面形態は円形を呈する。規模は長軸が1.14m、深さ20cmを測る。底面はやや平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第28号土壌 (第59図)

本址は、調査区中央付近の北寄りに検出された。平面形態は円形を呈する。規模は長軸が0.88m、深さ90~102cmを測る。底面はやや平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第29号土壌 (第59図)

本址は、調査区中央付近の北寄りに検出された。平面形態は円形を呈する。規模は長軸が1m、深さ15~26cmを測る。底面はやや平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第30号土壌 (第59図)

本址は、調査区中央付近の北寄りに検出された。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸が1.42m、短軸1.18m、深さ13~26cmを測る。底面はやや平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第31号土壌 (第61図)

本址は、調査区北西に検出された。平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は長軸が6.3m、短軸0.55m、深さ38cmを測る。底面はやや平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第32号土壌 (第61図)

本址は、調査区北西に検出された。平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は長軸が3.44m、短軸1.1m、深さ16~50cmを測る。底面はやや平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第33号土壌 (第61図)

本址は、調査区北西に検出された。平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は長軸が2.68m、短軸0.7m、深さ18~28cmを測る。底面はやや平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。

第34号土壌 (第61図 図版31-2)

本址は、調査区南東に検出された。平面形態は円形を呈する。規模は長軸が1.2m、深さ20cmを測る。底面は皿状であり壁は緩やかに立ち上がる。

e. 溝状遺構

第9号溝 (第14図)

本址は、調査区北東側に検出された。方向は、東から西に伸びている。規模は、上幅40cm下幅30cm深さ10cmを測る。底面は平坦であり壁はやや急激に立ち上がる。第10号住居址のカマド付近上層を切っている。覆土に浅間山系A軽石を含んでいることから近現代の所産である。

第10・11・12号溝 (第58図)

本址は、調査区中央に検出された。方向は、東から西に調査区外へ伸びており、今日の大字倉林と大字高柳を分ける字境に相当する。規模は、最大上幅200cm、下幅150cm、深さ20~30cmを測る。複数の溝が切りあっており、底面はある程度の起伏があるが、壁は緩やかに立ち上がる。第14号住居址カマド付

近を切っている。覆土に浅間山系A軽石を含んでいることから近現代の所産である。

第13号溝 (第23図)

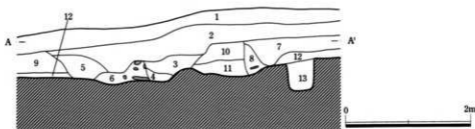
本址は、調査区中央の北寄りに検出された。方向は、南から北に延びている。規模は、上幅80cm下幅60cm深さ30cmを測る。底面は平坦であるが、壁は急激に立ち上がる。第13号住居址の上面の一部を南北に切っている。覆土に浅間山系A軽石を含んでいることから近現代の所産である。

第14号溝 (第15図)

本址は、調査区中央よりやや西側に検出された。等高線に並行であり、方向は、南から北に調査区外へ延びている。規模は、上幅100cm下幅は不明であるが、深さ30cmを測る。底面は平坦であり壁は急激に立ち上がる。覆土に浅間山系A軽石を含んでいることから近現代の所産であり、地境の溝と推定される。

第15号溝 (第61図)

本址は、調査区北側に検出された。方向は、東から西に調査区外へ延びている。規模は、上幅70cm下幅50cm深さ10cmを測る。底面は平坦であり壁は緩やかに立ち上がる。第31号土壇を切っている。覆土に浅間山系A軽石を含んでいることから近現代の所産である。



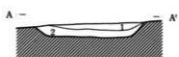
第58図 第10・11・12号溝土層断面図

第10・11・12号溝土層説明

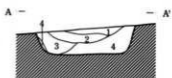
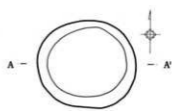
- | | | |
|------|------|-----------------------------------|
| 第1層 | 明灰色土 | 粘性が若干ありややしまっている。As-Aを多く含む。 |
| 第2層 | 明灰色土 | しまり、粘性あり。As-Aを多く含んだ明灰色土ブロックを多く含む。 |
| 第3層 | 明灰色土 | しまり、粘性若干あり。As-Aを多く含む。 |
| 第4層 | 明灰色土 | しまり、粘性若干あり。As-Aと径1～5mm程度のローム粒を含む。 |
| 第5層 | 明灰色土 | しまり、粘性若干あり。第4層に類似する。 |
| 第6層 | 明灰色土 | しまり、粘性若干あり。礫を多く含む。 |
| 第7層 | 明灰色土 | しまり、粘性若干あり。As-Aを非常に多く含む。 |
| 第8層 | 明灰色土 | しまり、粘性若干あり。礫を含む。 |
| 第9層 | 明灰色土 | しまり、粘性若干あり。下層にAs-Aの純層が部分的に残っている。 |
| 第10層 | 明灰色土 | しまり、粘性あり。第9層に類似する。第9層の再堆積土である。 |
| 第11層 | 明灰色土 | しまり、粘性若干あり。As-Aと径1～5mm程度のローム粒を含む。 |
| 第12層 | 暗褐色土 | しまり、粘性あり。径1～5mm程度のローム粒を多く含む。 |
| 第13層 | 暗褐色土 | しまり、粘性あり。第12層に類似するがロームブロックを多く含む。 |



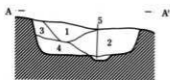
第19号土坑



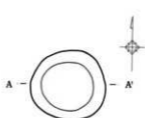
第20号土坑



第21号土坑



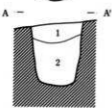
第22号土坑



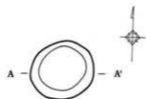
第23号土坑



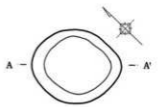
第27号土坑



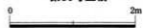
第28号土坑



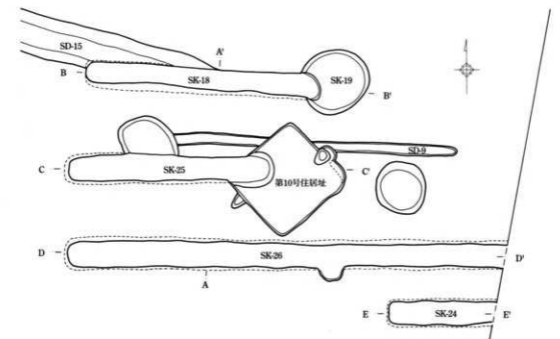
第29号土坑



第30号土坑



第59图 土坑 1



第18・25・26号土壤



第18号土壤



第24号土壤

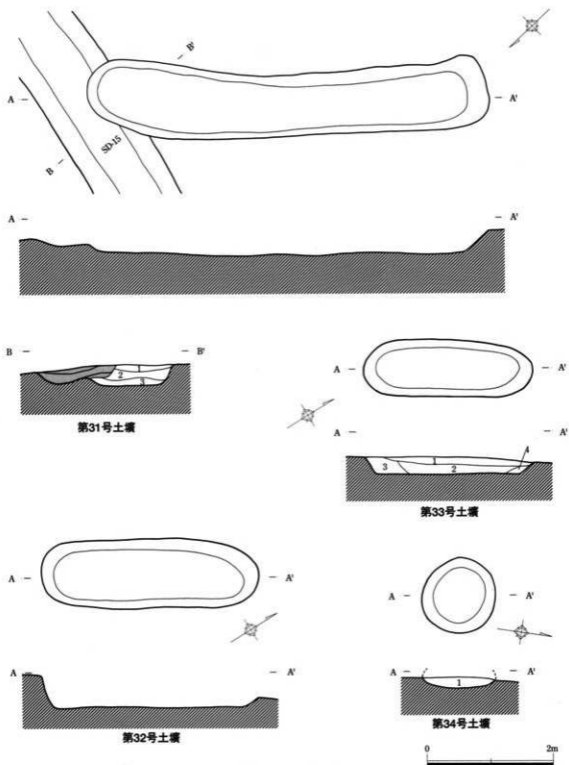


第25号土壤



第26号土壤

第60回 土壤 2



第61图 土壤 3

第18号土壌土層説明

- | | |
|-----------|------------------------------------|
| 第1層 暗褐色土 | しまり、粘性若干あり。As-Aを含む。(攪乱) |
| 第2層 暗褐色土 | しまり、粘性あり。径1~10mm程度のローム粒を少量含む。 |
| 第3層 明黄褐色土 | しまり、粘性あり。径1~30mm程度のローム粒・ブロックを多量含む。 |
| 第4層 暗褐色土 | しまり、粘性あり。径1~5mm程度のローム粒を若干含む。 |
| 第5層 黒色土 | しまり、粘性あり。黒色の有機質層である。 |

第20号土壌土層説明

- | | |
|-----------|--|
| 第1層 明黒褐色土 | ローム粒を少量均一に、ロームブロック・(As-A)を微量含む。しまり、粘性共に有するが弱い。 |
| 第2層 黒褐色土 | ローム粒・ローム小ブロックを少量、(As-A)を微量含む。しまりは有するが粘性弱い。 |

第21号土壌土層説明

- | | |
|-----------|--|
| 第1層 黒褐色土 | (As-A)を少量、ローム粒・炭化物粒を微量含む。しまりは有するが粘性弱い。 |
| 第2層 明褐色土 | ロームブロック主体の層。しまりは有するが粘性弱い。 |
| 第3層 暗茶褐色土 | ローム粒・ロームブロック・(As-A)を少量含む。しまり、粘性共に有する。 |
| 第4層 暗茶褐色土 | ローム粒を少量、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。 |

第22号土壌土層説明

- | | |
|-----------|--|
| 第1層 黒褐色土 | ローム粒・ロームブロックを少量、(As-A)を微量含む。しまり、粘性共に有する。 |
| 第2層 暗茶褐色土 | ローム粒・ロームブロックを多量、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。 |
| 第3層 暗茶褐色土 | ロームブロックを多量、ローム粒を少量含む。しまり、粘性共に有する。 |
| 第4層 茶褐色土 | ローム粒・ロームブロックを少量、YPを微量含む。しまり、粘性共に有する。 |
| 第5層 暗茶褐色土 | ロームブロックを多量、YPを微量含む。しまりあるが粘性弱い。 |

第25号土壌土層説明

- | | |
|-----------|-------------------------------------|
| 第1層 暗褐色土 | しまり、粘性あり。径1mm以下のローム微粒子を若干含む。 |
| 第2層 明黄褐色土 | しまり、粘性あり。径1~5mm程度のローム粒を多量に含む。 |
| 第3層 暗褐色土 | しまり、粘性あり。径1~5mm程度のローム粒を若干含む。 |
| 第4層 暗褐色土 | しまり、粘性あり。径1~10mm程度のローム粒を含む。 |
| 第5層 明黄褐色土 | しまり、粘性あり。径1~30mm程度のローム粒とブロックを多量に含む。 |
| 第6層 黒色土 | しまり、粘性あり。黒色の有機質層である。 |

第26号土壌土層説明

- | | |
|----------|-------------------------------|
| 第1層 暗褐色土 | しまり、粘性若干あり。径1mm程度のローム粒子を若干含む。 |
|----------|-------------------------------|

- 第2層 明黄褐色土 しまり、粘性若干あり。径30～50mm程度のロームブロックが主体である。
- 第3層 暗褐色土 しまり、粘性若干あり。径10～20mm程度のローム粒を多く含む。
- 第4層 暗褐色土 しまり、粘性若干あり。径10～20mm程度のローム粒を若干含む。
- 第5層 黒色土 しまり、粘性共にあり。黒色の有機質層である。

第28号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土 ローム粒を少量、上部に(As-A)を微量含む。しまり、粘性共に有する。
- 第2層 暗茶褐色土 ローム粒・炭化物粒を微量含む。色調は第1層よりやや暗く、しまり、粘性共に有する。

第29号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを微量含む。しまり、粘性共に有する。
- 第2層 暗茶褐色土 ローム粒を微量、下部にYPを若干含む。しまり、粘性共に有する。

第30号土壌土層説明

- 第1層 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックを少量、(As-A)を微量含む。しまり、粘性共に有するが弱い。
- 第2層 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有するが弱い。
- 第3層 茶褐色土 ローム粒を少量、YPを微量含む。しまり、粘性共に有する。

第31号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロックを少量含む。しまり、粘性共に有する。
- 第2層 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロックを少量、炭化物粒を極微量含む。しまり、粘性共に有する。
- 第3層 暗茶褐色土 ローム粒・YPを微量含む。しまり、粘性共に有する。

第33号土壌土層説明

- 第1層 暗茶褐色土 ローム粒を少量、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有するが弱い。
- 第2層 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロックを少量、炭化物粒・YPを微量含む。しまりは有するが粘性弱い。
- 第3層 暗褐色土 ローム粒・炭化物粒・YPを微量含む。しまりは有するが粘性弱い。
- 第4層 茶褐色土 ローム粒を少量、YPを微量含む。しまりは有するが粘性弱い。

第34号土壌土層説明

- 第1層 黒褐色土 しまり、粘性あり。径1～2mm程度の炭化物・ローム微粒子を若干含む。

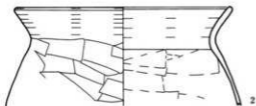
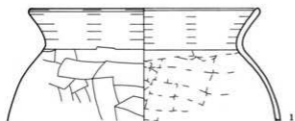


第62図 第1号鍛冶関連遺構

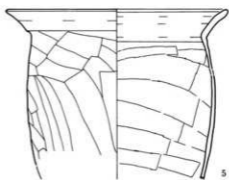
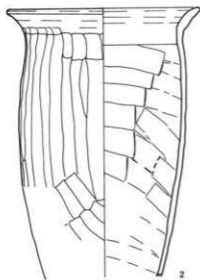
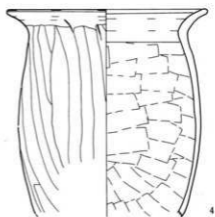
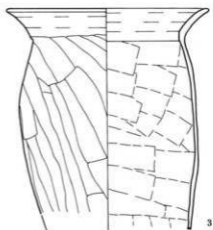
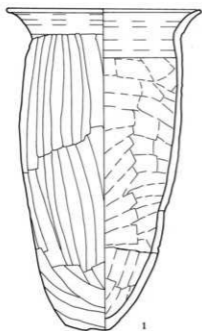
表-1

第11号住居址出土遺物観察表

番号	品名	法量 (cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	残存数・焼成・色調・粘土
1	須恵器 蓋	口径 18.2cm 高さ 3.8cm	口縁部はやや尖っている。口辺部中に 凹線を巡らしている。木野焼。	外内共に定規でのロクロによるヨコナデ。	70% 良 礫化磁焼成 灰褐色 片岩少・砂粒やや多い

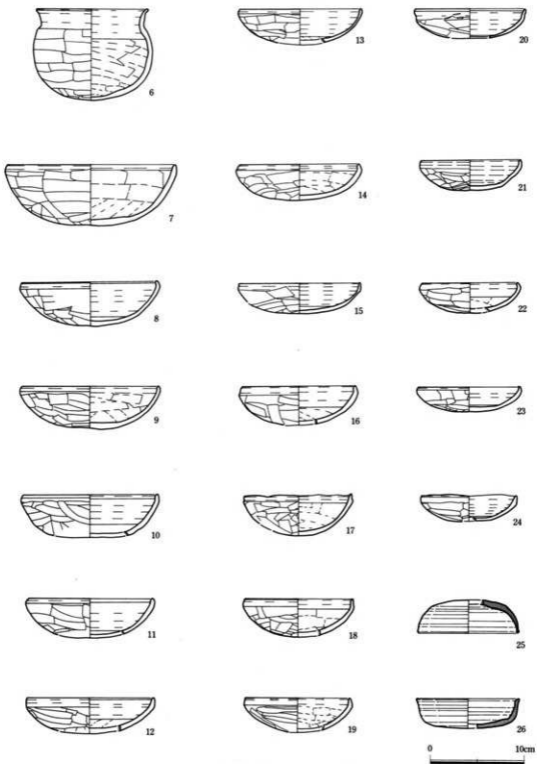


第63図 第11号住居址出土遺物 (表-2)

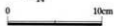
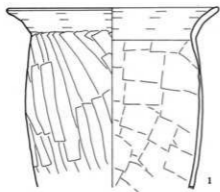


0 10cm

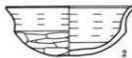
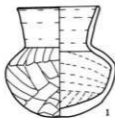
第64图 第12号住居址出土遗物(1)(表-3)



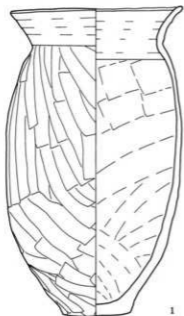
第65图 第12号住居址出土遗物(2)(表-3)



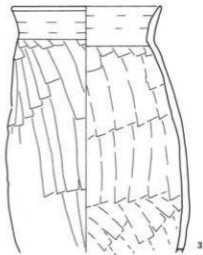
第66图 第14号住居址出土遺物 (表-4)



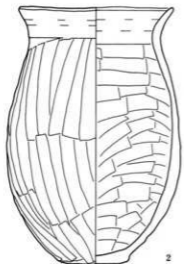
第67图 第15号住居址出土遺物 (表-5)



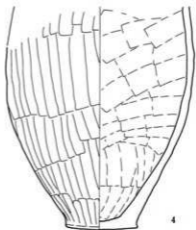
1



3



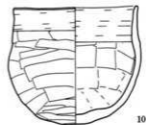
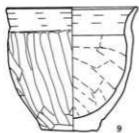
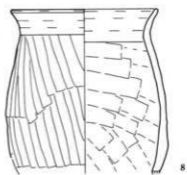
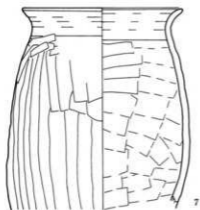
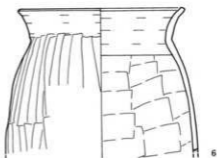
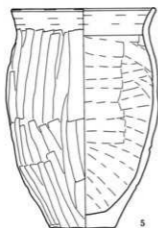
2



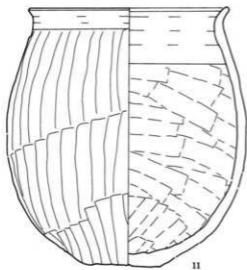
4

0 10cm

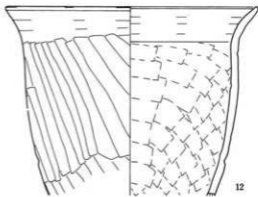
第68图 第16号住居址出土遺物(1)(表-6)



第69图 第16号住居址出土遗物(2)(表-6)



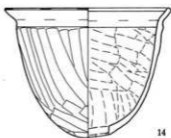
11



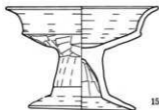
12



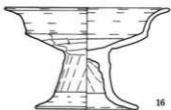
13



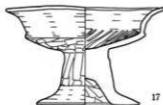
14



15



16



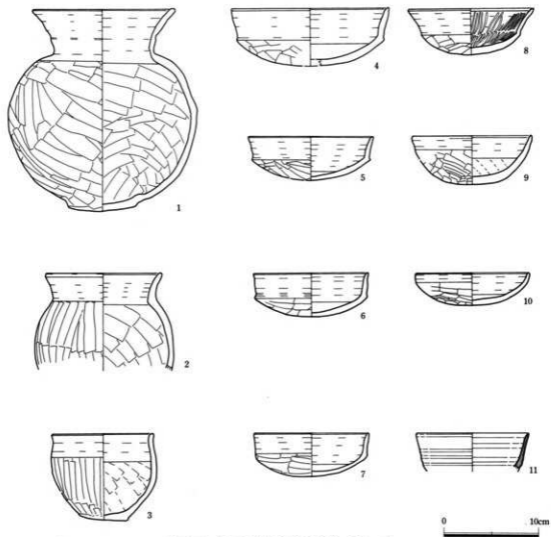
17



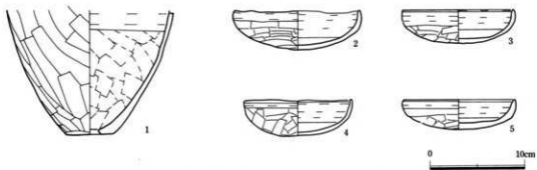
18



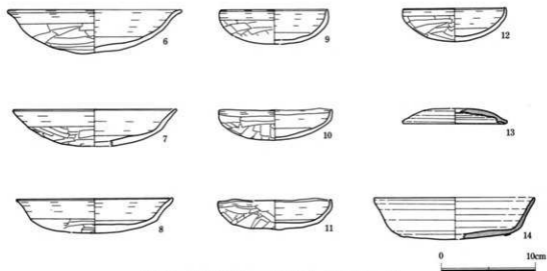
第70图 第16号住居址出土遗物(3)(表-6)



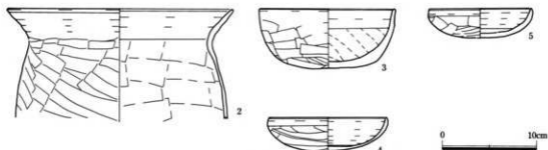
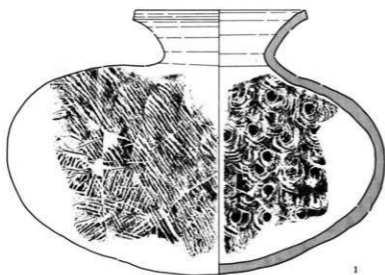
第71图 第17号住居址出土遗物 (表-7)



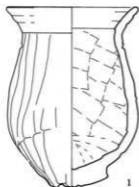
第72图 第18号住居址出土遗物 (1) (表-8)



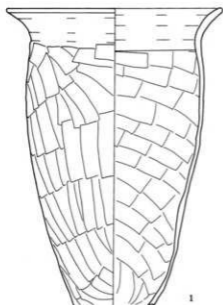
第73图 第18号住居址出土遗物(2)(表-8)



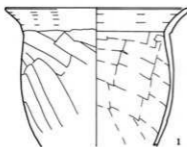
第74图 第19号住居址出土遗物(表-9)



第75图 第20号住居址出土遗物 (表-10)

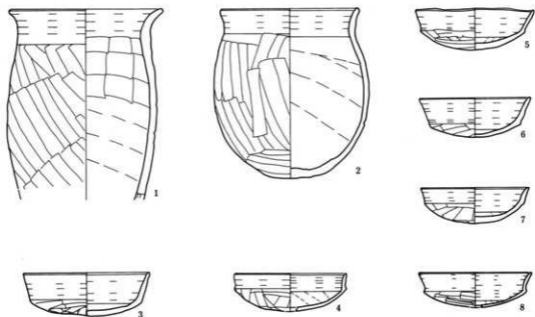


第76图 第22号住居址出土遗物 (表-11)



第77图 第23号住居址出土遗物 (表-12)

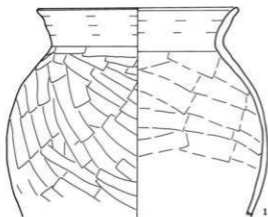




第78图 第25号住居址出土遗物 (表-13)

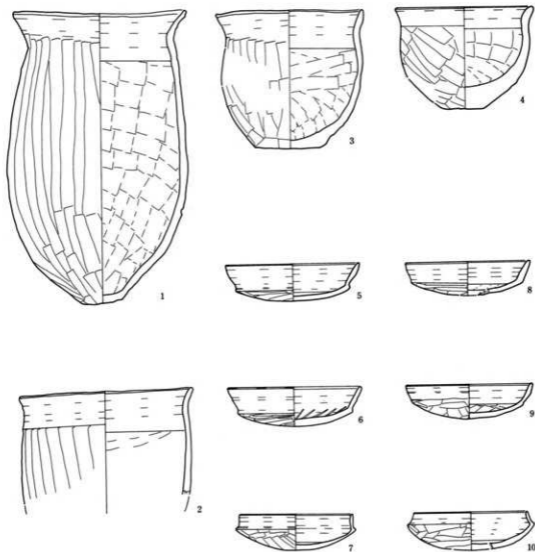


第79图 第26号住居址出土遗物 (表-14)



第80图 第27号住居址出土遗物 (表-15)



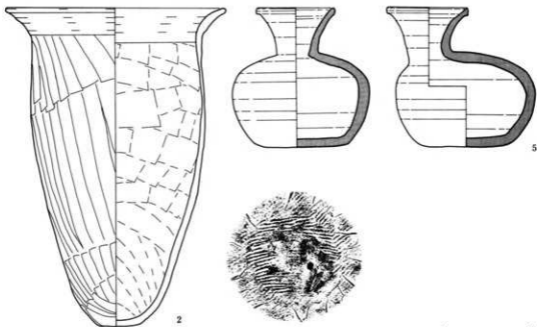
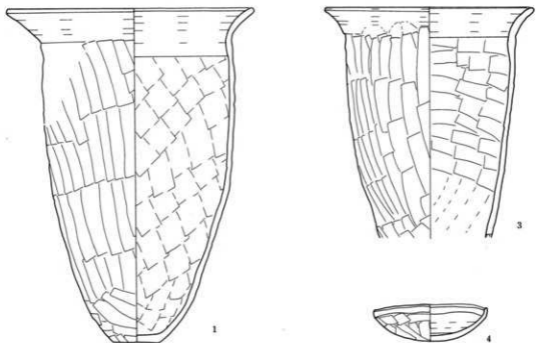


第81图 第26号住居址出土遺物 (表-16)



第82图 第29号住居址出土遺物 (表-17)





第83图 第30号住居址出土遺物 (表-18)

表-2

第11号住居址出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	胎形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	残存度・焼成・色調・胎土
1	鉢	口径 24cm 高さ 12.0cm	口縁部は丸い。口縁部は外反する。胴部中に最大径をもつ。	外側は口縁部はヨコナデ。口縁部から胴部は本口状工具によるヨコナデ。胴部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ。口縁部から胴部は本口状工具によるヨコナデ。胴部はナデのちナデ。外側は口縁部は工具による高取りのちヨコナデ。口縁部は工具によるヨコナデ。胴部はヘラケズリ。内側は口縁部は工具によるヨコナデ。胴部はナデのちナデ。	20% 良 外淡褐色・内淡明褐色 砂粒少・白色粒子均一・長石少 20% 良 外内淡褐色 長石少・雲母少・砂粒均一
2	甕	口径 22.4cm 高さ 10.5cm	口縁部は面をなす。口辺部はやや強く外反する。	外側は口縁部はヨコナデ。口辺部は本口状工具によるヨコナデ。底層はナデ。	80% 良 外内淡褐色 白色粒均一・長石やや多・小石少・砂粒少
3	杯	口径 18.3cm 高さ 4.7cm	口縁部はやや実り気味である。口辺部は大きく外反する。	外側は口縁部はヨコナデ。口辺部は本口状工具によるヨコナデ。底層はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ。口辺部は本口状工具によるナデ。底層はナデ。	50% 良 外内淡褐色 雲母均一・砂粒少
4	杯	口径 14cm 高さ 4.1cm	口縁部はやや実り気味である。口辺部は直線的に立ち上がる。底層はやや凹状を呈する。	外側は口縁部はヨコナデ。底層はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ。口辺部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ。口辺部下位から底層上段は本口状工具によるヨコナデ。底層は本口状工具によるヨコナデ。	70% 良 淡褐色 石英少・雲母多・砂粒少
5	杯	口径 13.5cm 高さ 4.7cm	口縁部はやや実り気味に丸い。口縁部はわずかに内湾する。	外側は口縁部はヨコナデ。底層はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ。口辺部下位から底層上段は本口状工具によるヨコナデ。底層は本口状工具によるヨコナデ。	60% 良 外内淡褐色 雲母均一・石英少・砂粒少・片岩少
6	杯	口径 12.2cm 高さ 3.5cm	口縁部は尖っていて内湾しながら開く。口縁部は短く内折する。胎形はやや歪む。	外側は口縁部はヨコナデ。底層はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ。内面は本口状工具によるナデ。	70% 良 淡褐色 石英少・雲母多・砂粒少
7	杯	口径 12.5cm 高さ 3.5cm	口縁部はやや実り気味である。口辺部は直線的に立ち上がる。	外側は口縁部はヨコナデ。口辺部は本口状工具によるナデ。底層はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ。口辺部から胴部は本口状工具によるナデのちナデ。底層はナデ。	50% 良 淡褐色 石英少・砂粒少・雲母少
8	杯	口径 11.6cm 高さ 3.8cm	口縁部は実る。口唇部は内湾する。口辺部は外反気味に立ち上がる。器内面に新く覆着する。	外側はヨコナデ。口辺部は本口状工具によるヨコナデ。底層はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ。口辺部は本口状工具によるヨコナデ。底層は本口状工具によるナデ。	60% 良 外内淡褐色 雲母均一・石英少・砂粒少・片岩少
9	杯	口径 11.6cm 高さ 3.3cm	口縁部はやや実り気味である。口縁部は外側へ肥厚する。口縁部は直線的に外反する。	外側は口縁部はヨコナデ。口辺部から底層はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ。口辺部から底層は工具によるヨコナデ。底層下位はナデ。ロクロ水浸す。	80% 良 外内淡褐色 小石散・砂粒中・内凹砂 20% 良 灰色 白色粒子少・片岩粒少
10	須恵器蓋	口径 14.2cm 高さ 2.3cm	天弁部は平坦。内面にかえりがつく。		

表-3

第12号住居址出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	胎形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	残存度・焼成・色調・胎土
1	甕	口径 30.4cm 高さ 35.1cm	口縁部はやや実り気味で外側へ肥厚する。胎形はやや歪む。口縁部は大きく外反する。	外側は口縁部はヨコナデ。口縁部から胴部は本口状工具によるヨコナデ。胴部はヘラケズリ。底層はナデ。内側は口縁部から胴部は本口状工具によるナデのちナデ。底層はナデ。	90% 良 外内淡褐色 小石少・砂粒多
2	甕	口径 20cm 高さ 28.4cm	口縁部は丸い。口縁部は大きく開く。	外側は口縁部は本口状工具によるヨコナデ。胴部から底層はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ。口縁部から胴部は本口状工具によるナデのちナデ。胴部から底層は本口状工具によるナデのちナデ。	70% 良 淡褐色 砂粒多・小石少・石英少
3	甕	口径 21cm 高さ 22cm	口縁部は丸い。口縁部は外反する。胴部上段器外面に黒層あり。	外側は口縁部はヨコナデ。口縁部から胴部は本口状工具によるヨコナデ。胴部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ。口縁部から胴部は本口状工具によるヘラケズリ。胴部は本口状工具によるナデ。	40% 良 外褐色・内淡褐色 小石少・砂粒少・雲母少
4	甕	口径 20.6cm 高さ 22cm	口縁部は丸い。口唇部は外反する。	外側は口縁部はヨコナデ。口縁部から胴部は本口状工具によるヨコナデ。胴部はヘラケズリ。内側は口唇部はヨコナデ。口縁部から胴部は本口状工具によるヨコナデ。胴部は本口状工具によるナデのちナデ。底層は斜位のナデ。	60% 良 外褐色・内淡褐色 石英少・砂粒少・長石少
5	甕	口径 23cm 高さ 18cm	口縁部は丸い。口縁部は大きく外反する。器表面に黒層あり。	外側は口縁部はヨコナデ。口縁部から胴部は本口状工具によるヨコナデ。胴部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ。口縁部は本口状工具によるヨコナデ。胴部から底層は本口状工具によるナデのちナデ。	60% 良 淡褐色 砂粒中・小石少・石英少・長石少
6	小壺型	口径 11.7cm 高さ 9.6cm	口縁部は丸味をもつ。口唇部はゆるやかに外反し。胴部中に最大径をもつ。	外側は口唇部は胴部によるヨコナデ。口縁部は工具によるヨコナデ。胴部はヘラケズリ。内側は口縁部は工具によるナデ。胴部は本口状工具によるナデ。	70% 良 外内淡褐色 白色粒子少・長石散・片岩粒散
7	杯	口径 17.7cm 高さ 6.4cm	口縁部はやや実る。口唇部は直線的気味に立ち上がり開く。	外側は口縁部はヨコナデ。口辺部は本口状工具によるナデ。底層はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ。口辺部から底層上段は本口状工具によるナデ。底層はナデ。	60% 良 淡褐色 雲母多・小石少・砂粒少
8	杯	口径 14.2cm 高さ 3.7cm	口縁部は丸い。口唇部は内湾する。	外側は口縁部は丸い。口辺部は本口状工具によるヨコナデ。底層はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ。口辺部から底層上段は本口状工具によるヨコナデ。底層下位はナデ。	30% 良 褐色 砂粒少・小石散

9	環	口径 高さ	14.4cm 4.6cm	口縁部は丸い。口縁部は内湾する。丸底を呈する。	外側は口縁部はヨコナゲ。口縁部は本口状工具によるヨコナゲ、体部から底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ。口縁部から体部は本口状工具によるナゲ。底部は本口状工具によるナゲナゲナゲ。	80% 良 淡褐色 砂粒少・雲母多
10	環	口径 高さ	14.3cm 4.4cm	口縁部は丸い。口縁部はやや内湾する。口縁部はやや直線的に開く。	外側は口縁部はヨコナゲ。口縁部は本口状工具によるナゲ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ。口縁部から底部上段は本口状工具によるヨコナゲ。底部はナゲ。	45% 良 暗褐色 砂粒多
11	環	口径 高さ	13cm 4.2cm	口縁部は尖っている。口縁部はやや内湾し、わずかに肥厚している。	外側は口縁部はヨコナゲ。口縁部は本口状工具によるヨコナゲ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ。口縁部から底部中段は本口状工具によるヨコナゲ。	30% 良 外淡褐色・内暗褐色 砂粒少・石英少・長石少
12	環	口径 高さ	13.6cm 3.8cm	口縁部はやや尖っている。口縁部は直線的に立ち上がる。	外側は口縁部はヨコナゲ。口縁部は本口状工具によるヨコナゲ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ。口縁部から底部中段は本口状工具によるヨコナゲ。底部はナゲ。	35% 良 外内淡褐色 砂粒少・雲母少
13	環	口径 高さ	12.8cm 4cm	口縁部は尖っている。口縁部はわずかに肥厚している。口縁部はやや内湾している。	外側は口縁部はヨコナゲ。底部上半は本口状工具によるヨコナゲ。底部下半はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ。口縁部から底部中段は本口状工具によるナゲ。底部下段はナゲ。	25% 良 外内暗褐色 砂粒少・雲母少・石英微
14	環	口径 高さ	12.6cm 3.9cm	口縁部はやや尖っている。口縁部は内湾する。	外側は口縁部はヨコナゲ。口縁部は本口状工具によるヨコナゲ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ。口縁部から底部中段は本口状工具によるヨコナゲ。底部中段はナゲ。	75% 良 外淡褐色・内暗褐色 砂粒少・雲母多・長石少
15	環	口径 高さ	13cm 3.3cm	口縁部はやや丸い。口縁部は直線的に立ち上がる。	外側は口縁部はヨコナゲ。口縁部は本口状工具によるヨコナゲ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ。口縁部は本口状工具によるヨコナゲ。底部はナゲ。	60% 良 外内淡褐色 石英・砂粒多
16	環	口径 高さ	12cm 4.1cm	口縁部は丸い。口縁部はわずかに内湾して内湾する。	外側は口縁部はヨコナゲ。口縁部は本口状工具によるナゲ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ。口縁部から底部中段は本口状工具によるヨコナゲ。底部はナゲ。	30% 良 淡褐色 砂粒少・雲母少
17	環	口径 高さ	13.4cm 4.4cm	口縁部は尖り気味。口縁部は直線的に外反し。口縁部下段は一条の凹線がある。	外側は口縁部はヨコナゲ。口縁部は本口状工具によるヨコナゲ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ。口縁部から体部は本口状工具によるヨコナゲ。	90% 良 外淡褐色・内淡茶褐色 長石多・石英少・砂粒少・雲母中少
18	環	口径 高さ	11.5cm 4.1cm	口縁部は尖っている。口縁部はゆるやかに内湾している。	外側は口縁部はヨコナゲ。口縁部は本口状工具によるナゲ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ。口縁部から底部は本口状工具によるナゲのちナゲ。	48% 良 外内淡褐色 雲母多・砂粒少
19	環	口径 高さ	11.2cm 3.8cm	口縁部は尖っている。口縁部は内湾する。	外側は口縁部はヨコナゲのちヨコナゲ。口縁部から底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ。口縁部から底部は本口状工具によるナゲのちナゲ。	70% 良 外内暗褐色外面一部灰色 長石多・雲母多・砂粒少
20	環	口径 高さ	11.6cm 2.9cm	口縁部は尖って外側に肥厚している。口縁部は中段に段を有する。口縁部から底部のヘラケズリにノッキングの痕跡が見られる。	外側は口縁部はヨコナゲ。口縁部は本口状工具によるヨコナゲ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ。口縁部から底部上段は本口状工具によるヨコナゲ。底部はナゲ。	35% 良 外内暗褐色 長石多・雲母少・砂粒少・石英少・小石少
21	環	口径 高さ	10.6cm 3.8cm	口縁部は尖っている。口縁部はゆるやかに内湾する。	外側は口縁部はヨコナゲ。口縁部は本口状工具によるヨコナゲ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ。口縁部から底部上半は本口状工具によるヨコナゲ。底部はナゲ。	75% 良 外内暗褐色 内暗褐色 砂粒少・小石少
22	環	口径 高さ	10.2cm 3.2cm	口縁部は尖っている。口縁部は内湾する体部から底部のヘラケズリにノッキングの痕跡が見られる。	外側は口縁部はヨコナゲ。口縁部から体部上半は本口状工具によるヨコナゲ。体部下半から底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ。口縁部は本口状工具によるヨコナゲ。	60% 良 外内暗褐色 砂粒やや多・雲母少・長石少・石英少
23	環	口径 高さ	10.8cm 2.9cm	口縁部はやや尖り気味である。口縁部はゆるやかに内湾し、内側している。	外側は口縁部はヨコナゲ。口縁部は本口状工具によるヨコナゲ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ。口縁部から底部中段は本口状工具によるヨコナゲ。底部下段はナゲ。	65% 良 外内暗褐色 砂粒少・石英微
24	環	口径 高さ	10cm 2.9cm	口縁部はやや尖り気味である。口縁部は直線的に立ち上がる。	外側は口縁部はヨコナゲ。口縁部は本口状工具によるヨコナゲ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ。口縁部から底部上段は本口状工具によるヨコナゲ。底部はナゲ。	48% 良 外内淡褐色 砂粒多・雲母多・石英少
25	両面器環	口径 高さ	10.6cm 3.5cm	天井部は扁平である。天井部と口縁部の稜目の線は鈍い。	口縁部は本口状工具によるナゲのちナゲ。口縁部は本口状工具によるナゲのちナゲ。	30% 良 外内灰褐色 砂粒少・片岩少・石英少
26	両面器環	口径 高さ	10.8cm 3.2cm	ロクロ成形	体部は内外ともに回転ナゲ。底部は糸切り痕あり。	33% 良 灰褐色 砂粒少・片岩粒少

表-4
第14号住居址出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	原形及び制作手法の特徴	調整手法の特徴	残存度・構成・色調・胎土	
1	甕	口径 高さ	22.8cm 19cm	口縁部は丸い。口縁部は大きく外反する。	外側は口縁部はヨコナゲ。口縁部から底部は本口状工具によるヨコナゲ。胴部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ。口縁部は本口状工具によるヨコナゲ。胴部は本口状工具によるナゲのちナゲ。	60% 良 外内淡褐色 白色粒少・長石少 雲母多・小石少・砂粒少

2	坏	口径 高さ	14.1cm 4.1cm	口縁部が突っている。口辺部はやや内傾している。体部から底部にかけてのヘラケズリの工具痕が顕著。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、体部から底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から体部上は木口状工具によるヨコナデ、体部下から底部はナデ。	60% 良 内外淡褐色 砂粒少・石英均一・長石多
3	坏	口径 高さ	12.8cm 3.8cm	口縁部はやや丸い。口辺部は内傾する。体部から底部のヘラケズリにノッキングの跡跡が見られる。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、体部から底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から体部にかけてヨコナデ、底部はナデ。	60% 良 内外淡褐色 砂粒多・長石多
4	坏	口径 高さ	11.4cm 3.7cm	口縁部は突っている。口辺部がやや内傾気味。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、体部から底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	完好 良 褐色 長石多・小石微・砂粒少
5	坏	口径 高さ	10.4cm 3cm	口縁部は突っている。口辺部は直線的に立ち上がる。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、体部はナデ、底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から体部は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	55% 良 褐色 砂粒多・石英多・小石少
6	坏	口径 高さ	10.1cm 2.6cm	口縁部は尖り、口辺部は直立気味に立ち上がる。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、体部から底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、体部から底部にかけてナデ。	70% 良 内外淡褐色 砂粒少・石英少
7	坏	口径 高さ	11cm 3.3cm	口縁部は丸い。口辺部は内傾する。体部から底部のヘラケズリにノッキング、工具痕が顕著に見られる。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、体部から底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から底部上は木口状工具によるナデ、底部下はナデ。	完好 良 小石少・砂粒少・石英均一
8	坏	口径 高さ	10.8cm 3.6cm	口縁部はやや尖り気味、内側にももつ。口辺部は内傾する。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、体部はナデ、底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から体部は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	65% 良 濃褐色 砂粒多
9	坏	口径 高さ	11cm 3cm	口縁部は尖り気味。口辺部は内傾気味。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、体部から底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から底部は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	完好 良 褐色 長石多・石英少・砂粒少
10	須恵器蓋	口径 高さ	23.6cm 2.9cm	口縁部はやや丸い。回転ナデ。	ロクロ水挽き成形。	10% 良 灰褐色 小石少・砂粒少・片岩少
11	須恵器蓋	口径 高さ	11.4cm 1.9cm	口縁部内側は明線を巡らせている。	ロクロ水挽き成形。外面回転ナデ、内面回転ナデ。	30% 良 灰褐色 片岩粒少・砂粒少
12	須恵器蓋	口径 高さ	9.2cm 1.9cm	口縁部は丸い。天井部と口縁部の境目の様は鈍く、直下の内側は明瞭である。つまみが中心からずれている。	クロー水挽き成形。ロクロ成形のちのち内面から入り、船付後にロクロナデ。	70% 良 灰褐色 片岩粒多・砂粒多
13	須恵器碗	口径 高さ	11cm 2.6cm	口縁部がやや突っっている。口縁部は外側に肥厚する。	ロクロ水挽き成形。底部回転未切り成形。	30% 良 暗灰褐色 片岩粒少・砂粒やや多
14	須恵器坏	口径 高さ	11.2cm 2.1cm	器形やや歪む。	ロクロ水挽き成形。内外面回転ナデ、外面ヘラケズリ。	10% 良 明灰褐色 雲母多・砂粒少

表-5
第15号住居址出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形及び製成手法の特徴	調査手法の特徴	残存色・構成・色調・胎土	
1	埴	口径 高さ 底径	8.8cm 7.7cm 2.6cm	口縁部は丸い。丸底。外内共に口縁部から底部まで刻筋顕著。	外側は口縁部はヨコナデ、底部はナデ。体部はヘラケズリのちナデ、底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、体部は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	ほぼ完好 良 内外淡褐色 片岩少・砂粒多
2	坏	口径 高さ	13.5cm 5.2cm	口縁部はやや丸く緩やかに外反する。内側は口辺部から底部に木口状工具による稜線を有する。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、体部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から底部上は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	ほぼ完好 良 内外淡褐色 石英少・長石少

表-6
第16号住居址出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形及び製成手法の特徴	調査手法の特徴	残存色・構成・色調・胎土	
1	罎	口径 高さ 底径	17.5cm 32.5cm 7.2cm	口縁部は丸い。口縁部は大きく外反する。胴部中位に最大径をもつ。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部から胴部は木口状工具によるヨコナデ、胴部から底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部から底部は木口状工具によるヨコナデ。	85% 良 内外淡褐色 片岩少・砂粒多・白色粒多
2	罎	口径 高さ 底径	15.8cm 27.4cm 6.8cm	口縁部は丸い。口縁部は大きく外反する。胴部中位はやや下に最大径をもつ。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部から胴部は木口状工具によるヨコナデ、胴部から底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から胴部は木口状工具によるヨコナデ、胴部から底部はナデ。	ほぼ完好 良 内外淡褐色 砂粒非常に多・片岩少・小石やや多・白色粒子非常に多
3	罎	口径 高さ	15.6cm 26cm	口縁部は丸い。口縁部は大きく外反する。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部は木口状工具によるナデのちナデ。	30% 良 内外淡褐色 片岩やや多・石少・砂粒やや多

4	罎	口径 高さ 底径	— 23.5cm 7.8cm	胴部中に最大径をもつと思われる。	外側は胴部はヘラツズリ、底部はナデ。内側は胴部上部位は斜位のナデ、底部は縦位のナデ。	40% 良 外内茶褐色 小石少・砂粒やや多・石灰少
5	罎	口径 高さ 底径	15cm 23.2cm 6.8cm	口縁部は丸い、口唇部は直線的に開く。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は本口状工具によるヨコナデ、胴部から底部はヘラツズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から胴部は本口状工具によるナデ、胴部は本口状工具によるナデのちナデ。	ほぼ完全 良 外内茶褐色 片岩少・砂粒多
6	罎	口径 高さ	17.6cm 15.8cm	口縁部は丸い、口唇部は直線的に開く。胴部中に最大径をもつ。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部から胴部は本口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラツズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部は本口状工具によるヨコナデ、胴部は本口状工具によるナデのちナデ。	40% 良 淡褐色 砂粒多・小石少・雲母多・長石微
7	罎	口径 高さ	16.6cm 21.4cm	口縁部は丸い、口唇部は大きく外反している。胴部中に最大径をもつ。	外側は口縁部はヨコナデ、口唇部は本口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラツズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口唇部は本口状工具によるヨコナデ、胴部は本口状工具によるナデのちナデ。	60% 良 外内淡褐色 片岩粒やや多・石灰多・砂粒多
8	罎	口径 高さ 底径	15.2cm 17.5cm —	口縁部は丸い、口唇部はやや直線的に開く。胴部下位に最大径をもつ。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部から胴部は本口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラツズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から胴部は本口状工具によるヨコナデ、胴部は斜位のナデのちナデ。	40% 良 外淡褐色 内淡褐色 砂粒やや多・片岩粒微・小石少
9	罎	口径 高さ 底径	13.6cm 13.1cm 5.8cm	口縁部は丸い、口唇部は外反する。胴部外面に黒斑が見られる。	外側は口縁部は前位によるヨコナデ、口縁部から胴部は本口状工具によるナデ、胴部から底部はヘラツズリ。内側は口縁部は前位によるヨコナデ、口縁部は本口状工具によるナデ、胴部から底部は工具によるナデ。	70% 良 外褐色・内暗褐色 片岩少・片岩粒少 小石やや多・石灰やや多
10	罎	口径 高さ 底径	13cm 12.4cm 2cm	口縁部は丸い、口唇部はわずかに内傾している。器外面の刻線顕著。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は本口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラツズリ。底部はヘラツズリのナデ、内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から底部は本口状工具によるヨコナデ、胴部及び底部は本口状工具によるナデのちナデ。	ほぼ完全 良 外内淡褐色 雲母やや多・長石多・砂粒やや多
11	罎	口径 高さ 底径	20.8cm 27.2cm 7.2cm	口縁部は丸い、口唇部は外反する。胴部中に最大径をもつ。器形はやや歪む。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は本口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラツズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部は本口状工具によるヨコナデ、胴部は本口状工具による斜位のナデ、底部は本口状工具による縦位のナデ。	ほぼ完全 良 外淡褐色 片岩少・砂粒少・石やや多
12	罎	口径 高さ 底径	26.6cm 20cm —	口縁部は丸い、内側に肥厚し外反している。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部から胴部は本口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラツズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部は本口状工具によるヨコナデ、胴部は本口状工具による斜位のナデのちナデ。	60% 良 外淡褐色・内暗褐色 小石やや多・砂粒多・長石少・雲母中
13	小型壺	口径 高さ 底径	— 9.7cm 9.3cm	体部は扁平。丸底。	外側は体部はヘラツズリのみナデ、底部はヘラツズリ。内側は体部から底部は斜位のナデ、底部は本口状工具による丁寧なナデのちナデ。	60% 良 外淡褐色・内黒色処理 砂粒やや多・石灰少・小石やや多・長石微・片岩粒少
14	瓶	口径 高さ 底径	17cm 13.8cm 3cm	口縁部は丸い、口唇部はゆるやかに外反する。胴部下位がわずかに狹る。	外側は口縁部はヨコナデ、口唇部は本口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラツズリ。底部はヘラツズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部は本口状工具によるヨコナデ、胴部から底部はナデのちナデ、底部はヘラツズリ。	80% 良 外淡褐色・内淡褐色 片岩粒やや多・石灰少・小石多
15	高杯	口径 高さ 底径	16.2cm 10.9cm 11.2cm	口縁部は丸い、口唇部は大きく外反する。胴体部は大きく直線的に開く。胴部下端は丸い。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は本口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラツズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部は本口状工具によるナデのちナデ、胴部は本口状工具によるナデのちナデ。	90% 良 外内淡褐色 砂粒やや多・石灰少・長石少
16	高杯	口径 高さ 底径	17.4cm 10.8cm 10.6cm	口縁部は丸い、口唇部は大きく外反する。胴部中に最大径をもつ。胴部下端は直線的に開く。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は本口状工具によるヨコナデ、非底部はヘラツズリ、胴部は工具によるナデのちナデ、胴部は本口状工具によるヨコナデ、口縁部は本口状工具によるヨコナデ、内側は口縁部はヨコナデ、口縁部は本口状工具によるヨコナデ、胴部はナデ、胴部はナデ。	70% 良 外内淡褐色 砂粒多・石灰やや多・長石中・片岩粒少
17	高杯	口径 高さ 底径	16.8cm 10.4cm 10.8cm	口縁部は丸い、口唇部は大きく外反する。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は本口状工具によるナデ、胴部はヘラツズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部は本口状工具によるナデのちナデ、胴部は本口状工具によるナデのちナデ、胴部は本口状工具によるナデのちナデ。	80% 良 外内淡褐色 60% 良 砂粒やや多・雲母やや多・石灰少・小石少
18	高杯	口径 高さ 底径	12cm 8.9cm 8.8cm	口縁部は丸く、口唇部はゆるやかに外反する。底部はわずかに内湾する。胴部は大きく開き、胴部下端はわずかに肥厚する。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は本口状工具によるナデ、胴部はヘラツズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部は本口状工具によるナデのちナデ、胴部は本口状工具によるナデのちナデ、胴部は本口状工具によるナデのちナデ。	60% 良 外内淡褐色 砂粒やや多・小石少

表一七
第17号住居址出土遺物調査表

番号	器種	法量 (cm)	素材及び成形手法の特徴	調整手法の特徴	残存量・焼成・色調・胎土	
1	壺	口径 高さ 底径	13cm 21.4cm 7cm	口縁部は丸みをもつ。口唇部は斜やかに外反する。胴部に輪状痕を残す。床下。	外側は口唇部はヨコナデ、口縁部から胴部は本口状工具によるヨコナデ、胴部から底部は本口状工具によるナデ。	90% 良 外内淡褐色 石灰・砂粒・小石少
2	罎	口径 高さ	12cm 10.4cm	口縁部は丸い、口唇部は直線的に開く。胴部中に最大径をもつ。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は本口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラツズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から胴部は本口状工具によるヨコナデ、胴部は本口状工具による斜位のナデ。	40% 良 外内淡褐色 F-多・白色粒均一 石灰少・小石少
3	罎	口径 高さ 底径	10.4cm 9.2cm 4.4cm	口縁部は丸い、口唇部は直線的に外反する。胴部中に最大径をもつ。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部から胴部は本口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラツズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から胴部は本口状工具によるナデのちナデ。	60% 良 外内淡褐色 石灰少・雲母少
4	杯	口径 高さ	16.6cm 6.1cm	口縁部は尖っている。口唇部はやや内湾する。	外側は口縁部はヨコナデ、口唇部は本口状工具によるヨコナデ、底部はヘラツズリ。内側は口唇部はヨコナデ、口唇部から底部は本口状工具によるヨコナデ、口唇部は本口状工具によるナデのちナデ。	20% 良 淡褐色 砂粒少・石灰微

5	坪	口径 高さ	13.2cm 4.7cm	口縁部はやや実りわずかに内側に肥厚する。口辺部は直線的に外反する。口唇部は器内面に凹線が走る。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は本口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ、内側は口縁部はヨコナデ、口辺部は本口状工具によるヨコナデ、底部は本口状工具によるナデのものナデ。	75% 良 黄 内外淡褐色 砂粒少・小石少・片岩少
6	坪	口径 高さ	12.2cm 4.7cm	口縁部は丸い、口唇部はやや内湾する。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は本口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ、内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から底部は本口状工具によるナデ、底部はナデ。	30% 良 淡褐色 砂粒やや多・小石少
7	坪	口径 高さ	12cm 4.7cm	口縁部はやや実り気味、口唇部は外側に肥厚する。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は本口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ、内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から底部上は本口状工具によるナデ、底部下位はナデ。	法定形 良 内外淡褐色 砂粒均一・片岩少・ 葉母少・白色粒少
8	坪	口径 高さ	12.6cm 4.9cm	口縁部は丸い、口唇部はわずかに内湾する。器内面口縁部から底面にかけて放射状に暗文を施す。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は本口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ、内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から底部はヨコナデ、底部はナデ。	75% 良 内外淡褐色 片岩少・砂粒やや多・ 長石多
9	鉢	口径 高さ	12.4cm 5.2cm	口縁部は尖っている、口唇部はわずかに内湾する。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は本口状工具によるヨコナデ、底部から底部はヘラケズリ、内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から底部上半は本口状工具によるヨコナデ、底部下半から底部はナデのものナデ。	70% 良 内外淡褐色 長石多・片岩少・ 白色粒少
10	坪	口径 高さ	11.8cm 3.5cm	縁部は尖っている。外側はわずかに肥厚する。口辺部はいくらか内湾する。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は本口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ、内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から底部上半は本口状工具によるヨコナデ、底部下半はヨコナデ。	20% 良 小石少・砂粒やや多
11	須恵器外	口径 高さ 底径	11.8cm 4cm —	口縁部はやや尖っている。	外内クロク冬焼き成形。	20% 良 灰褐色 砂粒多・石灰少

表-2
第10号住居址出土遺物類群表

番号	器種	法量 (cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	残存色・地色・色調・釉土	
1	瓶	口径 高さ 底径	— 13.2cm 4.8cm	体部はゆるやかに外反している。器内面には工具痕あり、器内面に凹線あり。	外側は体部から底部はヘラケズリ、内側は体部上半は本口状工具によるヨコナデ、体部下半から底部は本口状工具による斜位のナデのものナデ。	70% 良 褐色 砂粒多・石灰やや多
2	坪	口径 高さ	13.2cm 4.2cm	口縁部はやや実り気味、口辺部は直線的に立ち上がる。器形はやや歪む。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は本口状工具によるヨコナデ、体部から底部はヘラケズリ、内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から体部は本口状工具によるナデ、底部はナデ。	80% 良 淡褐色 片岩少・砂粒やや多・ 長石少
3	坪	口径 高さ	11.6cm 3.6cm	口縁部は尖っている。口辺部は直線的に立ち上がる。口辺部は外側に肥厚する。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は本口状工具によるヨコナデ、体部はナデ、底部はヘラケズリ、内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から体部は本口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	法定形 淡褐色 砂粒やや多・片岩少・ 長石少・葉母少・Fe少
4	坪	口径 高さ	11.2cm 3.7cm	口縁部は丸い、口縁部は外側に肥厚する。器形はやや歪む。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は本口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ、内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から底部は工具によるナデ、底部はナデ。	80% 良 内外淡褐色 砂粒少・長石やや多・ 葉母均一
5	坪	口径 高さ	11.8cm 3.2cm	口縁部は丸い、口辺部はゆるやかに内湾する。	外側は口辺部はヨコナデ、体部はナデ、底部はヘラケズリ、内側は口辺部から体部はヨコナデ、底部はナデ。	70% 良 淡褐色 小石少・砂粒やや少・ 石灰少・長石少
6	坪	口径 高さ	18cm 4.6cm	口縁部は丸い、口辺部は大きく外反する。器形はやや歪む。器内外面黒色地色。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は本口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ、内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から底部上半は本口状工具によるヨコナデ、底部下半はナデ。	70% 良 淡褐色 白色粒均一・葉母少・ 長石少
7	坪	口径 高さ	17.2cm 3.8cm	口縁部は丸い、口辺部は外側に肥厚する。口辺部は大きく開く。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は本口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ、内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から底部上半は本口状工具によるヨコナデ、底部下半はナデ。	70% 良 内外淡褐色 葉母やや多・長石少・ 砂粒少・小石少
8	坪	口径 高さ	16.4cm 3.6cm	口縁部は丸をもつ、口唇部はわずかに内湾している。口辺部はゆるやかに外反している。器内外面黒色地色。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は本口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ、内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から底部は本口状工具によるナデ、底部はナデ。	50% 良 内外淡褐色 白色粒多・葉母多・ 長石少
9	坪	口径 高さ	11.2cm 3.6cm	口縁部は丸い、口辺部は内湾する。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は本口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ、内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から底部上半は本口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	50% 良 淡褐色 砂粒少・葉母多・白色粒少
10	坪	口径 高さ	11.7cm 3.2cm	器形はやや歪む。口縁部は丸い、口辺部は直立的に立ち上がる。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は本口状工具によるヨコナデ、体部はナデ、底部はヘラケズリ、内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から体部は本口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	90% 良 内外淡褐色 Fe少・砂粒多
11	坪	口径 高さ	11.6cm 3cm	口縁部はやや実り気味、口辺部は直線的に立ち上がる。底部はやや内湾状を呈する。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は本口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ、内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から体部は本口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	70% 良 内外淡褐色 葉母少・砂粒多・ 長石やや少
12	坪	口径 高さ	11.6cm 3.5cm	口縁部は丸い、口縁部は外側に肥厚する。器形はやや歪む。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は本口状工具によるヨコナデ、底部上半はナデ、底部下半はヘラケズリ、内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から底部は工具によるヨコナデ、底部下位はナデ。	60% 良 淡褐色 砂粒少・長石少

13	須磨器蓋	口径 高さ	11cm 1.7cm	大丹部扁平。口縁部内面のかえりや下端部より突出しない。	ロクロ成形のちぎ内面かえり、貼付のちろコロナデ。	27% 良 灰褐色 石英少・砂較やや多・ 片岩粒少
14	須磨器耳	口径 高さ	16.8cm 4.5cm	口縁部は尖っている。底面は回転糸切りの後高台部に貼り付いている。	外面内面ロクロナデ成形。	46% 良 淡灰褐色 白色粒多・小石少・ 砂較やや多

表-9
第19号住居址出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	形状及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	残存度・構成・色調・胎土	
1	須磨器 横瓶	口径 高さ	17.8cm 20.5cm	口縁部の立ち上がりが短く、口唇部には縁帯をもつ。口縁部と胴部の貼付は丁寧である。最大径を胴部中位にもつ。	胴部内面には当て具が残る。胴部外面には3cmあたり本の手平引きを施す。内面には割削によるナデつけを施している。	46% 良 淡灰褐色 白色粒子やや多・Fe少・ 砂較少・小石少
2	甕	口径 高さ	23.6cm 12cm	口縁部は丸い。口縁部は外反している。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部から胴部は木口杖工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から胴部は木口杖工具によるヨコナデ、胴部は木口杖工具によるナデのちぎナデ。	60% 良 内外淡褐色 砂較やや多・小石少・ 片岩粒少
3	杯	口径 高さ 底径	14.2cm 6.4cm 6.2cm	口縁部は丸い。口縁部は直立気味に立ち上がる。胴部上位に最大径をもつ。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部から胴部は木口杖工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口杖工具によるナデのちぎナデ、底部はナデ。	50% 良 内外淡褐色 小石少・砂較やや多・ 雲母少
4	杯	口径 高さ	12.3cm 3.4cm	器内面黒色処理。口縁部は尖っている。口辺部は内湾する。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部から胴部は木口杖工具によるヨコナデ、底面はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から底面上半は木口杖工具によるヨコナデ、底面はナデ。	60% 良 内外褐色 砂較少・白色粒少
5	杯	口径 高さ	10.8cm 3.2cm	底面は丸く外側に肥厚する。口辺部は内湾する。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は木口杖工具によるヨコナデ、底面はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から底面上半は木口杖工具によるヨコナデ、底面はナデ。	40% 良 内外淡褐色 砂較多・石英微・白色粒少

表-10
第20号住居址出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	形状及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	残存度・構成・色調・胎土	
1	甕	口径 高さ 底径	13.4cm 19.4cm 6.4cm	口縁部は丸い。口縁部は大きく開く。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部から胴部は木口杖工具によるヨコナデ、胴部及び底面はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から胴部は木口杖工具によるヨコナデ、胴部は木口杖工具によるナデのちぎナデ、底面はナデ。	50% 良 内外淡褐色 片岩・小石・砂較

表-11
第22号住居址出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	形状及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	残存度・構成・色調・胎土	
1	甕	口径 高さ	22.5cm 31.5cm	口縁部は丸い。口唇部はわずかに内湾する。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部から胴部は木口杖工具によるヨコナデ、胴部及び底面はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から胴部は木口杖工具によるヨコナデ、胴部は木口杖工具によるナデのちぎナデ、底面下半は木口杖工具による割削ナデ。	70% 良 内外淡褐色 砂較多・白色粒少・長石少
2	杯	口径 高さ	11cm 3.8cm	口縁部は丸い。口辺部はやや内湾する。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は木口杖工具によるヨコナデ、底面はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から底面上半は木口杖工具によるナデ、底面はナデ。	完好 良 淡褐色 雲母微・砂較少
3	杯	口径 高さ	11.6cm 3.4cm	口縁部は丸い。口辺部はゆるやかに内湾する。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は木口杖工具によるヨコナデ、底面はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から底面上半は木口杖工具によるヨコナデ、底面はナデ。	90% 良 外淡褐色・内淡茶褐色 砂較均一・長石少・雲母少
4	杯	口径 高さ	11cm 3.7cm	口縁部はやや尖り気味である。口唇部は外側に肥厚する。口辺部はやや直線的に開く。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は木口杖工具によるヨコナデ、底面下半はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から底面上位は木口杖工具によるナデ、底面はナデ。	ほぼ完好 良 淡褐色 砂較多・長石少・石英微
5	杯	口径 高さ	10.8cm 3cm	口縁部は丸くやや外側に肥厚する。	外側は口縁部はヨコナデ、口辺部は木口杖工具によるナデ、底面から底面はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口辺部から底面は木口杖工具によるヨコナデ、底面はナデ。	ほぼ完好 良 淡褐色 砂較均一・雲母多・石英少・ 長石やや多・内微

表-12
第23号住居址出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	形状及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	残存度・構成・色調・胎土	
1	小型甕	口径 高さ	19.2cm 14.8cm	口縁部は丸い。口唇部は大きく外反し、外側に肥厚する。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口杖工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。内側は口縁部は木口杖工具によるヨコナデ、胴部は木口杖工具によるナデのちぎナデ。	20% 良 内外淡褐色 雲母多・長石少・ 砂較やや多
2	須磨器蓋	口径 高さ	15.4cm 5cm	口縁部はゆるやかに外反し、口唇部外面に面をもつ。	ロクロ成形。ロクロ回転ナデ。	10% 良 灰褐色 砂較少・石英やや多・ 小石微
3	須磨器耳	口径 高さ	11.4cm 3cm	胎形が歪んでいる。口縁部は丸い。	ロクロ回転ナデ。ロクロ成形。	完好 良 灰褐色 片岩粒少・砂較多・石英多

表-13

第26号住居址出土土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	残存度・焼成・色調・胎土
1	甕	口径 13.6cm 高さ 20.2cm	口縁部は丸い。口縁部は外反。器表面に刺線が見られる。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部から胴部は木口杖工具によるヨコナデ、胴部から底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口杖工具によるヨコナデ。胴部から胴部は木口杖工具によるヨコナデ。	70% 良 外内緑褐色 小石少・砂粒少 石灰や中多
2	甕	口径 14.2cm 高さ 18cm	口縁部はやや尖り気味である。口縁部はわずかに外反する。胴部中に最大径をもつ。器内面に刺線刺す。	外側は口縁部はヨコナデ、胴部から胴部は木口杖工具によるヨコナデ。胴部から胴部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口杖工具によるヨコナデ。	80% 良 外内緑褐色 砂粒多・小石少
3	罎	口径 13.2cm 高さ 4.7cm	口縁部はやや尖っている。口唇部内面はわずかに窪む。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口杖工具によるヨコナデ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から底部中部は木口杖工具によるヨコナデ。底部下部はナデのちナデ。	80% 良 淡緑褐色 砂粒多・砂粒少
4	罎	口径 11.6cm 高さ 4.4cm	口縁部は尖っている。口唇部はわずかに内湾する。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口杖工具によるヨコナデ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から底部上位は木口杖工具によるヨコナデ。底部はナデ。	50% 良 外内緑褐色 砂粒多・石灰少
5	罎	口径 12.2cm 高さ 4.4cm	口縁部は丸い。口唇部はわずかに内湾する。器形の歪みが著しい。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口杖工具によるヨコナデ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から底部上位は木口杖工具によるヨコナデのちヨコナデ。	60% 良 淡緑褐色 小石少・砂粒微
6	罎	口径 11.6cm 高さ 4.3cm	口縁部は丸い。口唇部はわずかに内湾している。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口杖工具によるヨコナデ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から底部上位は木口杖工具によるヨコナデ。底部はナデ。	定形 良 淡緑褐色 砂粒多
7	罎	口径 11.2cm 高さ 3.7cm	口縁部はやや尖っている。口唇部は直立して立ち上がる。口唇部は直線的に開く。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口杖工具によるヨコナデ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から底部上位は木口杖工具によるヨコナデ。底部はナデ。	75% 良 淡緑褐色 砂粒少・小石少
8	罎	口径 11.8cm 高さ 3.6cm	口縁部は尖っている。口唇部はわずかに内湾する。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口杖工具によるヨコナデ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から底部上位は木口杖工具によるヨコナデ。底部はナデ。	50% 良 外内緑褐色 砂粒少・小石微・長石多

表-14

第26号住居址出土土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	残存度・焼成・色調・胎土
1	罎	口径 13cm 高さ 4.5cm	口縁部は丸い。口唇部は外側に肥厚する。口唇部はゆるやかに外反する。	口縁部はヨコナデ、口縁部は木口杖工具によるヨコナデ。体部から底部はヘラケズリ。内側は口縁部から体部は木口杖工具によるヨコナデ。底部はナデ。	60% 良 暗緑褐色 砂粒多・砂粒少
2	罎	口径 11.6cm 高さ 4.2cm	口縁部はわずかに尖り外側に肥厚する。口唇部は内湾する。器内面黒色地埋。器表面底面に刺線刺す。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口杖工具によるヨコナデ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部下部から底部上位は木口杖工具によるヨコナデ。底部は木口杖工具によるナデのちナデ。	30% 著 淡緑褐色 砂粒少

表-15

第27号住居址カマド出土土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	残存度・焼成・色調・胎土
1	釜	口径 20.8cm 高さ 22.2cm	口縁部は丸い。口縁部は中部でゆるやかに外反する。胴部中に最大径をもつ。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口杖工具によるヨコナデ。胴部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、胴部は木口杖工具による斜位のナデ。	50% 良 外内淡緑褐色 石灰少・雲母少・ 石灰ばら

表-16

第29号住居址出土土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	残存度・焼成・色調・胎土
1	甕	口径 18.2cm 高さ 30.6cm 底径 4.3cm	口縁部は丸みをもつ。口縁部は外反する。胴部下部に最大径をもつ。胴部は歪んでいる。	外側は口唇部は前面によるヨコナデ、口縁部は工具によるヨコナデ。胴部から底部はヘラケズリ。内側は口唇部は前面によるヨコナデ、口縁部は工具によるヨコナデ。胴部から底部は工具によるナデ。	65% 良 外内淡緑褐色 小石や中多・片岩少・ 小石少・雲母多
2	甕	口径 18cm 高さ 13cm 底径 -	口縁部は丸い。口縁部はいくらか外反する。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口杖工具によるヨコナデ。胴部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口杖工具によるヨコナデ。体部はナデのちナデ。	50% 良 外内淡緑褐色 砂粒多
3	鉢	口径 15.4cm 高さ 14.6cm 底径 6.6cm	口縁部はやや尖っている。口縁部はゆるやかに外反している。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口杖工具によるヨコナデ。胴部から底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口杖工具によるヨコナデ。	65% 良 外内淡緑褐色 小石や中多・片岩少・ 小石少・雲母多
4	罎	口径 14.2cm 高さ 4cm 底径 -	口縁部は丸い。口唇部は内湾しながら立ち上がる。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口杖工具によるヨコナデ。底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナデ、口縁部から底部上位は木口杖工具によるヨコナデ。底部はナデ。	定形 良 外内淡緑褐色 長石多・砂粒や中多・ 小石微・雲母少
5	罎	口径 14cm 高さ 4.2cm 底径 -	口縁部は丸い。口縁部は内湾をなしている。口唇部は直線的に外反している。口唇部中に段を有する。	外側は口縁部はヨコナデ、口縁部は木口杖工具によるヨコナデ。胴部から底部はヘラケズリ。内側は口縁部は木口杖工具によるヨコナデ。胴部から底部は木口杖工具によるナデのちナデ。底部は木口杖工具によるナデのちナデ。胴部から底部は直線的に外反する。	70% 良 外内淡緑褐色 白色粒多・砂粒多・雲母少

6	坏	口径 高さ 底径	11.8cm 3.8cm -	口縁部はやや実り気味、口唇部は外側に肥厚する。	外側は口縁部はヨコナゲ、口唇部は本口状工具によるヨコナゲ、底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ、口唇部から底部上段は本口状工具によるヨコナゲ、底面はナゲ。	60% 良 外内淡褐色 石英少・砂粒少
7	甕	口径 高さ 底径	14.2cm 10.8cm 3.6cm	口縁部中位で外反する。器外面底部の肩離断音。	口縁部はヨコナゲ、口唇部から底部は本口状工具によるヨコナゲ、胴部から底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ、口唇部は本口状工具によるヨコナゲ、底部は本口状工具によるナゲのちナゲ。	50% 良 外内淡茶褐色 砂粒均一・小石少・雲母少
8	坏	口径 高さ 底径	12.8cm 3.6cm -	口縁部は丸く外側にやや肥厚する。口唇部は直線的に外反する。	外側は口縁部はヨコナゲ、口唇部は本口状工具によるヨコナゲ、底部から底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ、口唇部から底部は本口状工具によるヨコナゲ、底面はナゲ。	48% 良 外内淡褐色 白色粒子多・Mn少・雲母やや多・砂粒少
9	坏	口径 高さ 底径	13.3cm 3.6cm -	口縁部は丸くわずかに内側に肥厚する。口唇部は外反する。	外側は口縁部はヨコナゲ、口唇部は本口状工具によるヨコナゲ、底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ、口唇部は本口状工具によるヨコナゲ、底面は本口状工具によるナゲのちナゲ。	完形 良 外内淡茶褐色 白色粒子少・長石少
10	坏	口径 高さ	11.8cm 4cm	口縁部は丸い、口唇部はやや立ち上がる。口唇部は内傾する。	外側は口縁部はヨコナゲ、口唇部は本口状工具によるヨコナゲ、底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ、口唇部から底部上段は本口状工具によるナゲ、底面下半はナゲ。	40% 良 白色粒子多・長石やや多・Fe少・砂粒少

表-17

第29号住居址出土遺物観察表

番号	器種	法 量 (cm)	形状及び形成手法の特徴	観察手法の特徴	構成・作成・色調・粘土	
1	坏	口径 高さ	15.2cm 5.5cm	口縁部は丸く、口唇部は内傾する。	外側は口縁部はヨコナゲ、口唇部は本口状工具によるヨコナゲ、底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ、口唇部から底部は本口状工具によるヨコナゲ。	60% 良 外淡褐色・内茶褐色 砂粒多・雲母多・長石少

表-18

第30号住居址出土遺物観察表

番号	器種	法 量 (cm)	形状及び形成手法の特徴	観察手法の特徴	構成・作成・色調・粘土	
1	甕	口径 高さ 底径	25.8cm 45.4cm 4.8cm	口縁部は丸い、口唇部は外反する。	外側は口縁部はヨコナゲ、口唇部から底部は本口状工具によるヨコナゲ、胴部はナゲ、胴部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ、口唇部から底部は本口状工具によるヨコナゲ、胴部から底部は本口状工具によるナゲのちナゲ。	60% 良 外淡褐色・内褐色地埋 砂粒多・石英少・雲母中
2	甕	口径 高さ 底径	23cm 34cm 2.8cm	口縁部は丸い、口唇部はわずかに内傾し立ち上がり気味である。	外側は口唇部はヨコナゲ、口唇部は本口状工具によるヨコナゲ、胴部から底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ、口唇部は本口状工具によるヨコナゲ、胴部から底部はナゲのちナゲ。	90% 良 外内淡褐色 砂粒少・石英少・雲母やや多
3	甕	口径 高さ 底径	21.6cm 24.6cm -	口縁部は丸い、口唇部は内側に肥厚し外反している。	外側は口縁部はヨコナゲ、口唇部は本口状工具によるヨコナゲ、胴部から底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ、口唇部から底部は本口状工具によるヨコナゲ、胴部は本口状工具によるナゲのちナゲ。	60% 良 外淡褐色・内褐色 小石少・砂粒やや多・石英多・長石多
4	坏	口径 高さ	11.8cm 3.9cm	口縁部は丸い、口唇部はわずかに内傾する。器形の歪みが著しい。	外側は口縁部はヨコナゲ、口唇部は本口状工具によるヨコナゲ、底部から底部はヘラケズリ。内側は口縁部はヨコナゲ、口唇部から底部は本口状工具によるヨコナゲ、底面はナゲ。	70% 良 外内淡褐色 砂粒多・雲母少・石英少
5	須恵器 平瓶	口径 高さ	8.4cm 14.7cm	口縁部は外側に外反して立ち上がる。口唇部には縋帯をもつ。口縁部と胴部の接合は丁寧である。未野産。	外内クロコナゲ。底面、胴部下平の外面に3センチあたり3本の細かい平行印を施している。	ほぼ完形 良 淡褐色 片岩粒やや多・白色粒子多・雲母まばら・Fe少

第V章 児玉丘陵における地域社会の形成

一 「金屋」地区における土地利用形態の遷移一

はじめに

児玉地域の土地利用形態の推移については、水田を中心とした耕地の問題を中心に既刊の報文中等で分析を続けてきたところである（鈴木、1998他）。しかし、丘陵部のもつ歴史的な意義については着目したところであるとはいえ、未だ十分な検討を行い得ているとは言えない状況である（鈴木、2002）。ここでは、高柳原遺跡の位置する広義の「金屋」地区丘陵部を中心とした遺跡形成と土地利用形態に関する幾つかの覚書を記し、具体的な遺跡群とこの地域の伝統的な地域社会の分析のための前提としておきたい。なお、ここで取り上げるところの「金屋地区」は、近世「金屋村」の範囲を含む近代の「金屋村」の区域であり、この区域を広義の金屋地区として捉えながら、土地に残された様々な活動の痕跡を軸に地域社会の推移を辿ろうと試みるものである。

本章の視点

この地域の様々な土地利用形態には、それぞれ一定期間の継続性を見出すことができるが、ここではこれらが途絶し利用形態が変化する時期が認められることに注目してみたい。児玉丘陵を中心とする区域においても、この地域の低地と丘陵、水田や宅地・畑地あるいは城館・墓地やその他の用益地という土地利用形態のそれぞれに、継続性と断絶あるいは利用形態の転換が認められる。このような土地利用形態の継続性や断絶あるいは転換のもつ、歴史的な徴候を遺跡相互の脈絡と広がりに着目することによって接近し得る部分があろう。

本章では、このような視点に基づき、より具体的に金屋地区丘陵部における耕地・城館・墓地等の土地利用形態の継続性あるいは不連続について概観し、併せて児玉地域の用益地相互の関係やその布置に着目して、この地区の伝統的地域社会について考えてみよう（註1）。

1. 土地利用形態と歴史的徴候

a. 「高柳」地区の沿革（概観）

ここに報告する高柳原遺跡は、上武山地を南側にひかえた山麓の丘陵上に位置しており、谷戸を臨む丘陵上に占地している。高柳から金屋地区に展開している丘陵部の開析谷は、山地に接する「高柳の池」および「篠の池」付近から発する細流によって生じた谷戸が主要なものであり、これらは北流し金屋地区の水田地帯へ流下し、この区域の地形に起伏を与えている。このような地形に沿って生態的環境が形成され、土地利用の基層を構成していると考えられるであろう。

本遺跡の所在する児玉町「高柳」地区は、その大字界の内側に分水嶺が走り、これによってこの地区は大きく金屋方面と身馴川（現小山川）方面のふたつの水系に区分することができる。このうち、今日の高柳の集落の主体は、身馴川に沿った段丘上に位置しており、社寺もまた同様な分布を示している（註2）。なお、今日「高柳の池」によって灌漑されている谷水田の区域は基本的に金屋地区に相当するものである。したがって、「高柳の池」の水系にかかる谷水田の灌漑の系統は、高柳の集落方面ではなく、この区域は古くは今日の金屋区域の生活圏に属していたものと見做すことができるであろう（註3）。

「高柳」の地名

「高柳」という地名の史料の上での出現は遅く、おそらく近世以降のことであると思われる。この「高柳」という地名については、『新編武蔵風土記稿』によると「吉橋和泉守和泉弟高柳因幡守」の居住によって「在名をもて氏とせし」としている。しかし、長泉寺に永禄十二年（1569）の武田家の制札があり、先の武田氏系の高柳某の居住によって地名となった可能性も検討しておくべきかも知れない。また、長泉寺には元亀元年（1570）と推定される北条氏の制札があるが、高柳の地名は現れていない。なお、長泉寺は、文明三年（1471）関東管領上杉顕定が開基となって創立した寺院であるとされている。

今日の高柳地区において身馴川沿った区域は、児玉・長沖に隣接し、相互に関連が強い区域と見做すことができる。この身馴川に沿った区域は、古くは「長莖」と呼ばれ、今日の大字長沖を中心とする区域および今日の大字金屋の丘陵部に相当する区域であったと推定され、中世の児玉郷に接する区域に相当するものと考えることができる。もとより、児玉党の児玉氏と塩谷氏は系譜上においても関連が強く、この長莖は塩谷氏にかかる区域であったと推定することができるであろう。

児玉党の基盤

児玉党塩谷氏はこの長莖および塩谷が、また児玉氏においては今日の生野山丘陵以南の今日の大字児玉の区域にその本貫地が相当しており、それぞれの経済基盤となった領域がこのように身馴川筋および丘陵部に相当し相互に接していることは注目しておくべき点である。ちなみに本庄氏が、「九郷用水」流末から台区域に位置する現在の本庄市栗崎から五十子にかかる区域に本貫地が相当するように、「九郷用水」によって灌漑される条里水田としての区域の外に基本的な所領が展開していることもまた注意しておくべきであろう。このような九郷用水灌漑区域に相当する条里水田の区域は、中世初期においてはおそらく公田として位置づけられていた可能性が高く、児玉党系在地領主層が、これらの条里水田の区域に全く進出していなかったと考えることも難しいとはいえ、その中核となる経済基盤が、後の時期においても丘陵部や河川氾濫原および高燥な台地部に位置していることは重要な点である。言い換えれば、児玉

党系在地領主層は、このような条里水田区域の周辺に広がる未開墾の土地を拓くことによって、これらの土地を領有し、基本的な経済基盤としていたことを示していると考えられる（註4）。

なお、塩谷氏は、その形成の起点としての館跡と推定される真鏡寺館跡のある金屋条里上流部の区域に拠点を構えており、徐々に金屋地区丘陵部の「長茎」方面にその経済基盤の中心を移しているように見えるが、この点についてはこれら丘陵部の開墾の進展の過程を想起させるとともに、この区域への安保氏の進出との関係を想起すべきであろう。

「高柳」の形成

おそらく先に見たように、開発過程や灌漑の系統から考えるならば、中世においては、高柳は「長茎」の一部を構成していたものと推定することができる。また、15世紀中葉頃に兒玉郷の一部と長茎郷の丘陵部が、新しく形成された「金屋」に編入されたと推定される。このように考えるならば、高柳地区はおそらく中世に長茎郷の一部として、その開発が進んだものと推定し得るとはいえ、「高柳」という村が形成されたのは塩谷氏の零落と新たな所領関係が形成された、戦国期から近世初頭頃のことであったと推定し得るであろう。このように「長茎郷」の一部は、先に「金屋」によって割きとられ、続いて「高柳村」を分割し、その結果が近世の「長沖村」の基本的な区域となったものと考えられるであろう。

高柳の沿革

ちなみに、高柳村は、明治22年（1889）金屋村・長沖村・飯倉村・塩谷村・宮内村の五ヶ村と合併し金屋村となり、さらに明治25年（1892）に保木野村・田端村の二村組合が合併し、今日の金屋地区の主要な枠組みが形成された。昭和30年（1955）この金屋村は、兒玉町・秋平村・本泉村と合併し兒玉町となり、次いで昭和32年（1957）共和村等と合併し現在の兒玉町となった。このようにひとつの「村」は、今日までに度重なる段階的な変化を被っているが、近世の村は基本的に、今日においても「行政区」として一定のまとまりを維持し、あるいは維持されていることにも注目しておくべきであろう。

ともあれ、「高柳」は、水系という自然的基礎をもった土地の複数が複合した範囲を持っているが、これは丘陵部や氾濫原を基盤にした中世的領有にかかる区域が、歴史的な過程によって分割されてきた結果、複数の水系を持った範囲として成立したものであろう。伝統的な自然的な村落は、基本的には水利や共同益地および祭祀等の共同性によって括られるまとまりを持っているのであろう。「高柳」は、基本的に畑地帯であり、その区域内には広い水田をもっており、金屋地区の水源の区域を取り込んでいるが、この「金屋」もまた中世後期の再分割・再編成にかかる区域であることに注意すべきである。

本章では、地誌と従来の検討からこのように概観することのできる高柳地区

を含む広義の「金屋」地区の推移について、児玉丘陵を構成する区域の土地利用形態に見る地域社会の形成過程を辿りながら再び考えてみたい。

b. 土地利用形態の継続性と断絶

具体的な地域の歴史的な推移については、どのように接近して行けば有効なのであろうか。この地域における土地利用形態、わけても水田区域の継続性については、その灌漑の用排水網の継続性とも関わって変更の困難な部分があることについて、既に旧稿（鈴木、1998他）で触れてきたところである。したがって、この地域の土地利用形態の一方の極である水田の区域は、変動の少ない利用形態の継続性をもっていると思ふことができる。また、この地域の丘陵部の土地利用形態が、弾力的なある種の緩衝帯として、歴史的な変化に果たした役割を担っている部分のあったことについての一定の見通しを述べたことがある（鈴木、2002）。あるいは、条里水田縁辺部のもつ歴史的な意義についても、児玉町吉田林区域を中心に概観したところである（鈴木、2003）。このような地域の把握については、それぞれ個別的に存在している土地や遺跡相互の関連を水利系統を軸として把握することによって、遺跡や土地相互の関係を捉え返したものである（註5）。

土地利用の履歴

ともあれ、それぞれの「遺跡」には、幾重にも様々な土地利用の履歴が刻印されていると思ふことができるであろう。このような、この地域の土地利用形態の流れの中で、丘陵部や台地部などの具体的な土地において、特定の時期にある遺跡が形成されていることの意義を、この地域の歴史的な脈絡の中で捉え返す必要があると考えてよいであろう。特定の土地に特定の時期に特定の遺跡が形成されるということ、これらが形成されなかったということと併せて捉え返すことの意義は、具体的な遺跡の形成そのものが歴史的な徴候として優れて歴史的な事象であると思ふことができるからである。遺跡形成とその継承性あるいは断絶は、地域社会の安定や変動を映す鏡である。

ともあれ、具体的な土地利用の区分は決して恣意的な分割ではなく、それぞれ自然的な基礎をもっている。しかし、人間生態系は、もとより生態的環境への適応戦略に基づく生業や生活が基底的な部分を構成するとはいえ、歴史的に形成された時代の論理を土地に投影し、土地の分節化による累積と継承によって土地利用形態が規定されている側面を無視し得ないであろう。特定の土地に累積する多様な性格を帯びた遺跡の組み合わせは、決して不定方向の累積ではなく、一定の傾向性を帯びている。このように特定の土地における時間的に連続する土地利用の連鎖的な関係が、不定方向の連鎖ではなく一定の傾向性を帯び、利用形態の相互がある種の対応性を示す範列関係にあるということの意味

を捉え直す必要がある。このような一定の土地の利用形態の連鎖関係は、おそらく生態的な環境に基づく継承性と、前代の土地利用の分類上の象徴価値の継承性の双方とが関わっているのであろう。言い換えると、土地そのものは決してランダムに用益されているのではなく、用益形態の変更においても既存の用益形態との一定の関係性を帯びていると見做し得る側面をもっている。

土地利用の継続性

このような土地利用の連鎖関係の前提のひとつには、土地のもつ生態的な属性とともに、土地そのものが社会的関係の媒介的表示性を帯びた場として機能する側面をもっていることを想起すべきであり、社会的な土地利用の継続性として捉えるべきであろう。これらの利用形態は、社会的な共通の意識を前提としているために、共通の認識を支える社会的関係の安定に荷担されて継承される側面をもっている。しかし、水路網によって相互に緊密な連絡をもつ水田においては、その灌漑系統が体系化され、共同性の沈黙の枠組みとして社会的な関係を越えて継承される側面をもっていることは忘れてはならない点であろう。また、これらの水路網の機能の維持には、それを管理する共同性を帯びた社会的主体の継承性を前提としており、単に水路網の機能の維持ばかりでなく社会的な共同性の維持・再生産を前提としているのである（註6）。また、墓址群においても社会的関係が結晶している側面を認めることができるであろう。言い換えれば、遺構のもつ存在形態から多様な社会的関係を捉え直すことができることを示している。ともあれ、人と人との関係として捉えることのできる共同性は、社会的な意識の表示媒体として何らかの具体的な物質的基盤を媒介していると予想することができる。

遺跡形成の過程

人間生態系としての自然と社会との関係に関わる遺跡の形成過程には、自然的基盤への関わりから水田や灌漑のような社会の変化を越えて長期に維持されるものがある一方、墓域のような地域社会の関係性の継続によって維持されるものがあり、また城のように共同性に基づく反復循環的な過程から離れていく政治的な性格を帯びた存在もある。これらは、社会的諸関係が、遺跡等として具体的な姿をとりながら土地に刻印されたものであり、逆に意味するものとしての土地や施設（遺跡・遺構等）によって社会的関係が再生産される。したがって、人間生態系の諸相を表出する遺跡形成とその不連続の過程に、歴史と地域社会における脈絡が現れるものであろう。このような歴史的な変化については、土地利用形態と政治・経済・思想等の統合される関係性の単位での変化に注目する必要がある。今日、文字史料以外の絵画や図像等についても歴史資料として積極的に取り上げられ、多様な歴史の諸相を捉えるのに役立てられている。しかしながら、歴史資料としての考古資料の取り扱いについてはやはりまだ充分であるとは言えない。したがって我々は、残された沈黙のシニフィアン

(表示媒体)としての考古資料を軸にその歴史的な徴候の捉え返しによって、史料に乏しい在地社会における歴史性に接近し得る経路を積極的に見出すべきであろう。

史料に乏しい地域社会の推移に接近するためには、遺跡や遺構をはじめとする考古資料の、“意味するもの”としてのあり方(表示媒体性)を軸に、地域における相互の位置や限られた史料との関係に基づいて歴史的・社会的な“意味されたもの”相互の関連にその徴候を読みとる操作に一定の有効性があろう。もとより、このことは従来より行われていた方法であるとはいえ、個別の遺跡や遺構の解釈を超えて、相互の関係によってそれぞれを読み解こうとする方法を意識化する試みである。

c. 丘陵部の開発と金屋桑里

この区域の古代集落跡には、高柳原遺跡や、枇杷橋遺跡(駒宮他、1973)、真鏡寺後遺跡(恋河内、1991)、ミカド遺跡(坂本他、1981)、ミカド西遺跡(坂本他、1981)、十二天遺跡(坂本他、1981)等が確認されている。これらの設営にはそれぞれ不明な点を残しているが、何らかの形で律令的に編制されている部分をもっているであろう。また、この区域に接する飯倉地区の山地地域の谷間には、紀年銘木簡の検出された須恵器窯をもつ山崎上ノ南遺跡(大熊、1998)をはじめ、隣接する支谷に位置する金草瓦窯跡(高橋他、1982)あるいは鉄生産に関わる幾つかの遺跡が確認されている。これらは、官衙機能にかかわると推定される遺跡群であり、律令的に編成された生産が行われていたものであろう。また、高柳原遺跡においても、平安期には鍛冶にかかわる鉄生産が行われていたことは注目しておくべきである(付章参照)。

谷水田の灌漑

ここではまず、このように個別に存在している遺跡や土地相互のつながりを、この地域で既に試みてきた水利灌漑という軸で捉え返してみよう。今次の調査対象となった「高柳池下地区」に見られるような単一の水系に基づく谷水田は、基本的な灌漑系統が自然的な開析谷地形に即して単純な縦列的な連鎖関係になっている。また、他の開析谷からの灌漑用水の取水は通常では困難であり、単一支谷内の相互依存の関係によるひとつの閉鎖系を構成している。先に見たように弥生後期～古墳前期の水田もその占地の傾向からこの谷を利用していった可能性が高いであろう。このような谷水田については、古墳時代以降においても新たな灌漑用水の導入を想定することは困難であり、独自の個別的な用水系統に属するものと考えてよいであろう。これらは、自然の開析に基づく定方向の勾配を前提としており、谷相互の共同性は稀薄であり、それぞれが相対的に独立した個別的な灌漑系統であるところが特徴である。

金屋条里の灌漑

これに対して、金屋条里遺跡は、当初は赤根川水系にかかる灌漑系統に属しており、幾条かの古代用水路が確認されている（鈴木、1996他）。このうちでも一町田遺跡（坂本他、1981）で検出された“金屋大溝”は、金屋の幾つかの谷戸の水を集めた灌漑用水路であろう。また、十二天遺跡においても台地・低地の変換点に“田端大溝”が検出されていることにも注目すべきである。これらは、個別的な灌漑ではなく、より系統的な灌漑系統を構成し、広域的な相互依存関係を想定し得るものである。このような広域的な灌漑系統の導入は、より上位の機構によって成し遂げられるものであろう。ちなみに、児玉条里においては“古九郷用水”の開鑿によって神流川より引水することによって大規模な井堰灌漑体系を形成し、古墳時代以来の個別的な灌漑方式を否定し、律令的な労働編制と観念形態を前提に施行されたものである。これらは、この地域の地形的な特徴である扇状地地形の定方向の勾配を前提に耕地と用排水系統が体系化されている。なお金屋条里の灌漑系統もまた、その流末余水を「九郷用水」に落とし反復利用される体系に組み込まれていることに注意しておくべきである。ともあれ、その後長期にわたりこの土地と用排水系統の体系として相互の機能的連関が長期に維持継続されていることが推定されることは重要な点である。この間の推移には、観念形態が切り替わりながらも人間生態系の装置としてその土地と相互の関連である機能的な体系が維持されたものと見做すことができる。

水利の共同性

これら条里水田のもつ水利の共同性は、水田の耕作者が自らが耕作しながらも、個別的な自由な運営が困難な体系内存在として、耕作者自身を既存の体系内に組み込んでゆく機能をもっている点に着目しなければならない。また、もとより用排水路は利水における共同性の前提として維持管理され更新され続けることによって機能するものであり、「堀浅い」等の共同の作業を前提としている。したがって、これらの条里水田は、耕作者自身を体系内に組織する社会的な機能を帯びており、伝統的地域社会の基層としての共同性の一端を構成していると思ふべきである。しかし、この金屋条里にかかる“金屋大溝”および“田端大溝”は、平安期にはすでに埋没していたことが確認され、今日の「赤根川」に近い水路へと変化していたことが推定される。

再開発と灌漑

なお、近年まで残された広義の金屋条里の区域の内部には、神流川から取水されている「九郷用水」の「猿楽堰」の設置によって果たされている区域が存在している。この「猿楽堰」から導水されている用水堀は、金銀川と赤根川（西鹿沼）を伏樋（伏越）によって交差し通水されており、この金銀川と赤根川の路線に後出するものであることが推定される。おそらく、この「猿楽堰」からの用水堀は、古代的な灌漑系統としての“田端大溝”等の廃絶後に用水が

欠乏していた、先の赤根川水系の流末に位置していた八幡山地区の水田の灌漑のために開墾されたものと推定することができる。ともあれ、これらの諸点については、中世初期の開墾の問題として「児玉庄」との関連を睨みながら、かつて触れたことがある（鈴木、2000他）。

灌漑系統の変質

児玉条里遺跡の分析においても夙に提示してきたように、条里水田は灌漑系統と緊密な変更困難な長期の継続性を認めることができる（鈴木、1998他）。しかし、金屋周辺の区域においては、11世紀～12世紀初頭を中心とする時期にこのような水田の用排水系統に一定の不連続を認めることができることに注意しておくべきであろう。なお、この金屋条里水田の基幹的な水路であったと推定される“金屋大溝”等の平安期における廃絶については、その水源に相当する金屋方面の丘陵部の集落の増加や耕地あるいは谷水田の再開墾の過程と表裏をなす現象であり、これに伴って、今日の「赤根川」にも流路の変化が生じたものと推定し得るであろう。おそらくは、高柳原遺跡等における丘陵部の個別の開墾も、その水源の欠乏をもたらした開発の一端を構成していると考えてよい。このような丘陵部の開墾と谷水田が、やがて児玉党「塩谷氏」の経済基盤となって行くものと推定され、「塩谷氏」の居館と推定される真鏡寺館跡のような用水の確保の形態が、個別の開墾のひとつの姿を象徴するものであろう（鈴木、1996他）。

連続と不連続

ともあれ、水田相互の関係はただ単に土地相互の問題として立ち現れるのではなく、用排水系統の緊密な相互依存性を媒介とする「共同組織」の強い拘束性を帯びていることに注意しなければならない。したがって、これらを沈黙の枠組みとしての井堰灌漑体系に関わる相互性として、伝統的地域社会の基本的な枠組みの一端を構成していることを前提に捉えるべきである。つまり、条里水田や灌漑系統のように基本的には長期の維持・継続性をもつ土地においては近代にまで及ぶ土地利用形態が認められるわけである。しかし、一方では谷戸の水田のような地形においては、再開墾にあっても同様の水系に依存することが普通であり、このような水田における灌漑を前提とした自然的地形に規定された土地利用形態に特徴が認められる。また、集落遺跡のようにこれに比して極めて短期の継続性によるもの、方形周溝墓や群集墳のように墳丘のもつ墳墓としての表示性をもちながらも、社会的な単位の継続とその盛衰をともにする遺構の存在が認められるのである。すでに集落には短期型と継続型の集落の分析があるとはいえ、遺跡、遺構にはそれぞれ歴史的な継続と断絶の期間に大きな差異があることに注目しておくべきであろう。伝統的地域社会を考える上では、その遺跡形成期およびその連続と不連続の意味を読み解く必要があるものと思われる。

2. 中世城館と地域の変化

a. 歴史的環境から見た「別所城」

「金屋」地区では平安時代末期には、真鏡寺後遺跡（恋河内、1991）で確認された「方形館」が形成される。この方形館は、児玉堂塩谷氏の館跡と推定され、「真鏡寺館跡」と命名したものであるが、外郭の堀の湧水を利用した個別の灌漑用水を確保した形態をもっている（鈴木、1991・1995）。この地区に位置する城館跡は、この真鏡寺館跡のほか、「別所城」と「篠城」の存在が知られている。この「別所城」と「篠城」は、ともに部分的な調査に留まっており、その詳細については不明な部分が多い。そもそもこれらの城館跡の名称は、同時代的に命名された名称ではなく、後にその地名より名付けられたものであってその「城跡」が機能していた時期の本来の名称は明らかではない。今回調査された下別所遺跡に隣接する「別所城」については、別所観音山遺跡として調査が実施されており、幾つかの空堀が検出されている。「別所城」は、城館跡としての伝承はすでに絶え、発掘調査によって「城跡」であることが確認されたものであることは、この城跡を考える上で重要な点である。小規模な調査であるがC地点において、14世紀代を中心とした遺物が検出されている（註7）。

別所城の空堀

この「別所城」の空堀は、その全貌は明らかではないが、丘陵部を分断し、あるいはそれらを区切ることによって複数の郭を造りだし防塞的な機能を持たせたものである。これらの空堀はすべて埋没しており、ふたつの直線的な空堀が現状の道路の路線に一致していたところから今日の地割に一致していたほか、現状における地形上の明確な曲輪配置等は明らかではないとはいえ、「腰郭」や「竪堀」等は確認し得ず、城郭としての地形の改変は戦国期の一般的な城跡と比較すると小規模なものであると言ってよいであろう（註8）。しかし、空堀の上部には浅間山系A軽石（AsA）が堆積しており、近世には埋没した空堀の痕跡が残されていたと見てよい。ともあれ、先に見たようにこの「別所城」は城跡としての明瞭な伝承もなく、発掘調査によって城館跡であることが確認されたものであることは注意しておくべき点である。

このように、この「別所城」跡は具体的な伝承もなく、どのような性格の遺構なのかは不明であるが、多くの城跡に何らかの伝承が伴っていることを考慮するならば、伝承の認められないことは、むしろこのような城館が継続的に機能していなかったこととともに、その関係する住民もまた継続的に居住していないことを示唆するものである。ともあれ、これらの土地は、利用形態の継承性は稀薄であると言ってよいであろう。「別所城」では、南東側の空堀の埋没過程で墓塚群が形成されているが、これらはむしろ城に直接には関わらない住民にかかるものである可能性も検討すべきである（後述）。しかし、城跡とそ

の領主およびその支配領域等との関わりは不明である。

塩谷氏と塩谷郷

14世紀中葉においては、「塩谷」には塩谷氏の本貫地が残されていたと推定されており、この「別所城」についてはあるいは塩谷氏との関連を推定することが可能かも知れない。しかし、建武三年(1336)に安保光泰は「枝(松)名内塩谷田在家」等を足利直義より安堵され、また戦功の恩賞として「枝松名内長莖郷」などを預け置かれている[一/九](註9)。また、暦応三年(1340)正月の安保光阿讃状[一/十一]に「児玉郡枝松名内宮内郷」「児玉郡枝松名内塩谷郷」があり、また同年十一月の讃状[一/十二]には、「児玉郡枝松名内長莖郷」が記載されていることから、この塩谷地区は、この頃すでに安保氏の所領となっていた部分があったものと推定するならば、安保氏との関わりを考慮しておくべきであろう。この「塩谷郷」の所領については、建武二年(1335)中先代の乱において、「塩谷民部大夫」が北条時行方に従って参戦していることに注目するならば、遠州橋本合戦において足利尊氏に従った阿保光泰(光阿)に、北条方に与した塩谷氏の所領が恩賞として与えられたものであると推定することができる。なお、橋本合戦には蛭河氏も北条時行方に従っているところから、この時点で「蛭河郷」も安保氏の所領となったことも検討しておくべきであろう(註10)。

塩谷氏と長莖郷

ちなみに、延文四年(1359)「しおのやの住人ひこ五郎入道行印」が、京都において熊野社の師且那契約を結んだ願文[二/一八六]があり、塩谷に「ひこ五郎入道行印」なる者が居住していたことが知られている。また、「なかくきとも申候」とあり、この「なかくき」は「枝松名」内の「長莖郷」に相当すると考えてよいであろう(註11)。今日、「長莖」は、かつて「長興」とも表記された今日の児玉町大字長沖の周辺に比定されているが、「長莖」は今日の長沖より広く、塩谷に接する区域が想定されるであろう。したがって、この「ひこ五郎入道行印」なる者が居住していた「しおのや」の地が、「別所城」の区域を含むものであったと考えることも可能である。言い換えれば、暦応三年(1340)十一月の安保光阿讃状に「児玉郡枝松名内長莖郷」が見えているところを評価するならば、「ひこ五郎入道行印」は安保氏との関連を無視し得ないとはいえ、塩谷氏に連なる者であった可能性が高いであろう。ちなみに、児玉党塩谷氏は、米良文書「塩谷系図」[四/一三]によれば代々熊野神社に参詣していることが記されており、また岐阜市塩谷氏所蔵の「塩谷系図略図」[四/一五]では「塩谷彦五郎 家信」が見え、「ひこ五郎入道行印」は「塩谷彦五郎家信」である可能性も検討しておくべきかも知れない。しかし、今日塩谷をはじめ長沖や金屋の区域においても熊野社は認められず、現存する境内社あるいは『新編武蔵風土記稿』にも熊野社の記載のない点には注意が必要であ

ろう。ただし、田端村には熊野社の記載がある点にも注意が必要であろう。田端地区は塩谷と関連が強く、田端という地名の出現は新しく、『新編武蔵風土記稿』には元和年中の開墾との伝承を記している。

塩谷氏の衰退

ともあれ、これらの区域には、兒玉党塩谷氏の館跡と推定しうる真鏡寺館跡のほかには、「別所城」と「篠城」の存在しか知られておらず、同時期・同一区域に複数の城が存在することも考え難いところから、おそらくは、これらの城館跡については塩谷氏との何らかの関連について想定することができるであろう。あるいは、この時期においては塩谷氏が衰退しながらも、在地的な土豪となり、安保氏の所領を含んでいるとはいえ実質的な管理を行う小領主的な側面を強く保持していたことを積極的に捉えておく必要があらう。なお、塩谷氏については、永徳二年（1382）武州白旗一揆に「塩谷九郎入道」〔二ノ二三〇〕が加わったことが知られており、この時期にはこの地域の小領主の一角をなし武蔵守護上杉氏に従うことによって自らの勢力の維持回復を図ったものと推定される。

その後の塩谷氏に関しては、応永27年（1420）「武蔵国兒玉郡梅原村」の「〔塩谷〕孫太郎入道跡」〔二ノ二六八〕（註12）と見え、次々と「所領」を失いその勢力を縮小していることが窺い得るところから、これらは兒玉党系の塩谷氏の零落した姿であらうと推定される。ちなみに、この「梅原村」は、今日の大字長沖に接し、かつ大字高柳にも近接する区域に大字金屋字梅原があり、この丘陵部を中心とする今日の「倉林」集落に接する周辺の区域が「梅原村」であったと推定することができるであろう。なお、この字梅原地内では農道改良にかかる発掘調査において、中世の区画溝等が検出されているが、「梅原村」との関係については不明である。しかし、この字梅原の区域は、今日の倉林集落の範囲とは異なっていることにも注意しておくべきであろう。

別所城の領主

このように、室町時代後半期において塩谷氏は、次々と「所領」を失いつつあるとはいえ、在地の土豪的な領主層であったものと推定してよいであろう。しかし、塩谷氏と「別所城」との関連については、やはり想定される城を出るものではない。ともあれ、現状においてこの両者の直接の関係は見い出すことはできないとはいえ、この地域における歴史的な脈絡から考えるならば、「別所城」が塩谷氏によって営まれたとすることが、今日最も蓋然的な推定であると思われる。

b. 地域における「篠城」の位置

「篠城」は、部分的な試掘調査が実施され空堀等の一部が検出されているに過ぎず、遺物等の検出も認められていないために、その詳細にはさらに不明な

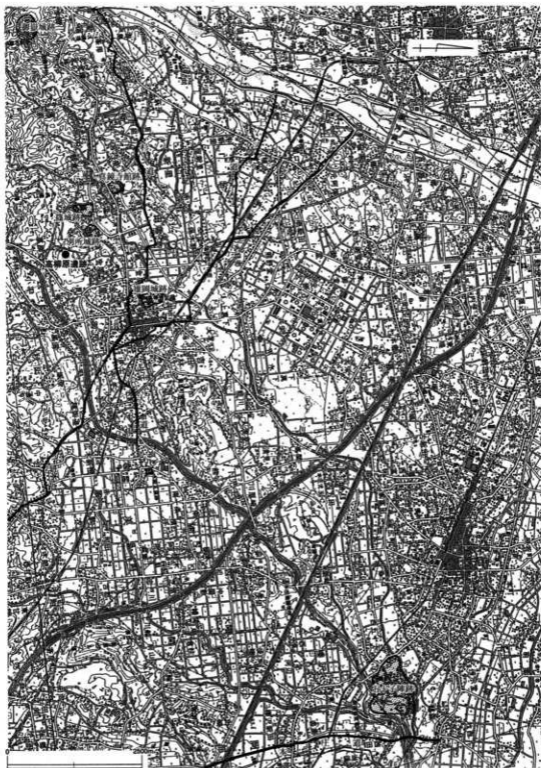
点が多い。この「篠城」については、現況においても小規模な地形上の改変と推定される箇所を見い出すことが可能であるとはいえ、戦国期の明瞭な城郭としての形態を欠いているところから、東西方向に急斜面をもつ防塞的な地形の土地を選定し、それを基礎に小規模に改変したものと考えてよい。また、この「篠城」においても城主等の具体的な伝承は失われているとはいえ、塩谷氏との関係が口碑として残されている（埼玉県教育委員会、1968・柳、1969）。ともあれ、このように調査以前に城跡としての存在が認知されていたことは、先の「別所城」との大きな違いである。

雉岡城と五十子陣

この地域では、15世紀後半、享徳の乱以降には五十子陣（本庄市）に関東管領上杉氏の当主房顕が本陣を張り古河公方勢力と対峙した。ちなみに、雉岡城（児玉町）には15世紀後半、寛正年間（1460～66）には上杉顕定が城主であったという伝承がある。また、上杉氏の家臣が築いたともされており、『新編武蔵風土記稿』にも「山内上杉氏居城に築きしに、地形狭きを以て上州平井城へ移り」云々と記されている（註13）。この時期における雉岡城の位置は、「鎌倉街道」の「上道」と「上杉道」の分岐点に相当する身馴川（小山川）上流部に位置し、同じ身馴川の下流に位置する「鎌倉街道本庄道」の要衝に設置された五十子陣との相互の関係を考えておくべきであろう〔第84図〕。おそらくは、この時期に主要な市の立つ児玉の地をひかえた雉岡城は、五十子陣の重要な兵站の確保の拠点としての地位を占めていたものと推定してよいであろう。なお、五十子・児玉の相互の水運を考える上では、身馴川の伏流水域の存在を前提に考えておく必要がある。身馴川の表流水量が増加する美里町大字沼上付近から、「鎌倉街道」を結ぶ路線は、今日「大道」と呼称されており、児玉の市の水運を支えた経路の存在を想定しえるであろう。ちなみに、「鎌倉街道」の身馴川渡河地点に推定される箇所は幾つか存在するが、いずれもこの伏流水域に位置している。ともあれ、この時期の雉岡城は、五十子陣とともに上杉氏の防衛線の重要な一角を構成していたものと推定される。ちなみに五十子陣については、不明な部分が多いとはいえ、東五十子遺跡の発掘調査によってその範囲が従来の推定より広域に及び、多様な遺構群・遺物群をもち銅製品等の生産も行われるなど、軍事拠点を取り巻く状況の一端が明らかとなっている（太田、2002）。したがって、「五十子陣」とは、その周辺の区域を含めたその総体を指すものであろう。

雉岡城と市

ともあれ、従来、雉岡城については史料や記録に乏しいところから歴史的に位置づけが充分ではなかったが、先に見たように「鎌倉街道」の中でも規模の大きな市の立っていたと推定される「上道」と「上杉道」との分岐点近くに位置しており、具体的な記録や伝承が失われているとはいえ、山内上杉氏の重要



第84図 児玉周辺の中世遺跡

な戦略上の軍事拠点であったと捉えておくべきであろう。なお、文明八年(1476)には長尾景春の反乱があり五十子陣が崩壊し、また文明十二年には景春が児玉において蜂起したことが伝えられている[二/三二四]。この蜂起にかかる「児玉」は、雉岡城であるという解釈がなされる場合が多いが、あるいは物資の結節点であった児玉の区域から蜂起したという可能性を検討しておく必要もあろう。

「朝市の里」

ちなみに、海津一朗氏は、「宴曲抄」[三/七一]に見られる「朝市の里」は、上武国境に相当する神流川・烏川の合流点中州をはじめとする「国境川筋地域」の街道沿いに位置していたとされている(海津、1996)。しかし、「宴曲抄」はすべての宿を網羅したものではないとはいえ、土地の記載には逆転がなく、街道に沿って身騨川・朝市の里・児玉・雉岡・鎭川・山名の順序の記載であるところから、「国境川筋地域」に「朝市の里」が位置していたと考えることは難しいであろう。したがって、やはりこの「朝市の里」は、身騨川を越えた児玉宿の南側に位置していたと見るべきであり、身騨川河原ないしはこれに近接する「鎌倉街道」の「上道」と「上杉道」の分岐点近くに位置し、後の雉岡城にも近い位置にあると見做すべきであるものと思われる(註14)。なお、雉岡城には、延徳三年(1491)に上杉氏の臣下「夏目(有田)豊後守定基」が藤岡城(藤岡市)より移住し、同年八幡宮の社領を安堵した[二/三三三]。

戦国期の推移

なお、金嶺御嶽城(神川町)は、15世紀後半には山内上杉氏の重要な軍事拠点として安保氏の居城であったが、天文二十年(1551)には北条氏康に攻略され落城した。このとき、雉岡城も後北条氏の支配下に入り、山内上杉氏の本拠平井城(藤岡市)もまた落城した。この時期まで、御嶽城は上杉氏のひとつの拠点であったところから、天文二十二年(1553)長尾当長が、御嶽城の堅固のために足利銀阿寺に寄進[二/三五六]したことが知られるが、時はすでに落城の後であった。ちなみに、雉岡城は16世紀後半、永祿年間に鉢形城(寄居町)の支城となり、天正七年(1579)には北条氏邦の家臣「横地左近忠春」が城代となり、この時期に城の形態が現在に近い形に造成されたものと推定される(註15)。

以上の推移を、極めて大雑把に捉えるならば、この地域では15世紀中葉以降、上杉氏と古河公方等が覇を競っていたが、おおむね15世紀代においては関東管領上杉氏、この上杉氏の没落後は北条氏康・上杉謙信・武田信玄の鼎立状態を経て、天正十年(1582)の神流川合戦以後、前田利家、上杉影勝らの豊臣軍によって落城する天正十八年(1590)まで、後北条氏の勢力下にあったものと見做し得るであろう。

ともあれ、享徳の乱以降、北武蔵の主要な城郭が次々と築城されたことが知

られており、また既に見たように15世紀後半以降には、この地域にもしばしば戦乱が及んでいたことが知られている。仮に「篠城」が、この時期頃まで存続したとするならば、このような歴史的環境の中に位置づける必要があろう。したがって、「篠城」は、雉岡城（兎玉町）・御嶽城（神川町）との中間に位置しているところから、これらの城との相互の関係について考えておく必要があると考えるべきである。なお、享徳27年（1478）「武州兎玉郡塩谷郷塩谷源四郎跡」の安堵を望む阿保氏康申状〔一ノ一九〕があるが、この史料は阿保氏康が古河公方方の勝利を前提とした約束事として発給されたものであるとされることから、この時点においても塩谷氏はおそらく上杉方の一角を構成していたものと考えて良いであろう。ともあれ、この時期以降、塩谷氏に関連する史料が認められなくなることにも注意しておくべきである。

篠城と別所城

これらの「城」は戦国的な脈絡の中で変転しながらも、地域社会の中において一定の言説を構成していることに注意しておくべきであろう。この地域の城跡の多くは、このような15世紀中葉以降の戦乱に関わる部分を想起させるものであり、この脈絡の中で位置づけるべきものである。なお、「篠城」と「別所城」は谷戸を挟んで隣接する位置にあり、共存したと捉えることは難しく、その占地や形態等から「篠城」が「別所城」に後出するものと推定されるところから、両者は相次いで形成されたものと考えておくべきである。おそらく「篠城」は、その形態等から「別所城」に次いで形成されたものと考えてよいであろう。先に見たように塩谷氏は、15世紀後半頃までこの地域での居住が推定されるところから、これらの城館跡が塩谷氏によって築かれたとする伝承を否定することもまた難しい。したがって「篠城」もまた、このような小領主としての塩谷氏の拠点と考えることも不可能ではないであろう。

篠城の位置

しかしながら「篠城」は、具体的にはその性格や地位等は不明であるとはいえ、戦国期の史料等にも現れておらず在地的にも戦国期の言説を伴っていないことから、このように戦乱の中で相次いで領主が入れ替わるような軍事上における重要な位置を占めた城であったと考えることは難しいであろう。このように考えるならば、「篠城」は、主としてこれ以前に機能した土豪的な領主層等にかかるものであった可能性が高いものと推定することが可能である。しかし、「篠城」がこの地域における軍事的な位置を占めていないとはいえ、この地域の土豪的な領主層に関わるものと推定することができるならば、先に見たように塩谷氏が上杉氏に属する位置を占めていたと推定し得るところから、おそらくは小規模であるとはいえ雉岡城と御嶽城の中間にあつて何らかの軍事的な機能を帯びていたものと思われる。

c. 城館跡にみる歴史的徴候

「別所城」や「篠城」には、その歴史的な性格を示す明瞭な伝承もなく、ただ沈黙の表徴としての“遺跡”となって我々の前に残されている。この地域では先に見たように比較的大規模な雉岡城においても、15世紀後半には五十子陣と対をなす山上杉氏の軍事上の拠点であったと推定することができるが、具体的なその性格にかかる言説は抜け落ちている。したがって、これらの城館跡を捉える上では、地域における位置を睨んでその機能と性格を捉える必要があるとよいであろう [第85図]。

中世初期方形館

この区域において中世初期の方形館としての形態をもつ真鏡寺館跡は、その区画内に水田等の耕地をもち、生活の拠点としての性格や防塞的な性格とともに勸農的性格をも合わせ持っている(鈴木、1991・1995)。このような形態は、この地域では、それぞれに変遷を認め得るものの阿保境館跡(平田他、1989)や安保氏館跡(篠崎、1995他)と対比し得るものである。このような、防塞的機能をもちながらも比較的平坦な土地に占地し、勸農的な性格を帯びているところに、その歴史的な性格が現れていると見做してよいであろう。

在地的城館

「別所城」や「篠城」のような「平山城」においては、より防塞的な性格を強めながらも、これらが丘陵部の耕地や谷水田あるいは集落に近い位置に占地しており、生活と在地支配の拠点としての性格を併せ持っていることと見做し得ることに注意すべきである。おそらくこれらの城跡は、小規模な領域支配にかかる遺構であり、軍事的には広域な戦略にかかる性格を帯びていないものであると考えることができる。このような形態は、小規模な国人層―土豪層にかかる「館城」と称されるものと対比し得るであろう。なお、白石城(中村、1979・渡辺、1983)も同様な性格をもっているが、おそらくは戦国期の造成を経過し城郭としての形態が変化しているのであろう。このように考えるならば、これらの城跡が機能していた時期においては、その支配領域がひとつの政治的な小地域を構成していたものと考えられる。また、有事における小地域の農民層の避難施設としての機能についても想起しておくべきであろう。

雉岡城の地位

なお、雉岡城も同様な占地をもっているが、時代の趨勢に沿って連綿と利用され、城主が切り替わりながら継続的に造成され、次々と軍事防塞的な機能を強化していったものと考えてよいであろう。したがって、雉岡城には小規模な地域的な領域支配を超えた独自の軍事的な機能とともに、これとは異なった固有の地位があったものと考えてよい。雉岡城は、「鎌倉街道」中でも特筆すべき市の立つ交通の要衝の近傍に位置するという戦略的な占地に関わっていると推定することが可能であり、先に見たように兵站を確保するという役割を担っていたことを想定しておくべきである。戦国期の記録にも乏しい雉岡城が、後



第85図 高柳原遺跡周辺の城館跡と墓址

北条氏的な城郭の造成工事を経ていることや、天正十八年（1590）以降においても松平清宗が入城するなど、この地域のひとつの中心的な城であったと見做してよいであろう。ちなみに、御嶽城をはじめとする「山城」では、集落や耕地とは離れ、このような生活拠点としての性格は見い出すことが難しく、要害としての軍事的な性格に特化している。これら城館跡の形態は、各時期の造成が累積し多様な形態を示すとはいえ、それぞれの形態と占地は、沈黙のうちに軍事的な性格のみならず地域社会と権力のあり方を表示しているであろう。

城館としての土地

このように、この地域の城は歴史的脈絡の中で変転し、語ることのない「歴史」の表徴を構成しているが、地域社会の互酬的な関係の外部に位置しているところから、城主が変化することによってその機能もまた推移し、機能を停止した瞬間から荒廃の一途を辿るのであろう。城跡は、機能を停止した後においても無言のうちに多様な意味をのせ、土地に刻まれた表徴としての表示性は残されながらも、他の用途地へと急速に変化して行くのである。おそらく、このことが在地社会において城跡についての言説が欠落することや、塩谷氏が信仰した熊野社が塩谷や長沖地区に祀られていないという不連続が生じたことのひとつの背景と考えることもできよう。しかし、具体的な「土地」は、長期に継続するところの歴史の累積の過程で、繰り返し物語る実際の行為の循環的反复に基づく表示の装置である。

城の占地と性格

城跡は、軍事防塞の施設としての機能に基づく政治的な性格をもっており、共同性の互酬的円環から抜け出した変化の軸としての表示性を帯びた構築物としての土地である。また、城郭の周辺にはこれを支える兵站の存在や必ずしも軍事的な色彩をもたない多様な場が存在していることも五十子周辺の遺跡群（太田、2002）の広がりから捉えていかなければならない問題である。したがって、政治的・軍事的な機能が維持されている間は、領主が変化しながらもそれを取り巻く社会的環境を含めて維持されるものである。該期には、政治の表現が軍事的な表現となって集中的に現れていると見做すことができるが、これら構築物の機能消失後は、忘れ去られることもまた、政治的構築物としての属性の表現形のひとつのあり方であろう。このような性格や意味の抜け落ちた城跡を捉える上では、時代や地域の中における位置によってその性格等を再構成する必要が生じる。ちなみに、当然のことではあるが、城跡は決して単に防塞上の地形的な選択によって占地している訳ではなく、「要害」としての地形においても長沖・高柳から身馴川に沿った上流部には、今日まで城跡は確認されておらず、「上杉道」に沿った地帯に占地していることは偶然ではないであろう。

城のもつ記念物としての側面については、これを記憶する主体者の継続性の

問題があり、「別所城」や「篠城」については、城跡の存在も名称その他の口頭伝承も失われている。このことから周辺の居住者もまた推移していたものとも考えることもできるが、これらについては別途詳細な検討が必要である。当然のことではあろうが、領主の変化とその住民の変化は対応していない。ちなみに、天文21年（1552）戦乱を避け他領に逃散・移住していた「百姓等」の選住を命じる文書〔二ノ三五七・三五八〕が北条氏より大量に発給されていると推定されることから、領主の推移と住民の対応は異なっていることは明白であり、地域社会の連続性の基盤を窺うことができる。しかし、この地域においては、この15世紀中葉頃に一定の不連続が確認し得ることは注意されるべき点であろう。

金屋地区の変化

ともあれ、室町期においては今日の金屋の主要な区域は、「塩谷郷」の一部と「長基郷」の一部に含まれていたものと推定される。この時期には塩谷氏は、次々と所領を失いつつあるとはいえ、この地域の土着的な領主層であったものと推定してよいであろう。この地域を含む15世紀の政治的な変動期に塩谷氏もまた零落し、これらの時期を挟んで「金屋」が形成されるなど、地域社会にも一定の変動と不連続が認められることに注目しておきたい。

3. 中世墓域と伝統的地域社会の形成

a. 「金屋」の形成（連続性の起点）

金屋地区の中世遺跡については、先に触れたように真鏡寺館跡について兎玉党塩谷氏の館として捉え、その性格について周辺遺跡との関係を踏まえながら検討したことがある（鈴木、1991）。この金屋地区の丘陵部は、谷戸のそれぞれが湧水による灌漑が可能な土地であり、先に見たように古くから拓かれた土地であると考えることができる。また、丘陵部と谷戸の比高差が少なく、丘陵部の畑地帯としての開墾が容易であったと考えることができる。兎玉郡における丘陵部の開発については、浅見山丘陵を例に考えたことがあり、金屋地区の丘陵部もまた生産にかかる一定の潜勢力をもった土地であると捉えることができるであろう（鈴木、2002）。

金屋の中世遺跡

これらの金屋地区の幾つかの中世遺跡の性格について、荒川正夫氏は独自の想定をされている（荒川、1998）。なかでも、ミカド遺跡（坂本他、1981）は中世寺院としての可能性が指摘されている。しかし、ミカド遺跡には建物跡の他、溝で囲まれた敷地内やや離れた位置に墓塚が検出されているとはいえ、積極的に寺院としての性格を見出すことは難しい。また、上一ノ堰遺跡（坂本他、1981）について館跡の可能性も指摘されているが、これについては屋敷地の一角に製鉄関連の遺構が検出されている。この製鉄関連の遺構については、

後述する「金屋鋤物師」との関連を検討すべきであろう。しかし、現状ではこの遺跡には具体的に防塞的な性格を見い出すことは困難であり、館跡かどうかの判断は難しいであろう。

地域における遺跡

ともあれ、遺跡自身は多様な性格を帯びているところから、遺跡の性格をある特定の属性をもとに一元的に性格づけして捉えることには問題があると考えよう。遺跡の性格は、単一の属性や徴候によって表示されるべきものではなく、ふつう地域社会の中で重層的で多角的な性格と、地域の内外にかかる機能を帯びている。遺跡は、具体的な地域的な歴史の脈絡の中に位置する沈黙の表徴であり、継続と断絶の内に地域の中での多様な貌を見せるものであろう。各時期ごとの具体的な土地にかかる反復的な行為やそれに基づく表示機能によって土地利用形態が相互に関係を持ちつつ体系的に多重に分節化され区分されている。言い換えれば、遺跡の諸属性を一般化し、属性を分析することによってその遺跡の性格を把握できると考える立場は、地域社会における具体的な役割、地域社会における歴史的な地位を消却することによって成立している側面があることを忘れてはならないであろう。遺跡の性格には、絶えず不確定な要素が介在している。遺跡の性格の推定は、ひとつの地域における残された断片的な資料群とともに、数多くの歴史的徴候の中における遺跡の地位に配視して、暫定置されたその性格について、地域社会における相互の関係の中から反復的に捉え返しながら導いて行くべきものであろう。

「金屋」の位置

金屋西遺跡のA・B地点(恋河内、2003)では、多くの墓塚群が検出され、比較的長期に墓域を構成したことが確認された。これらの区域は、近世以降においてしばしば「西金屋」という地名によって示された区域に相当しているものと推定することができる。この「西金屋」の呼称は、今日においても稀に用いられているが、「西金屋」という呼称は、地名としては残されていない。しかし、この呼称が「金屋西」という遺跡名のもととなった今日の「西」という小字名として残されていると考えてよいであろう。

中世の「金屋」の問題については、かつて触れたことがある(鈴木、2000)。そこでは、この中世の「金屋」について考える上で貞和七年(1351)の「児玉家氏申状」[一ノ四]にみる「武蔵国児玉郡池屋同宿在家半分」の「池谷」という地名に注目し、『新編武蔵風土記稿』の「池ノ谷」という記載に注意されている石井進氏(石井、1985)の指摘を前提にしながら、当時の「池屋」は、今日の「児玉」に接する区域であったことを推定した。また、現在の大字金屋地内に「池内」という小字があることに注目し、おそらく「池内」はこの「池屋」と関連する地名である可能性を指摘し、先の「西金屋」の区域は、この「池内」の西側に位置していることに注目したところである(鈴木、2000)。

この「西金屋」は、今日の大字「金屋」の東側に位置していることから考えるならば、むしろこのような「池内」を含む「金屋鑄物師」の活発な活動に関わると推定される区域を狭義の「金屋」として捉えるべき部分を認めるべきであろう。このように考えるならば、「池屋」が鉄滓の比較的濃密に分布する、今日の大字児玉に隣接する区域を、狭義の「金屋」のひとつの中心と推定することができるであろう。言い換えれば、「西金屋」は中世の狭義の「金屋」から、「桶川」と呼ばれる小河川（註16）の流れる谷戸を挟んだ西側に位置することに基づく呼称であったと見做すことができるであろう。

「金屋」の形成

もとより「金屋」という地名は、鑄物師の定住にかかる呼称であり、それを遡るものではあり得ない。今日、金屋鑄物師に関連する最も古い資料は、長享二年（1488）の懸仏【五／九】であり、「武州児玉郡金屋中林家次」の銘があり、「金屋」の地名はこれを遡ることは確実である。また、先に見たように今日の大字長沖に接する大字金屋字梅原を中心とする区域は、応永27年（1420）においては「児玉郡梅原村」であったことを考えるとき、「金屋」が形成されたのはこれ以降、おおむね15世紀中葉から後半頃であると見做すことも可能であろう。ともあれ「金屋」の地名が史料上にしばしば登場するのは16世紀後半以降のことであり、これ以前には延徳二年（1490）の懸仏に「武州児玉郡金屋村云々」という資料のみであることもまた注意しておくべき点である。しかし、この地域での鉄生産の開始や鑄物師の居住が、「金屋」の形成をそのまま意味するものではないことは再確認しておくべき点である。ここでは、この地域における鉄生産の開始を問題にしているわけではなく、鑄物師集団の定着・集住を契機とする「金屋」の形成とこれに関わる社会的単位としての「村」の形成過程に注目するものである。

「金屋」の区域

ともあれ、「金屋」は、「鎌倉街道」が「上道」の本道と御嶽城のある金銀神社方面に向かう「上杉道」に分岐する「児玉宿」の西側に接する区域を中心とする地区であったと見做してよいであろう。天正十八年（1590）には長井政実判物に「本領かなや之内児玉分」【二／五三五】という記載も見え、金屋と児玉との緊密な関係を窺うことができる。また、先に見たように「塩谷」および「長茎」が、今日より広い今日の金屋地区の西側に及ぶ区域であったと推定し得ることに注意しておくべきである。したがって、今日の金屋地区の西側の区域は、概ね「長茎郷」と「塩谷郷」の一部に相当していたものと推定しておくべきであろう。ともあれ、この時期を境に地域の名称にも不連続が認められることに注目しておくべきである。言い換えれば、「金屋村」の成立は、一方で丘陵部にその基盤をもっていた塩谷氏がその所領を失う過程であるとともに、「児玉」に隣接する区域に定着した鑄物師集団の居住とそれを支える生活にか

かる「金屋」の「長茎郷」および「塩谷郷」方面への拡大によってもたらされているのであろう。

今日の大字「金屋」は、近世の「金屋村」の区域に相当するものであるが、内部には幾つかの集落が包摂されている（註17）。中世の「児玉郷」の南西側および「塩谷郷」と「長茎郷」の中間に位置する、近世「金屋村」の成立には、これらがひとつの地域圏として再構成される戦国期の歴史的な過程が横たわっているのであろう。

b. 墓域としての「西金屋」

金屋西遺跡は、「金屋」の西側の区域に位置しており、極めて濃密の中～近世の墓域群が検出されることは注目すべき点である。金屋西遺跡で検出された墓域群の形成は、概ね15世紀以降であると推定され、その主体となる時期は15世紀後半頃から18世紀に及ぶものとされている（恋河内、2003）。これらの区域が、このように長期にわたり墓域として位置づけられていたことは、その間においてはこれらの土地が居住地や耕作地等のその他の利用形態を認められないことを示している。

墓域としての土地

これらの区域では、他の区域に比して古代以来の集落等の分布が比較的稀薄であり、集落域に近接する共同用益地として位置づけられ継続的に用益された期間が長期に存在していた可能性があろう（註18）。一見すると隣接する支丘と地形上の大きな差異を見出し難い類似した地形であるが、各時期にわたる遺構の分布が稀薄であることは生活域とは異なった何らかの利用形態を想起しなければならないであろう。

このような区域に、中世後半期において墓域が設定されていることは、土地利用形態に長期の継続性や関連性が認められる可能性のあることを示している。児玉町内においても、しばしば集落域に近接するにも関わらず遺構や居住の痕跡等が検出されない区域を見出すことができるが、これらは居住域とは異なった用益形態にかかる土地であったと見做すべきであろう。また、これらの土地が、しばしば長期にわたり居住等の痕跡が確認されないことは、その利用形態にも一定の継承性が認められることを示唆している。もとより、それぞれの土地は固有の生態的な環境性を帯びており、このような環境に基づく利用形態の選択性が働いていたことは十分に予想すべきことである。今日では気づき難い選択の要件を、それぞれの土地に残された痕跡と環境の相互比較によって明らかにして行くことも今後は必要なことであろうと思われる。しかしながら、それらの土地が居住に不適あるいは耕作に適合的であるというような、土地利用の環境による選択性のみでは、例えば周辺丘陵部と類似する部分の多い

金屋西遺跡周辺の土地利用形態を理解することは難しいであろう。したがって、このような土地利用のあり方に接近するためには、第一に土地利用形態の変化とその継承等の同一の土地における活動の累積に着目し、その利用形態相互の生態的環境の相互比較を行い、環境に基づく部分とそうでない部分を分析しながら人間生態系としての土地利用に接近して行く必要がある。

仏堂と墓域

また、当然のことであるが、この金屋「西」の区域に位置する宝蔵寺および真福寺がこれらの墓域群の存在と極めて密接な関連を有するものと考えられるべきであろう。しかし、寺院や堂宇の造営と墓域の設置の前後関係の問題については、宝蔵寺に隣接する金屋西遺跡A地点に建物跡が確認されており、この建物跡が墓域群の上に構築されていることなどを含め、今後更に慎重に検討する必要があるものと思われる。ちなみに、『新編武蔵風土記稿』には、宝蔵寺は「玉龍山と号す、本尊地藏を安ず、観音堂」とあり、今日「長谷観音寺」とも称される宝蔵寺はこの「観音堂」との関連を考えておく必要がある。金屋西遺跡A地点の建物跡を考える上では、このように古くは複数の堂宇が存在していたことを含めて検討する必要があるものと思われる。ともあれ、このような大字金屋字「西」の区域は、この狭義の旧「金屋」の土地利用にかかる土地の区分の意識と何らかの相互的な関連があるものと見做しえるであろう。

観音山遺跡

また、別所観音山遺跡においては、先にみた「別所城」の堀割の埋没途上の緩い帯状の窪みの周囲に、この埋没過程の空堀を墓道として、火葬を伴う墓域が形成されている。この火葬墓群は、長楕円の土壌に火葬の痕跡を残すものであり、その内の一基においては、小刀一振り子が副葬されていたことにも注意しておくべきであろう。火葬墓の形式は、長楕円形の土壌の長軸方向に煙道を有するものであり、周囲に縁石を配し、底面にも敷石をする極めて特徴的なものである。なお、発掘調査によって検出されたものではないが、その隣接地において板碑二基が別所観音堂建設の際に出土しており、この墓域群には板碑が伴っていることは確実である。また、その区域の一部に今日「別所観音堂」が位置していることにも注意しておくべきあり、墓域の一角に、仏堂施設が墓域設置後に創建される場合も考えておく必要がある。

倉林東遺跡

ここで金屋西遺跡に近接する位置にある倉林東遺跡でも土葬にかかる墓域群が確認されていることにも注目しておくべきである。この倉林東遺跡で検出された長楕円形態を主とする土壌墓群は、墓域相互の重複が少なく長軸を合わせ、複数の列を成す群に分かれている傾向が認められた。この列相互の間隙は、あたかも墓道のように細長く、この区域には墓域の形成が認められない。なお、このうちの一基からは、寛永通宝を含む「六道銭」が出土しているが、この墓域はこれらの墓域群の中でも比較的新しい墓域であると考えられるならば、陶磁器

をはじめとする遺物を伴わない大半の墓塚はこれに先行するものとも考えることもできる。このように考えるならば、これらの墓塚は概ね17世紀中葉より以前に形成されたものと推定することもできるが、具体的な時期の特定には困難がある。

土墳墓の推移

しかし、この地域のこれらの土墳墓は、長楕円形～長方形形態の墓塚においては、遺物を伴出するものは比較的少ないのに対し、円形の墓塚においては「六道銭」を伴出するものが認められ、この銭種には寛永通宝を伴うものと伴わないものの両者が認められる。このことを積極的に評価するならば、長楕円の墓塚と円形の墓塚が交代する時期は、近世初期頃であることが想起されるが、両者が併行する期間の幅等については明らかでない。また、円形の墓塚よりやや大きい隅丸方形の墓塚の埋土には浅間山系A軽石(As-A)が認められる傾向をもっているようである。これらを要約すると、この地域では概ね長楕円～長方形→円形→隅丸方形という墓塚形態の推移の傾向を捉え得る可能性を認めることができるが、具体的な墓塚形態は多様であり、その推移の実態については今後の検討に待たなければならないであろう(註19)。

このように考えるならば、今回報告する高柳原遺跡[第14図]の土墳の内にも墓塚であるものが存在している可能性があるが、墓所としての長期的な継続性が稀薄であると推定し得るものであり、独自の歴史的な意味を帯びていると見做すことができる。

火葬墓と土葬墓

また、金屋地区の内部には田端中原遺跡(徳山、1992)のような、板碑や宝篋印塔を伴う15世紀から17世紀に及ぶ火葬墓群が確認されていることにも注意しておく必要がある。この墓域には、火葬墓に幾つかの類型があり、また小礫の集石を伴う墓塚とこれを伴わない墓塚等がある。このように近世初頭以前の墓址には、多様な形式を認めることができる。中世の小礫による集石を伴う墓址の伝統は、近世以降の墓址上に配石する土葬墓と連続する可能性もあろう。しかし、石の大きさと集積数に著しい差異があることは否めない。また、小礫の集石墓は、基本的に火葬墓であるが、土墳内配石墓は火葬蔵骨器を埋納するものや先の観音山遺跡例のような火葬墓も認められるとはいえ、これらが基本的に遺体を囲み、あるいは棺を囲むように埋葬施設内に配石されるものであり、一般的には土葬墓の例が圧倒的であることから、系譜を異にするものと考えておくべきであろう。また、このような火葬墓や土葬墓はそれぞれに継続的な墓域を構成する傾向をもっており、相互の差異を考慮しておく必要もあろう。

墓塚の管理

倉林東遺跡をはじめ金屋西遺跡等のように、それぞれの形態の墓塚が完全に重複することなくそれぞれの軸を描いて連接するような状況は、なんらかの形で墓塚の範囲が埋葬後においても長期にわたり特定されていた状況を想起させ

るものである。言い換えると、これらの継続する墓域群は、その間においては墓域の範囲が維持・管理されていたことを想定することができるであろう。ちなみに、今日児玉町内に現存する墓地の土葬にかかる古い形式を残す墓域上の配石は、「土まんじゅう」とも呼ばれる盛土上の「敷石」ないしは埋葬区域を画する方形を基調とする配石列である所謂「縁石」と、墓標としての「立石」によって構成されており、埋葬からの時間の経過した古い配石墓は盛り土の陥没過程に伴って墓標としての中心石を取り巻くように放射状の配石形態へと整理縮小されているようである。また、児玉町や神泉村においても、このような「配石墓」においては、埋葬後に「墓なおし」が行われていることが報告されている（岡本、1995・岡本他、2003）。このような配石形態が、近世初期まで廻り得るかどうかについては明らかではないが、先に見た墓域相互の重複が稀なことを前提に考えるならば、各墓域には埋葬範囲の境界を特定し得るような何らかの表示性をもっていたと考えてよいであろう。

c. 伝統的地域社会の形成

墓地の形成過程について、この地域の民俗事例を参考に考えるならば、墓穴の掘削や墓域上の配石等には地域社会の内部における地縁的集団による相互性に基づく互酬的な関係が認められ、埋葬者親族の地縁関係に基づく共同性を帯びた慣習的な社会的関係性によって維持されている状況が認められる。この墓域形成の社会的な関係性に注目するならば、墓域群の示すものは、血縁者にかかる関係とともに、地縁的な関係性をも示すものであると考えることができる。もとより、近代の習俗にかかる民俗事例をそのまま中・近世の事例に適用すべきではなかろうが、埋葬にかかる過程には血縁的な関係のみならず地縁的な関係性にかかる多重の社会的関係が集中的に現れる側面があることは想定し得るであろう。したがって、墓址は、埋葬儀礼や墓前儀礼をとおして社会的な関係を確認し相互の関係を調整する「場」ないしは装置として機能する側面を持っており、それにかかる「場」としての表示性と観念が付帯しているのである。

金屋地区の墓域

なお、金屋西遺跡の墓域群からは、検出された墓域のうちでも二割を超える墓域の覆土から鉄滓が検出されていることにも注目しておきたい。このような墓域埋土に鉄滓が混入する具体的な過程は明らかではない。しかし、この地域の鉄滓の分布状況は、発掘調査や試掘調査および踏査等に基づく経験的な所見ではあるが、今日の大字金屋地内においては先に指摘した古い「金屋」の区域に最も濃密に分布しているほか、今日の「倉林」集落周辺あるいは倉林東遺跡の谷あたりまでは、粗密はあるものの一定量が散布している状況が認められる。また、このような鉄滓の分布は、大字児玉の南東の一部や大字長沖の北側の一

部に及ぶものであり、先に見た「桶川」と呼ばれる小河川によって開析された谷戸を中心とした区域に比較的濃密に分布していると見做すことができよう。このように、鉄滓の分布する区域は、史料上から推定し得る、「児玉」に接する区域としての狭義の「金屋」の区域に近いことは注目しておくべき点である。

また、中核的な耕作地には、排滓を投棄しないということを想起するならば、これらの分布範囲は比較的耕地としての利用の少ない土地であったことも想定し得るかも知れない。このような鉄滓の分布範囲の示すものは、おそらく何らかの形で「金屋鋳物師」の活動にかかる、土地に対する利益の及ぶ範囲の歴史的累積に関わるものと見做してよいであろう。

墓域形成の時期

ともあれ、金屋西遺跡の墓域の形成は、狭義の「金屋」の形成時期と近似している点は注目すべきである。おそらく、これらの墓域の形成過程は、地域社会としての「金屋」の形成過程と何らかの関係を持ちながら形成され、維持されていたものと見做してよいであろう。この地域では、15世紀中葉頃に境に遺跡の形成と継続に不連続が認められるといえるが、この不連続には、住民の移動をも伴う不連続をも想定すべきものである。言い換えれば、金屋西遺跡等の墓域が形成され維持され続けてきた15世紀後半期以降、これを形成した「金屋」地域の社会は、比較的継続的で安定した社会的な関係の中にあつたものと見做し得る部分があるわけである。ちなみに、児玉町の平野部に相当する共和地区においても浅見境北遺跡（恋河内、1997）や南街道遺跡（恋河内、1996）に見られるような「一般農民層の屋敷跡は、15世紀後半頃に境に廃絶されている」（恋河内、1997）ことが指摘されていることにも注目していきたい。これらのことに注目するならば、この地域では、15世紀後半を前後する時期に社会的な関係が再編成される過程を想起し得るであろう。

墓域の継続性

ともあれ、発掘調査によって検出される墓址群は、今日の墓所とは一致しておらず墓所としての継続性が途絶したものに限定されている。言い換えると、発掘によって検出される墓址群は、すでに地表面において明確な墓標も認められず墓地としての伝承も失われた土地であり、もとより現在の墓地への連続を認めることができないものである。したがって、今日において供養されることのない、無縁の墓所としてさえも認知されていない場に回帰している状況であるところから、付近にその墓所を供養する血縁の者が不在であるような状況を予想しなければならないことを示している。これに対して現在の多くの墓所は、近世後半期以来、継続的な場所にあり、今日においても供養され続けている姿は、この間にこれに関わる居住者の交代あるいは墓所の移動が比較的少ないものであつたことを示しているのであろう。しかし、近世初期には墓所に一定の不連続も認められ、一部に墓所の再編成の過程も予想すべきである。このよう

な近世初期、17世紀後半頃を境に墓所においては一定の不連続が認められることに注目するならば、この間に墓城の再編成が生じている可能性があらう。ともあれ、今日の墓所が必ずしも寺院に付属する場所ではなく、一定の血縁集団によって墓地が群集するような構成を採っていることは、このような墓所の再編にも幾つかの過程が関与している可能性も想定しておくべきであろう。言い換えるならば、墓址の今日的な継続関係は、近世初期においては未だ確立しておらず、墓所はそれ以降において再編成され移動する場合のあったことを示唆している。この間には、あるいは寺請制度等との関係、言い換えれば政治的な過程が関与しながら再編成されているのであらう。

墓所と「村落」

このような、墓址の群在、墓所の継続関係は社会的な関係と緊密な関係が予想されるところから、「村落」の継続関係とも一定の相関を有している可能性があると考えてよい。この意味で近世初期の墓所の再編成は制度上の問題に関わる部分が推定されるとともに、生活や習俗あるいは社会的意識の一部にまで及んでいたことを推定させるものである。さらに、先に見たように中世の墓所においても、その連続性や断絶には時期に偏りが予想され、その間の「村落」秩序の変化のあり方をも検討しなければならないのであらう。ともあれ、この地域の墓城の形成と継承性あるいはその断絶には、一定の規則性が認められる。既に見たように、この断絶は、この地域においては15世紀後半前後に認められるようであるが、これらは地域社会の歴史的脈絡の中で読み解く必要があるものと考えべきであらう。

言うまでもなく、地域社会の変化は等質の反復的過程ではなく、継続的な安定とともにしばしば断絶と不連続を見出すことができる。ともあれ、検出された墓城群を、一般化して捉え、墓城を類型化してその変遷を捉えるような墓城論としての分析は墓城を捉えるための基礎をなすものである。しかし、ここで冗長に述べてきたところは、これらの分析視角とは異なった、具体的な土地に累積する社会的な行為の継続とその断絶から地域の社会的な関係に接近するという問題系から墓城群の概観を試みたものである。

墓所の社会性

墓城としての継承性は、その墓を管理・供養するある種の社会的な関係性の継続を意味しており、長期にわたる墓城としての維持・継続は、安定した血縁的な継承関係が維持されているとともに、地縁的な相互的な関係に基づく地域社会の安定した関係に基づくものと見做し得るであらう。とりわけ、墓石等の腐朽しない物質的表示性を欠いた墓城は、記憶の媒体となる何らかの埋葬施設としての表示が、継続的に管理・更新されている必要がある。記憶や認識あるいは行為の反復過程には、これらが喚起される何らかの物質的媒体による表示性が必要であり、これを管理・更新する集団の存在が前提となる。したがって、

このような墓域としてのまとまりは、ひとつの社会的なまとまりに関わる土地利用形態を意味し、地域的社会的な単位性と継承性の表出による歴史的な徴候であると見做し得るものである。また、例えば水田としての継承関係が利用形態の継続とは別に、所有者や耕作者の変更を伴うのに対し、墓域の継承は、血縁的な継続性と観念的な土地に対する意識の、土地や場を表徴的媒介とする緩やかな分節化の過程を無視することは難しい。墓址は、自らの血縁的系統性の確認という行為を支える価値意識や地域社会を構成する社会的関係によって維持され、年周的循環に組み込まれた再確認行為としての祖先祭祀や供養によって継承されるのであろう。したがって、墓塚群ないしは墓所を捉える上では、これらが社会的関係の再生産の装置として機能する側面のあることを想起しておくべきである。ちなみに、寺請制度などの関わりの中で墓の供養等が管理されるならば、日常的な行為が政治的に編制され、たとえそれが意識されない行為の反復に関わるものであるにせよ、国家的な観念形態をも再生産する装置として機能している側面のあることを見逃すべきではないであろう。

金屋と雉岡城

「金屋」の形成が、この地域の山内上杉氏の治下に生じたものと捉えられることを積極的に評価するならば、享徳の乱以降の五十子陣や雉岡城等に関わる鋳物師集団の集住定着に上杉氏が関与したことを想起させるものである。ちなみに、五十子陣の周辺の多様な遺構群や遺物群あるいは手工業生産者の存在等を考えるならば、雉岡城の周辺においてもまた兵站の確保を含めて、彼らが安定した生産と流通の機構を形成し整備していたものと考えてよいであろう。「金屋」の地は、既に見たように雉岡城の存在とともに「鎌倉街道上道」の交通の要衝であった児玉宿や市の存在を前提とした占地であると考えることができる。なお、八幡神社に接した大字児玉には、連雀町という中世的な「連雀商人」との関連を窺い得るような町名があり、児玉の市の推移と関わる地名と考えられるであろう。なお、「連雀小路」という地名は鉢形城下においても認められ、相互の関連も含めて今後慎重に検討して行くべき課題であろうと思われる(註20)。

土地利用の連鎖

ともあれ、このように政治的な過程が関与して「金屋」が形成されながら、その後はその存在に規定されながら地域社会が形成されていることに注目すべきである。言い換えれば、歴史的累積の前提は、既存の条件に歴史的な条件が加わりながら、これらの条件に相似的・隣接的な関係によって次々と展開し統合されているように見える。このような一定の土地における利用形態の経時的な線条的連鎖関係に着目するならば、そのあり方を相互比較する道が拓けるであろう。もとより、日常的な発掘調査の過程は、その土地のもつ利用形態の累積を共時的に確認し得る作業であり、土地利用形態の経時的な累積関係、つま

りその土地利用の履歴を探ることができるわけである。地域の歴史を捉える上では、このようにして確認し得た各時期の遺跡を、単に異なった時期のものとしてそれぞれを個別に分離するのではなく、一定の土地における行為の累積としての履歴を、「地域」内における「歴史」内の存在という視点で捉え返す必要があるわけである。

土地のもつ表示性 このような視点で捉え返すとき、兒玉地域における土地利用形態の連鎖には、一定の傾向を見い出すことができる。もちろん土地利用形態の連鎖関係には、もとより生態的環境に基づく部分があろう。しかし、先に見たように生態的な条件に大きな差異が見出し難い土地の相互においても、例えば共同用益地から墓址としての連鎖等、その相互には一定の連鎖関係の偏りを見い出すことができる。このような利用形態の連鎖の前提には、その土地が従前どのように利用されていたのかという表示性が想起し得るであろう。また、所謂「共同体」的な認知を前提とする土地利用においては、単に社会的な関係によって捉えられるものではなく、土地や物材という具体的な形象を媒体とする社会的表示機能によって、逆に規定される部分をもっている。このような共同的機能の一定の表示性を帯びた土地や物材を媒介に、共同性が励起され再生産される側面に注意しておくべきであろう。これらは具体的な機能性の単位のみならず、象徴性の単位においてもその表示媒体としての何らかの具体的な物質的媒体が、実際の行為を通じて再確認され再生産される。言い換えると、このような土地利用形態の継起的累積性の中に、記憶装置としての機構と再生産を励起する地域的な社会のあり方が現れている部分を認め得るであろう。地域社会には、記憶装置としての物質的媒体が関与しながらその再生産を果たしていることに注目するならば、遺跡論・遺構論への新しい地平が拓けるであろう。

まとめにかえて

本章では、この地域にある遺跡等について、遺跡自身の指示する意味内容とともに、遺構が形成される脈絡に注目した。また、遺構が継的に形成される累積の過程としての遺跡の形成過程に注目することによって地域社会との関係を垣間見ることが試みた。ここで検討したように、金屋地域においては、遺跡の形成に幾つかの断絶が認められるが、15世紀後半を前後する時期に遺跡の形成に大きな不連続が認められ、この時期に地域社会のあり方に変動が予想されるところから、今日認められる“伝統的地域社会”としての「村落」の基本的な枠組みは、この時期以降に形成されたことが推定しえるであろう。

地域社会の共同性 ここでの分析は、兒玉地域わけても広義の金屋地区の丘陵部を中心に、土地利用形態の推移という側面で垣間見たものに過ぎない。しかし、地域社会にお

ける相互依存による共同性の形態が歴史的に変化しても、人文的景観として現れる人間生態系の装置のもつ構造と相互依存関係に基づく互酬の関係によって連続する社会的な関係の基層の存在にも注目する必要がある。このような基層を構成する共同性に基づく構成体は、その強靱な生命力の根源である相互性によって継続的に再生産され、変転しながらも命脈を保ち、政治的な構成体と併せて、地域社会においては重層的な権力構造の一端を構成している。前近代の地域社会の基底には、連続と維持されてきた相互依存に基づく関係性が横たわっている。言い換えれば、伝統的な地域社会においては、このような複数の社会的・政治的な体系が重層していると捉えることができるであろう。一方は、相互依存性を帯びた長期的に維持される持続の軸として、その構成員の共同性の内部に相応する自己形成の過程を伴っている。また一方は、この共同性の互酬の円環から超出した「歴史」的な変化の軸であり、外的な強制力を帯びた社会的存在としての個々人の訓育の過程が想起されるであろう。これらは相対的に自律的な変化を辿るような見え姿をとるとはいえ、実際は相互に緊密に関連し合いながら、地域社会の変化が生じている。ここでいう「伝統的地域社会」とは、この循環的で反復的な共同性の軸に即して、伝統性を帯びた「地域」を共時論的に捉え返した場合の謂いである。したがって、「伝統的地域社会」は、近代においても各地域の社会的な関係の底流に脈々と息づいていると見做すことができるが、いまその社会の求心力の根源であった共同性の弛緩とともに急速に変化しつつ巨大な不連続を形成しつつあるのであろう。

地域研究の問題点

ひとつの地域は、共同性に基礎をおく反復的な循環の性格を帯びた軸と、このような共同性に依存しつつも、これから超脱した政治的な軸という複数の重層的な権力関係を帯びている。したがって、地域研究においては政治的な権力の推移や変転という軸とともに、緩やかな変化を遂げるとはいえ長期に維持される循環的な共同性に基づく諸関係に注目すべきであろう。これらの最終的な規定性は、変動の緩やかな枠組みである水田をはじめとする自然的基盤に基づく共同性を帯びた人間生態系の側にあると見做してよいが、このような関係に不連続が生じる場合、社会的関係を前提に、これに依拠しながら政治的な権力が機能し、その変化の契機となっていると見做すことができるであろう。

しかし、このような共同性のあり方は、ただ単に古い伝統性が社会的に継承されているというよりも、相互依存や相互認知の文化的・社会的な関係が、具体的な土地や物材を媒介とする実際の行為によって再生産・再確認されるという反復的な過程を伴っている。したがって、このような日常的な行為の内側にも政治的な権力に組み込まれる経路が用意されているのであろう。しかし、戦乱には政治的な過程が集中的に表現されているのであろうが、地域社会にお

ける土地に刻まれた痕跡には、その現象が稀薄であり、これが該期における遺跡の断絶として現象する部分があるのであろう。ともあれ、先に見たように、金屋地区における「金屋」や「高柳」等の形成には、単に地域社会の伝統的な発展・推移という側面では理解できず、政治的な再編成の過程を伴っていることを忘れてはならない。しかし、このような変化にも関わらず、灌漑水田においては土地利用形態での大きな断絶を見出すことは難しく、極めて継続性が強いことにも注目しておくべきであろう。

地域史の考古学

もとより本章での試みは不十分なものではあるが、地域史への接近においては、歴史的行為の表徴としての遺跡あるいは遺構・遺物が、具体的に地域と歴史の脈絡の中に形成されているという残されてある微候によって、それぞれの考古資料を位置づける必要があろう。もちろん、このことによって考古学研究における個別の遺構論や遺物論を否定するものではない。これらは、今後も考古学研究のひとつの中心的な地位を占めるものであろう。しかし、遺跡・遺構・遺物を地域から引き離し、一般化することによって個別の遺構や遺物のそれぞれを分析的に把握するばかりでは、地域の中におけるそれぞれの地位は永遠に明らかにならないであろう。地域における遺跡や遺構等のもつ歴史的な脈絡は、具体的な遺跡のもつ社会的な意味の広がりや、様々な資料の多角的な検討に基づく多様な歴史的・社会的な微候によって繰り返し捉え返されるべきものであり、絶えず相互的な関係に基づく高次の把握へと赴くべきものである。これらは、地域社会にかかる考古学における「遺跡論」の基底に関わる問題である。具体的なそれぞれの遺跡のもつ歴史的・社会的な微候のもつ射程は深い。これは、政治的な過程の側ではなく、地域の側からの視点である。

今後の課題

本章で垣間見た、金屋地域を中心とした兒玉丘陵における土地利用の推移については、もちろん実証的水準が高いとは言えないものである。したがって、今後具体的な資料の増加とその検討によって、より精緻な考証がなされる日があるであろう。しかしながら、その場面においても幾重にも多様な関係で取り結ばれている「地域」に対する問題意識を前提としなければ、それぞれの発掘調査区域の外側に展開する「地域社会」へと接近することは難しいものと考えられる。地域社会の推移の叙述と方法との緊張は、繰り返し維持されるべき問題である。もとより我々は、地域社会における伝統性の崩壊と、今後繰り返されるであろう行政区画や呼称の変更等によって、伝統的な「地域」はますます見え難くなることも想定しておかなければならないであろう。 (鈴木徳雄)

註

- (1) かつて『金屋遺跡群』（坂本他、1981）の発掘調査（圃場整備関連事業）を行った際に、直接調査を実施した遺跡を含めて歴史的な“遺跡群”として捉え返そうと試みては見たものの、それを果たすことができなかった。その後、「地域」を描くことが「地方」の文化財担当者のひとつの任務であると意識し、試行錯誤を繰り返してきたところである。そもそも、考古学における地域研究の方法は、地域史の研究の内に溶け込んでいるだけで考古学の内部で明確に提示されていないことが徐々に見え始めてきたが、四半世紀を過ぎたいまなお、その方法が鮮明な方向となって焦点を結んでいるわけではない。しかし、ここではこれまでの経験を踏まえ、再び「金屋」地域への接近を試みるとともに、その方法の一端の開示を試みてみたい。
- (2) 段丘上に位置する今日の三島愛宕神社は、明治四十年（1907）に三島神社と愛宕神社が合祀されたものである。このうち三島神社は現在の三島愛宕神社の位置にあり「上の鎮守」、愛宕神社が高柳山の山号をもつ観音寺持ちであり「下の鎮守」とされていたようである。なお、高柳には、寛文元年（1661）に幕府代官となり、後に新田郡笠懸野に岡登用水を拓いた岡登（上）景徳の生地があり、埼玉県指定の旧跡となっている。
- (3) 今次の中山間総合整備事業は、「高柳池下地区」としてひとつの灌漑系統として捉えることのできる、単位的まとまりをもった区域が対象となった事業である。したがって、今次の土地改良事業もまた、このひとつの谷の水系を越えるものではない。ちなみに、今日の「高柳の池」および「篠の池」は、ともに大正十年（1921）築造されたものであり、「倉林池」は、昭和6年（1931）に築造されたものである。
- (4) この区域の遺跡の推移については、真鏡寺館跡の位置づけを中心にかつて触れたところである（鈴木、1991）。また、本節の内容は既刊の報文中で述べたところと重複する対象・論域をもっているところから、その詳細については省略している。したがって、併せて既刊の報文を参照されるよう望みたい。
- (5) 児玉条里遺跡についての、条里水田と灌漑系統との緊密な関係のもつ長期の継続性とその意味するところについては、旧稿（鈴木、1998）等で分析したところである。また、既刊の報文中で触れてきたところと関連する。本章では必要に応じて要約的に紹介しこれらと重複する部分があるとはいえ、それぞれ独立した論域をもっており、ここでは多くを触れ得ないので、あわせて参照されることを望みたい。
- (6) 今日の灌漑にかかる水利権は、明治二十九年（1896）の旧河川法施行以前にすでに慣習的に利用されていた水利権を既得権として認め、「慣行水利権」としての権利が与えられることによって維持されている。この慣行水利権は、現在、受益者が集団で経営する「水利組合」や「土地改良区」などによって、

用水を取水する権利が近世以降も継承されてきたものである。近年、この慣行水利権には実態が不透明な部分があるとして、国土交通省が国家的な管理を強化する方針を打ち出し、「許可水利権」への移行の計画を推し進めているようである。

- (7) 観音山遺跡C地点は、農道改良事業に伴い児玉町教育委員会が発掘調査を実施したものであり未報告。調査を担当した小宮山克己氏のご教示による。
- (8) 美里町白石城は、「別所城」と類似した部分をもっていると推定されるが、二次にわたる調査（中村、1979・渡辺、1983）が実施されており、箱堀を埋め、あるいは空堀の外側を削平したような「腰郭」へと変化した姿をもつところから「別所城」より新相を示すものであろう。言い換えると、空堀による丘陵部の区画が主体とする「別所城」は、戦国的城郭形態へと遷移していない、館跡に近いより古相を示す形態であると見做し得るであろう。なお、白石城は、主として15世紀代以降の遺物が検出されており、梅沢太久夫氏の年代観では15世紀後半代の形態であるとされている（梅沢、2003）。
- (9) 関連史料については「児玉町史」中世資料編に収載のものを用いている。以下、史料については、この「児玉町史」の〔章／史料番号〕で表記する。
- (10) 塩谷郷が安保氏の所領となった経緯については、これとは別に和田義盛の乱を契機とするという野口泰宣氏の推定がある（野口・1991）。
- (11) 今日「塩谷」は、標準的には「しおや」と呼称されるが、地元においては、しばしば「しおのや」、「しょーのや」と呼称されていることにも注目しておきたい。ここで「しおのや」と、されていることや、「塩野谷」との表記が認められるところから「塩谷」が古くから「しおのや」と訓じられていたことがわかる。なお、この塩谷には、児玉党系の塩谷氏が連綿と居住したところであるという伝承が大正期において認められたことが、岩澤正作氏によって記録されていることにも注目しておきたい（岩澤、1926）。
- (12) この「孫太郎入道跡」については、「塩谷」ではなく「桶谷」と表記されているが、これはおそらく「塩谷」の誤記とみて間違いないであろう。
- (13) 雉岡城は、古来よりの呼称であり「八幡山城」とも呼ばれる。雉岡城の築城過程について考える上では、文安二年（1445）足利義政が長尾景仲に「八幡山」等の三荘を与えた〔三／六三〕とされていることに注意すべきであり、梅沢太久夫氏も長尾氏との関係の深さを想起されている（梅沢、2003）。また、寛正元年（1460）に「夏目舍人亮実基」が古城雉岡に新城を築いたという伝承が記録されておりこの点についても注目しておくべきであろう。しかし、夏目の姓は「有田豊後守定基」が移住した後、有田から改姓したとされているところから矛盾する部分があることにも注意しておくべきである。また、延徳年間に上杉顕定は雉岡城から平井城（藤岡市）に移ったという伝承もあるが、これについても矛盾が多く不明な点が多い。ともあれ、これらはいずれも上杉氏の系列に相当していることに注目しておくべきであろう。

- 04 これらの市は、児玉党系領主層の中核となる所領が丘陵部や台地部にあったことから、その多様な生産物の交易を支えていた部分もあろう。なお、「児玉宿」等についてはかつて旧稿（鈴木、2000）で少し触れたことがある。ちなみに、市の具体的な所在についての考古学的な痕跡は、現在まで推定される区域の試掘調査等においても確認されていない。しかし、今後は井上尚明氏（井上、2004ab）によって検討されているような市の指標を検討しながら具体的な遺構等を確認して行く必要がある。
- 05 雉岡城については、出土した五輪塔等のあり方等から16世紀中葉以降の大規模な造成を推定してきたところである（鈴木、2000）。なお、梅沢太久夫氏は雉岡城の形態を「後北条氏関係の城郭」（梅沢、2003）に位置づけられておりこれと矛盾しない。なお、雉岡城をはじめとする城館跡については梅沢太久夫、平田重之両氏のご教示を得た。
- 06 この小河川は「桶どい川」とも呼ばれ、その呼称が不安定な部分もっている。ちなみに、明治27年（1894）の灌漑用水に関する調書にみる「流川用水」は、児玉町養福寿、八幡山町城西・城下の35反を灌漑するとされている〔近現447〕。おそらく、その灌漑区域から見ると、この「桶川」に関わるものであると見做すことができるであろう。
- 07 金屋地区は、今日においても三つの行政区に区分されており、それぞれの行政区の内側にも相対的な独立性を帯びた幾つかの集落が含まれている。
- 08 この区域の試掘調査によって、当該支丘には、その台地部分に接する丘陵先端部に位置する金屋北原遺跡の南側には遺構の分布が稀薄であることが確認されている。
- 09 墓域形態ごとの埋葬姿勢は、長楕円形の墓域については、その長軸長から伸展葬が困難であると考えられるところから緩い仰臥屈葬に近い座位屈葬であると推定され、円形の墓域はその容量から座位屈葬が、また隅丸方形の墓域もまた座位屈葬（座棺）の形式であると考えられることができる。つまり、それぞれが群在する墓所においては、埋葬姿勢によって地点を異にする傾向が認められ、それぞれ時期を異にするようである。なお、この地域の民俗事例（岡本他、2003他）では、地域社会の相互扶助的な関係によって製作された方形の座棺が主流であり円形の棺桶は稀であったようである。おそらく、この方形の座棺に隅丸方形の墓域が対応するものと考えてよいであろう。
- 20 今日の字「速雀町」は、雉岡山の山号をもつ玉蔵寺およびその周辺に位置している。なお、この字「速雀町」は、字「本町」に相当する八幡神社に接する区域に相当するが、八幡神社及び玉蔵寺が雉岡城の造成に伴って移転していることが推定されるところから、この点を含めて検討すべきであろう。なお、石井進氏は、中世の商業と速雀商人について詳細に検討されている（石井、2002）。ちなみに「鍛冶小路」は、鉢形城と雉岡城ともに認められるものである。

付章 高柳原遺跡B地点出土の金属生産関係遺物について

経緯

高柳原B地点の第1号鍛冶関連遺構から、金属生産関係の遺物を検出した。当該遺構から検出した遺物は以下の通りである。

- ① 鍛造薄片 (30g)
- ② 粒状の鉄滓 (20g)
- ③ 塊状の鉄滓 (1190g：錆により抱え込んでいる土を含む)
- ④ 木炭破片 (10g)
- ⑤ 須恵器坏蓋 (1個体)

所見

遺物の出土状況は、遺構の底面から10cm程度上方の覆土中に、赤錆と共に層をなしていた。調査時の所見で、遺構の底面に被熱の痕跡は認められなかったことと、鉄滓が遺構の底面から10cm程度浮いた状態で検出されたことに注目すれば、本遺構は、金属の生産活動に直接関わった場所ではなく、二次的な廃棄のための施設であると考えられた。また、遺物の形状等から、本施設内に廃棄された金属生産関連遺物について、これを生み出した過程は、鍛錬作業であったことが予想できた。

共存した須恵器蓋(第62図)は、9世紀前半の末野産であると考えられた。

周辺の金屋地区は字名のとおり、製鉄に関係する地域であり、各地に鉄滓が分布しており、製錬、精錬、鍛造、鋳造などの遺構の存在が予想されるが、年代の決定できる試料は少ない。

なお、当該遺構自体は小規模なものであり、専門的な規模に編成された作業を連想させるものではない。

理化学分析

鍛造薄片については、蛍光X線分析を行った。装置は理学製ZSXmini(波長分散型)を使用して、Pd管球、40kV、1.20mA、真空条件で、FP法により半定量を行った。ステンレス製ホルダーの底面にChemplex社製MYLAR X-RAY FILM(Cat.No150)を貼り付け、その上に試料を乗せて、X線を下面照射して、蛍光X線を測定した。なお、試料は測定前に140Wの超音波洗浄機で3分間洗浄した。

得られたチャート、ピーク同定結果、および半定量値を次頁に掲載した。

試料の鍛造薄片は、きわめて高純度の鉄を成分としていた。チタン等は検出できなかった。

考察

以上のことから、出土遺物の組み合わせから考えられた鍛錬作業の中でも、初期の作業工程のものではなく、既に一定程度鍛錬を経た二次的、あるいは二次的な鍛錬工程に関わる遺物である可能性が想定できる。また、調査区内の集落は、7世紀代のものが主体を占めており、当該遺構に想定した9世紀代前半の住居が検出できなかったことから、一時的な作業に伴う廃滓である可能性が考えられる。

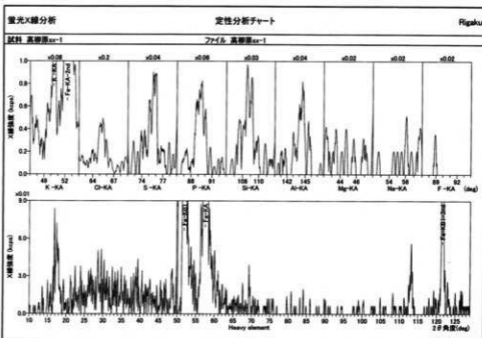
(大屋道則)

SQX分析結果

試料名: 高柳原sx-1 アプリケーション: EZS000XFV				試料モデル: パルク		分析日時: バランス成分: マッチングライブラリ: ファイル: 高柳原sx-1	
No.	成分名	分析値	単位	検出限界	分析線	X線強度	規格化前
1	K2O	0.907	mass%	0.3027	K-KA	0.0853	0.1511
2	Fe2O3	99.1	mass%	0.2770	Fe-KA	18.3250	16.5159

ピーク同定結果

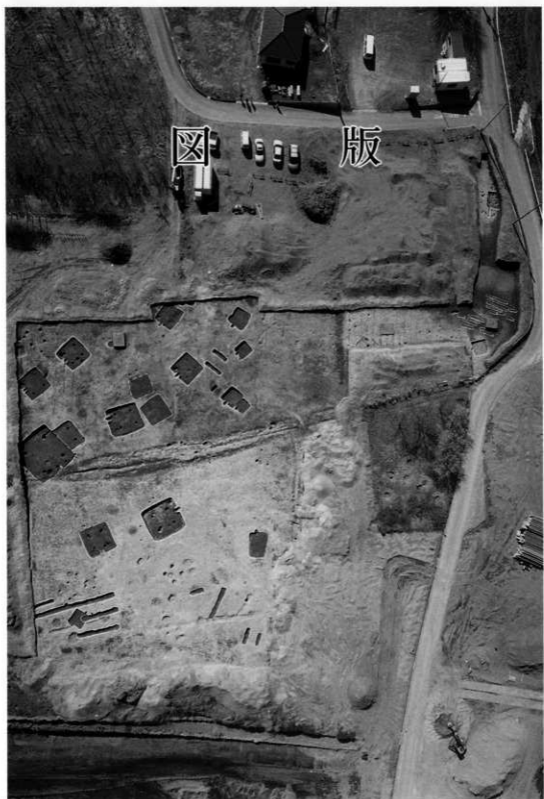
試料: 高柳原sx-1 アプリケーション: EZS000XFV				分析日時: ファイル: 高柳原sx-1			
スペクトル	No.	ピーク位置 (deg)	ピーク強度 (kcps)	BG強度 (kcps)	線種		
Heavy	1	49.941	0.238	0.029			
	2	51.753	3.223	0.032	Fe-KB1		
	3	57.499	18.325	0.058	Fe-KA		
	4	121.513	0.163	0.001	Fe-KB1-2nd		
K-KA	1	50.395	0.085	0.029	K-KA		
	2	52.345	0.187	0.032	Fe-KA-2nd		



引用・参考文献

- 荒川 正夫 (1998)『大久保山Ⅵ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告 6
- 石井 進 (1985)「武蔵国古尾谷荘と児玉郡池屋のことなど」『埼玉県史だより』資料編 7
- 石井 進 (2002)『日本の中世1・中世のかたち』中央公論新社
- 井上 尚明 (2004)「古代の市を探る」『原始・古代日本の集落』同成社
- 井上 尚明 (2004)「日本古代の市について」『白門考古論叢』稲生典太郎先生追悼考古学論集
- 岩澤 正作 (1926)「児玉郡々志資料視察雑記(一)」『上毛及上毛人』丙寅 2月号
- 梅沢 太久夫 (2003)『城郭資料集成 中世北武蔵の城』岩田書院
- 大熊 季広 (1998)「児玉町山崎上ノ南遺跡の調査」『第31回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか
- 大熊 季広 (1998)「児玉町山崎上ノ南遺跡」『木簡研究』第20号
- 太田 博之 (2002)『東五十子・川原町』東五十子遺跡調査会
- 岡本 一雄 (1995)「人の一生」『児玉町史民俗編』児玉町教育委員会他
- 岡本 一雄 他 (2003)「人の一生」『神泉村誌民俗編』神泉村教育委員会他
- 小沢 国平 (1969)「児玉町金屋池脇遺跡」『埼玉考古』第7号
- 海津 一朗 (1996)「南北朝・室町期の賀美郡武士団・内乱と地域社会」『上里町史通史編上』上里町教育委員会
- 恋河内昭彦 (1991)『真鏡寺後遺跡Ⅲ』児玉町文化財調査報告書第14集
- 恋河内昭彦 (1996)『辻堂Ⅱ・南街道・宮田遺跡』児玉町文化財調査報告書第20集
- 恋河内昭彦 (1997)『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』児玉町文化財調査報告書第23集
- 恋河内昭彦 (1998)『向田A・向田B・恋丁田遺跡』児玉町文化財調査報告書第27集
- 恋河内昭彦 (2003)『金屋西遺跡—A・B地点の調査—』児玉町遺跡調査会報告書第13集
- 小久保徹他 (1977)『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集
- 小松 和彦 編 (2002)『記憶する民俗社会』人文書院
- 駒宮 史朗 他 (1973)『枇杷橋遺跡』埼玉県遺跡調査会発掘調査報告書第20集
- 坂本 和俊 他 (1981)『金屋遺跡群』児玉町文化財調査報告書第2集
- 篠崎 潔 (1995)『安保氏館跡』神川町遺跡調査会
- 菅谷 浩之 他 (1980)『長沖古墳群』児玉町文化財調査報告書第1集
- 鈴木 徳雄 (1985)「古代児玉郡における山野の問題」『橋ノ入遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第5集

- 鈴木徳雄 (1991) 「塩谷氏館跡と児玉党の形成」『真鏡寺後遺跡Ⅲ』児玉町文化財調査報告書第14集
- 鈴木徳雄 (1995) 「古代児玉郡の土地利用と方形館の成立」『堀向・藤塚・柿島・内手・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第18集
- 鈴木徳雄 (1996) 「金屋条里周辺の灌漑と開発」『東鹿沼・藤塚B1・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第21集
- 鈴木徳雄 (1998) 「児玉条里の形成と継続」『児玉条里遺跡—児玉北部地区—』児玉町文化財調査報告書第28集
- 鈴木徳雄 (2000) 「児玉条里と地域的景観の形成」『児玉条里遺跡—九郷地区—』児玉町文化財調査報告書第34集
- 鈴木徳雄 (2000) 「児玉条里と地域社会の変化」『児玉条里遺跡—八幡山北田地区—』児玉町遺跡調査会報告書第9集
- 鈴木徳雄 (2002) 「児玉郡における丘陵部の開発とその地位」『塚本山古墳群第3次調査—雷電山地区—』児玉町遺跡調査会報告書第12集
- 鈴木徳雄 (2003) 「児玉条里縁辺部における土地利用の変化」『児玉条里遺跡—古田林堂ノ西地区—』児玉町遺跡調査会報告書第15集
- 田島三郎 (2003) 『児玉党出自考』児玉地域史研究会
- 徳山寿樹 (1992) 「児玉町田端中原遺跡の調査」『第25回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか
- 利根川章彦 (1981) 『倉林後遺跡』埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団報告書第3集
- 長滝歳康 (1991) 『白石古墳群・羽黒山古墳群』美里町遺跡発掘調査報告書第7集
- 中村倉司 (1979) 『白石城』埼玉県遺跡調査会報告書第36集
- 野口泰宣 (1991) 「児玉党塩谷氏と塩谷郷」『真鏡寺後遺跡Ⅲ』児玉町文化財調査報告書第14集
- 平田重之 他 (1989) 『臼樹原・松下遺跡Ⅰ』臼樹原松下遺跡調査会
- 峰岸純夫 (1978) 「武蔵国児玉郡枝松名について」『埼玉民衆史研究』第4号
- 柳進 (1969) 『埼玉県北部の城』私家版
- 柳進 (1980) 『雉岡城の研究』私家版
- 渡辺一 (1983) 『白石城Ⅱ』美里村遺跡発掘調査報告書第2集
- 児玉町史編さん委員会 (1992) 『児玉町史』中世資料編
- 児玉町史編さん委員会 (2002) 『児玉町史』近現代資料編
- 埼玉県教育委員会 (1968) 『埼玉の城館跡』埼玉県教育委員会
- 埼玉県神社調査団 (1998) 『埼玉の神社 北足立 児玉 南埼玉』埼玉県神社庁
- 埼玉県立歴史資料館 (1988) 『埼玉の中世城館跡』埼玉県教育委員会



図

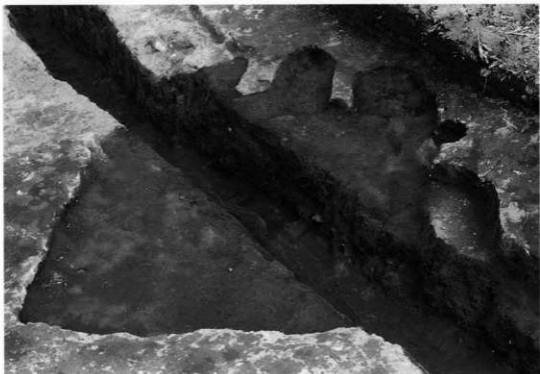
版



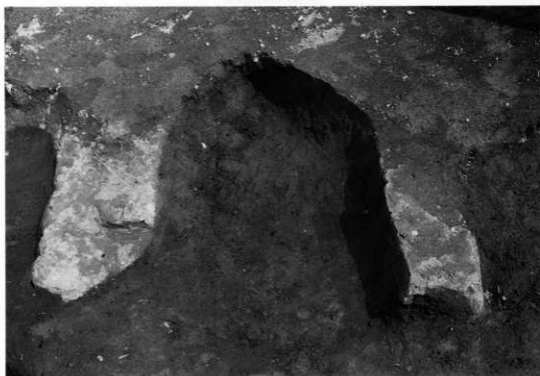
1. B・C地点 調査前遠景(西より)



2. B地点 表土除去



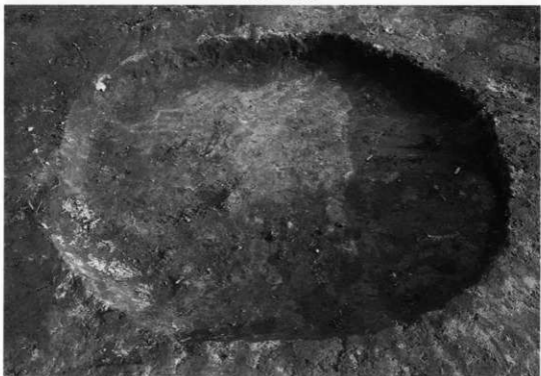
1. 第9号住居址



2. 第9号住居址カマド



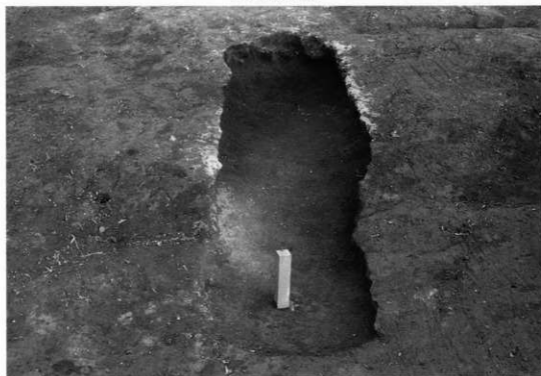
1. 第7号土坑



2. 第14号土坑



1. 第15号土壤



2. 第16号土壤



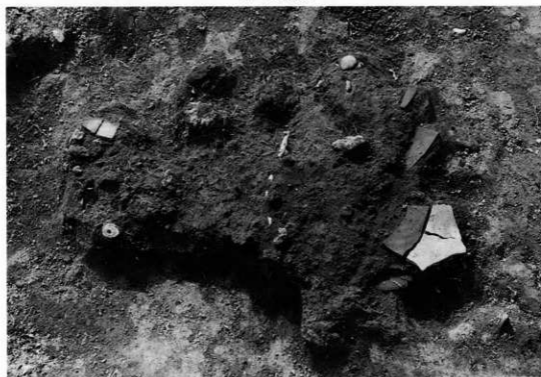
1. 第6号沟



2. 第5号沟



1. 調査風景



2. 第1号鍛冶関連遺構



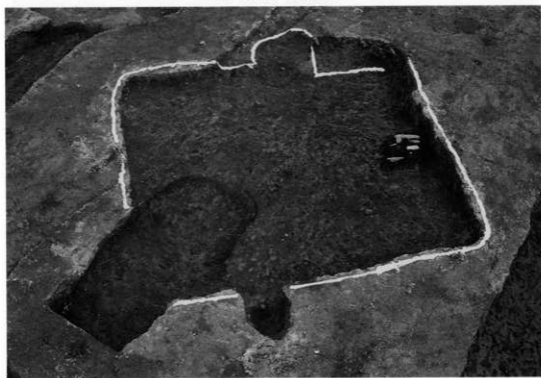
1. 調査区全景 (西より)



2. 調査風景



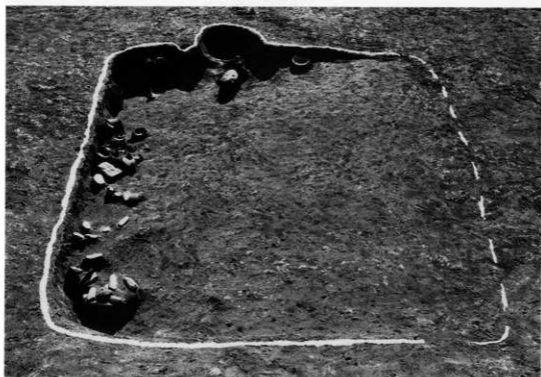
1. C地点 表土除去



2. 第10号住居址



1. 第10号住居址カマド



2. 第11号住居址



1. 第11号住居址カマド



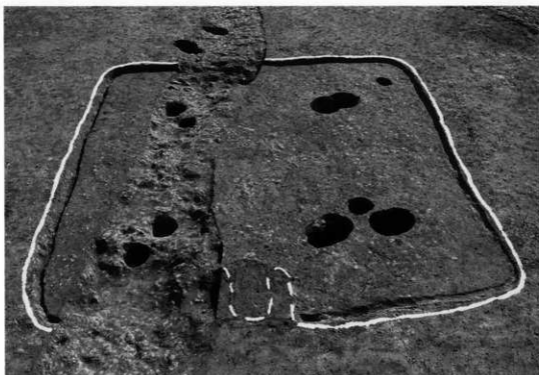
2. 第11号住居址遺物出土状態



1. 第12号住居址



2. 第12号住居址カマド



1. 第13号住居址



2. 第13号住居址カマド



1. 第14号住居址



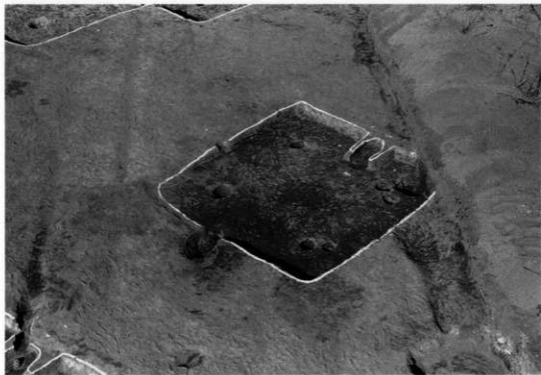
2. 第14号住居址カマド



1. 第15号住居址



2. 調査風景



1. 第16号住居址



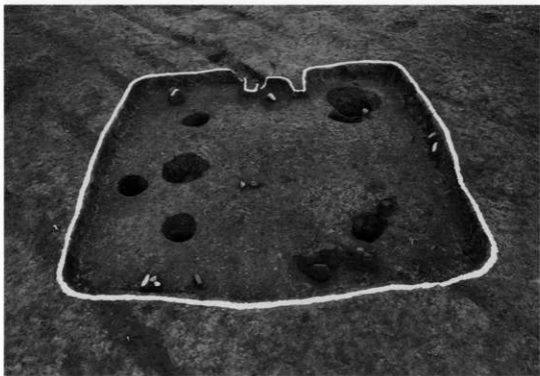
2. 第16号住居址カマド



1. 第16号住居址遗物出土状态



2. 第16号住居址遗物出土状态



1. 第17号住居址



2. 第17号住居址カマド



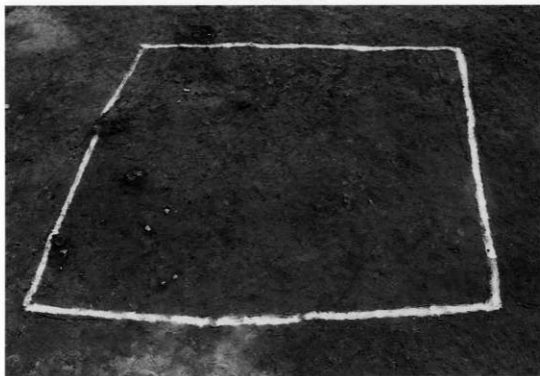
1. 第18号住居址



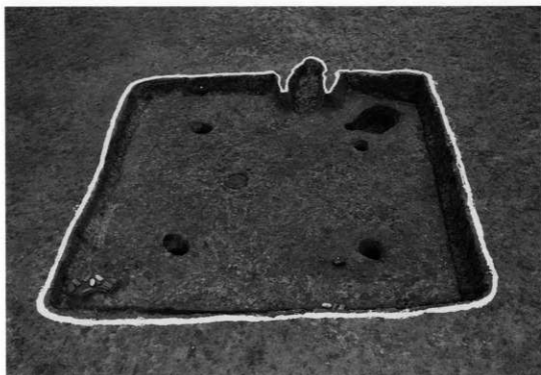
2. 第18号住居址カマド



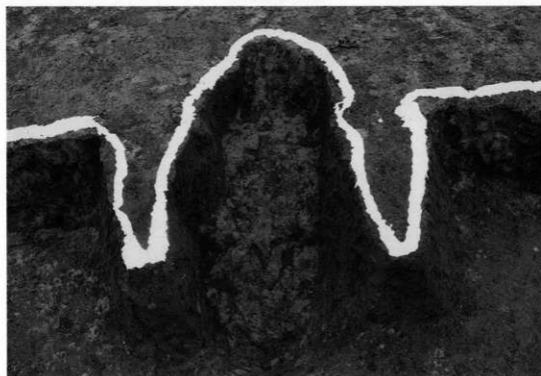
1. 第19号住居址



2. 第20号住居址



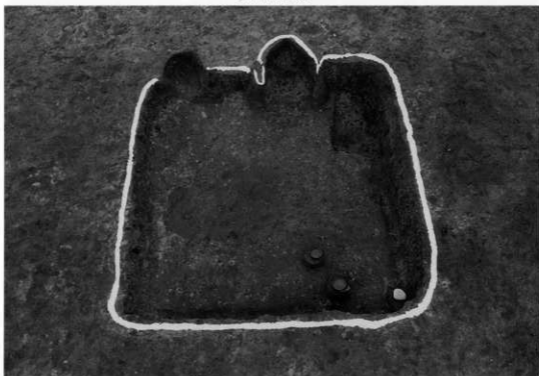
1. 第21号住居址



2. 第21号住居址カマド



1. 調査風景



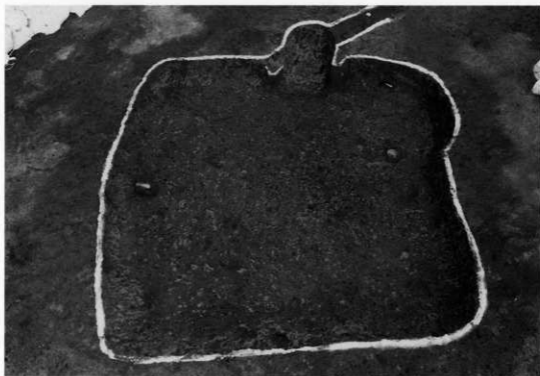
2. 第22号住居址



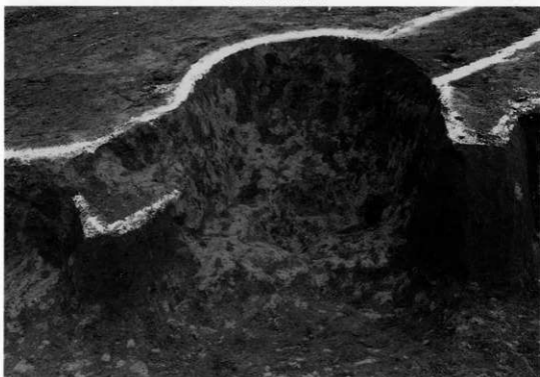
1. 第22号住居址カマド



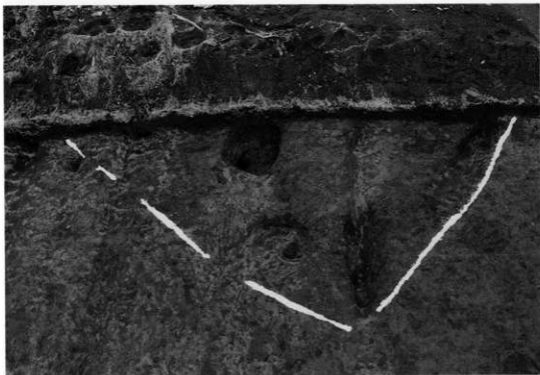
2. 第22号住居址遺物出土状態



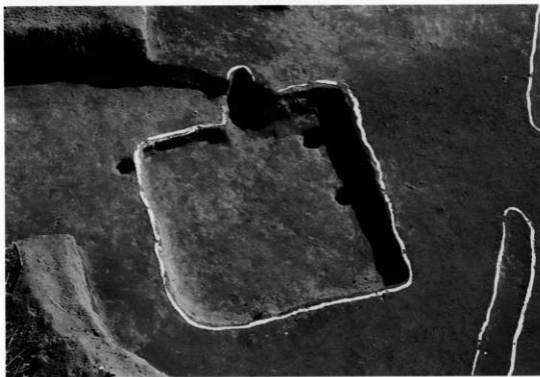
1. 第23号住居址



2. 第23号住居址カマド



1. 第24号住居址



2. 第25号住居址



1. 第25号住居址カマド



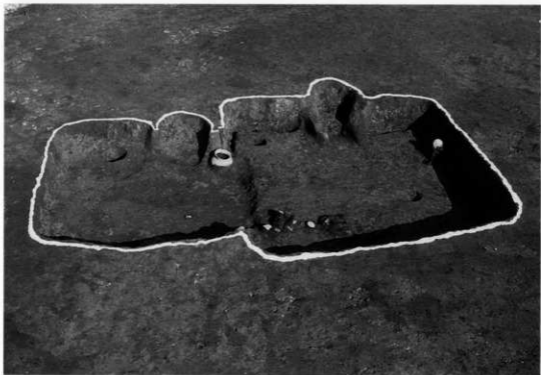
2. 第25号住居址遺物出土状態



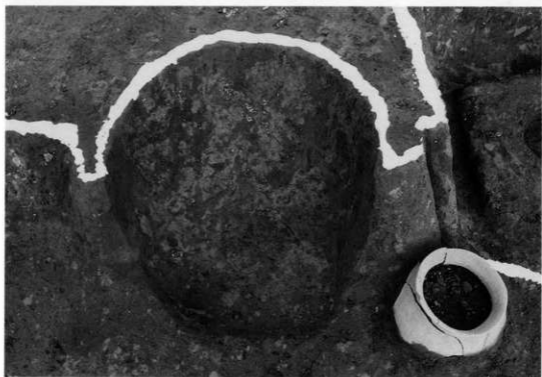
1. 第26号住居址



2. 第26号住居址カマド



1. 第27・30号住居址



2. 第27号住居址カマド



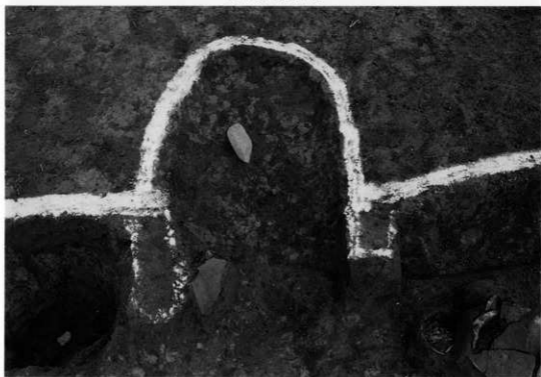
1. 第30号住居址カマド



2. 第30号住居址遺物出土状態



1. 第28号住居址



2. 第28号住居址カマド



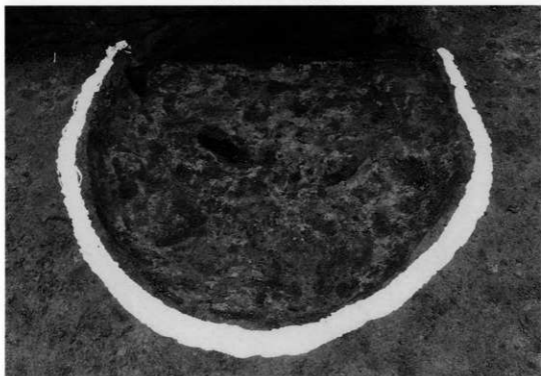
1. 第28号住居址遺物出土狀態



2. 第29号住居址



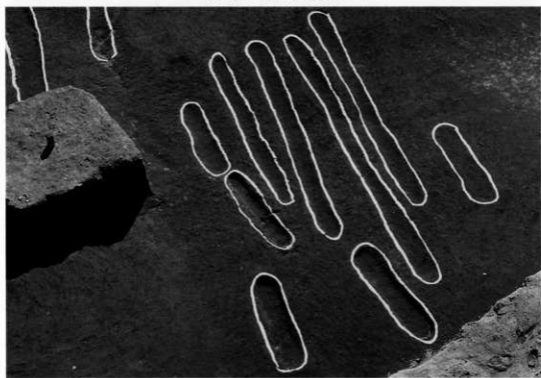
1. 第18·25·26号土坑



2. 第34号土坑



1. 第2号掘立柱建物址



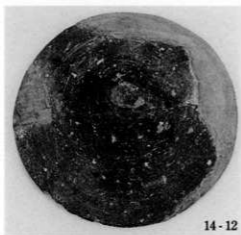
2. 高状遺構



住居址出土遺物 (1)



住居址出土遺物 (2)



住居址出土遺物 (3)



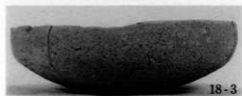
住居址出土遺物 (4)



住居址出土遺物 (5)



住居址出土遺物 (6)



住居址出土遺物 (7)



住居址出土遺物 (8)





住居址出土遺物 (10)





住居址出土遺物 (12)

報告書抄録

フリガナ	タカヤナギハライセキ B・Cチテン							
書名	高柳原遺跡 B・C地点							
副書名	町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書					巻次	34	
シリーズ	児玉町文化財調査報告書					巻次	第39集	
編著者	徳山寿樹・松澤浩一							
編集機関	児玉町教育委員会							
所在地	〒367-0298 埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368番地 TEL 0495-72-1331							
発行日	2005年(平成17年)3月22日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 (°'")	東経 (°'")	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
高柳原遺跡 B地点	児玉郡児玉町 大字高柳字原他	113824	083	36°10'41"	139°07'06"	20010123 ┆ 20020227	446㎡	中山間 総合整備
高柳原遺跡 C地点	児玉郡児玉町 大字高柳字原他	113824	083	36°10'35"	139°07'06"	20011101 ┆ 20020227	3594㎡	中山間 総合整備
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
高柳原遺跡 B地点	集落	奈良時代	竪穴住居 1 土壌 10 溝 4 鍛冶関連遺構 1	土師器、須恵器		覆土に鍛造片を多く 含む土壌を検出した。 (鍛冶関連遺構)		
高柳原遺跡 C地点	集落	古墳時代 奈良時代 平安時代	竪穴住居 22 土壌 18 溝 7 掘立柱建物 2 高状遺構 1	土師器、須恵器		古代の高址を検出した。		

児玉町文化財調査報告書第39集

高柳原遺跡

町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書34

平成17年3月18日印刷

平成17年3月22日発行

発行者 児玉町教育委員会

埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368

印刷所 たつみ印刷株式会社

埼玉県深谷市東大沼356

